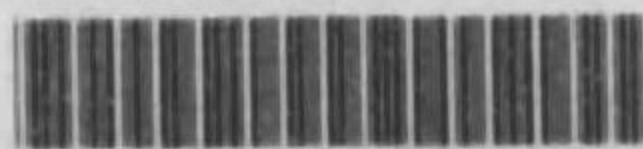
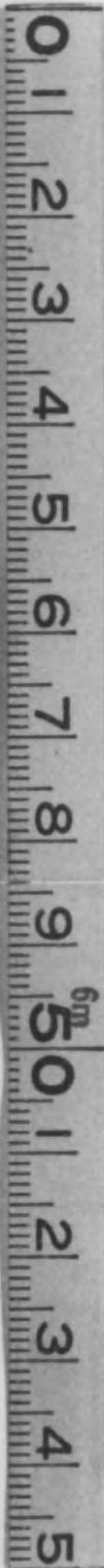


919.4-Ki687



1200500759467

9.4
68



始



620

919.4
KI.68

北村澤吉著



五山文学史稿

東京 富山房藏版



序

五山文學史稿將に刊行されんとす。客あり、怪んで問ひて曰く、今日はこれ何の時ぞや、この非常時局に直面して、この如き閑文字を弄し、閑事業に従事する、豈に迂濶なる無からんやと。闢然子應へて之に告げて曰く、吁君見すや。道の遠きは迂にして達し、事の忙なるは閑にして之を成す。我が建國武を以てせしより三千年、文は閑事として度外に在るべきがごとし。然り而して、皇祖の神勅皇宗の大詔、萬古炳耀、奈良平安の諸詔勅より明治の教育勅語等と共に、兆民誰か永く之を仰がざる。支那事變鐵火の激烈なる數年を経て未だ熄まざるも、期する所は東亞文化の興隆に在るにあらずや。第一線に在る者は外を強化し、銃後に在る者は内を強化す。是れ通論なり。蒼々たる生民、各々其の天職なからんや。萬民をして齊しく皆筆翰を投じ、鋤犁を擲ちて戎軒を事とせしむるは、秦皇霸道の暴戾なり。建國の時、漢武海外の統制、東亞事無かりしにあらず。隋唐交通の間、往來閑なりしとせず。而して吾邦の文化は、武威とともに此中に創始開拓せられたり。其の機を得るごとに、文武互ひに相携へて一武一進、發展窮まりなきは、東方地靈に人傑なるの致す所たらすんばあらず。拙著卑微、固より此の如きの大に比するに足らずと雖も、亦竊に自ら任ずる所、此を出でず。則ち閑事も未

だ全く閑事たらず。非常の中亦非常の事あるは凡庸の知らざる所、顧るに足らんや。予や天寵により斯世に在りて閑事に従ふこと數十年、此頃四大疲憊、氣息奄々、命殆ど旦夕に逼る。

幸か不幸か、少壯時起草の稿本數部あり、元來觀るに足らざる一雞肋たるも、亦若干予の神氣の通せしもの、未だ其の眉目を一見せずして徒に闇より闇へ、塵埃の如くに逝かしむるに忍びず。乃ち餘生の一端を割いて其の閑事業の資に充つるも、亦可ならずや。若し夫れ彼の第一線に在るの士に浙江南京の間半日の散策に、中巖・絶海等當時數百に上れる先輩詩僧の遺蹤を尋ね、或は重慶より泯江を逆り、雪村の長歌を高誦しつゝ深く雲中に進入するが如き機會もあらんには、天外萬里、其の幽興果して幾許ぞや。必ず知る其の武も亦決して文を外にせざることを、と。客呵々、唯々として退く。乃ち書して序と爲す。

昭和十六年八月一日

土佐・立田・日章園閑居にて

關 然 澤 吉 識

五山文學史稿目次

總 論 (一)

第一篇 鎌倉期 (一六)

山 内 (一六)

第一章 圓 爾 (一六)

第一節 傳 記 (一六)

第二節 著述及び詞藻 (二二)

第二章 蘭 溪 (二二)

第一節 傳 記 (二二)

第二節 著述及び詞藻 (二四)

第三章 子 元 (二七)

目 次 (二七)

第一節 傳 記……………(二七)

第二節 著述及び詞藻……………(三〇)

第四章 大 休……………(三四)

第一節 傳 記……………(三四)

第二節 著述及び詞藻……………(三四)

第五章 高 峯……………(三七)

第一節 傳 記……………(三七)

第二節 著 述……………(三七)

第六章 南 浦……………(三九)

第一節 傳 記……………(三九)

第二節 著述及び詞藻……………(四一)

第七章 鏡 堂……………(四二)

第一節 傳 記……………(四二)

第二節 著 述……………(四二)

第八章 一 山……………(四三)

第一節 傳 記……………(四三)

第二節 著述及び詞藻……………(四六)

第九章 西 澗……………(四八)

第一節 傳 記……………(四八)

第二節 著述及び詞藻……………(四九)

第十章 規 庵……………(五〇)

第一節 傳 記……………(五〇)

第二節 著述及び詞藻……………(五一)

第十一章 鐵 庵……………(五四)

第一節 傳 記……………(五四)

第二節 著述及び詞藻……………(五四)

第十二章 東 明……………(五八)

第一節 傳 記……………(五八)

第二節 著述及び詞藻……………(六〇)

第十三章 清 拙……………(六二)

第一節 傳 記……………(六二)

第二節 著述及び詞藻……………(六四)

第十四章 天 岸……………(六六)

第一節 傳 記……………(六六)

第二節 著述及び詞藻……………(七〇)

第十五章 明 極……………(七二)

第一節 傳 記……………(七二)

第二節 著述及び詞藻……………(七三)

山 外……………(七七)

第一章 足利學校……………(七七)

第二章 金澤文庫……………(七七)

第三章 朝廷儒者……………(七九)

第二篇 吉野朝期……………(七九)

山 内……………(七九)

本 紀……………(七九)

第一章 虎 關……………(七九)

第一節 傳 記……………(七九)

第二節 著 述……………(八四)

第三節 學 風……………(一〇三)

第四節 思 辨……………(一二九)

第五節 史 論……………(一三五)

第六節 文……………(一四〇)

第七節 詩……………(一五四)

第八節 四 六 法……………(一五九)

目 次……………(一五九)

第二章 雪 村……………(一六五)

 第一節 傳 記……………(一六五)

 第二節 著述及び詞藻……………(一七〇)

第三章 別 源……………(一八〇)

 第一節 傳 記……………(一八〇)

 第二節 著述及び詞藻……………(一八七)

第四章 夢 巖……………(一九五)

 第一節 傳 記……………(一九五)

 第二節 學 術……………(一九六)

 第三節 文……………(一九八)

 第四節 詩……………(二〇一)

第五章 中 巖……………(二〇六)

 第一節 傳 記……………(二〇六)

 第二節 著 述……………(二二三)

第三節 學 說……………(二一八)

第四節 性 格……………(二三〇)

第五節 詩……………(二三九)

第六節 文……………(二五二)

第六章 鐵 舟……………(二五六)

 第一節 傳 記……………(二五六)

 第二節 著述及び詞藻……………(二五七)

第七章 天 境……………(二六二)

 第一節 傳 記……………(二六二)

 第二節 著述及び詞藻……………(二六四)

外 紀……………(二七二)

第一章 夢 憲……………(二七二)

 第一節 傳 記……………(二七二)

 第二節 著 述……………(二七六)

第二章 嵩山……………(二七七)

 第一節 傳記……………(二七七)

 第二節 著述及び詞藻……………(二七九)

第三章 蒙山……………(二八一)

 傳記……………(二八一)

第四章 無極……………(二八二)

 傳記……………(二八三)

第五章 大智……………(二八四)

 第一節 傳記……………(二八四)

 第二節 著述及び詞藻……………(二八六)

第六章 不聞……………(二八八)

 傳記……………(二八八)

第七章 寂室……………(二九〇)

 第一節 傳記……………(二九〇)

 第二節 著述及び詞藻……………(二九二)

第八章 竺仙……………(二九八)

 第一節 傳記……………(二九八)

 第二節 著述及び詞藻……………(三〇〇)

第九章 石室……………(三〇七)

 第一節 傳記……………(三〇八)

 第二節 著述及び詞藻……………(三一〇)

第十章 龍山……………(三一三)

 傳記……………(三一三)

第十一章 乾峯……………(三一四)

 第一節 傳記……………(三一四)

 第二節 著述及び詞藻……………(三一五)

第十二章 無涯……………(三一九)

 傳記……………(三一九)

第十三章 無文……………(三九)

 第一節 傳記……………(三九)

 第二節 著述及び詞藻……………(三二)

第十四章 此山……………(三四)

 第一節 傳記……………(三四)

 第二節 著述及び詞藻……………(三五)

第十五章 友山……………(三八)

 傳記……………(三八)

第十六章 龍泉……………(三九)

 第一節 傳記……………(三九)

 第二節 著述……………(四〇)

第十七章 東陵……………(四一)

 傳記……………(四一)

第十八章 蘭洲……………(四二)

第三篇 室町期(上半期)……………(三四五)

山内……………(三四五)

本紀……………(三四五)

第一章 (合説)五山文學に於ける學僧義堂と詩僧絶海……………(三四五)

第二章 汝霖……………(四三)

 第一節 傳記……………(四三)

 第二節 著述及び詞藻……………(四七)

山外……………(三四一)

第一章 玄惠……………(三四一)

第二章 北畠親房……………(三四四)

第四章 如心……………(四九)

第一節 傳記……………(四九)

第二節 著述及び詞藻……………(四一〇)

第五章 椿庭……………(四三七)

傳記……………(四三七)

第六章 伯英……………(四四四)

傳記……………(四四四)

第七章 天祥……………(四四五)

第一節 傳記……………(四四五)

第二節 著述……………(四四七)

第八章 觀中……………(四四七)

第一節 傳記……………(四四七)

第二節 著述及び詞藻……………(四五三)

第九章 惟忠……………(四五七)

第一節 傳記……………(四五七)

第二節 著述及び詞藻……………(四五九)

第十章 古劍……………(四六四)

第一節 傳記……………(四六四)

第二節 著述及び詞藻……………(四七四)

第十一章 太白……………(四七六)

第一節 傳記……………(四七六)

第二節 著述及び詞藻……………(四八二)

第十二章 仲芳……………(四九一)

第一節 傳記……………(四九一)

第二節 著述及び詞藻……………(四九三)

第三節 四六文法論……………(五〇七)

外紀……………(五〇九)

第一章 龍湫……………(五〇九)

第一節 傳記……………(五〇九)

第二節 著述及び詞藻……………(五一四)

第二章 春屋……………(五一六)

第一節 傳記……………(五一六)

第二節 著述及び詞藻……………(五二〇)

第三章 性海……………(五二九)

傳記及び詞藻……………(五二九)

第四章 太清……………(五三二)

第一節 傳記……………(五三二)

第二節 著述……………(五三六)

第五章 愚中……………(五三七)

第一節 傳記……………(五三七)

第二節 著述及び詞藻……………(五四〇)

第六章 空谷……………(五四四)

傳記及び詞藻……………

(五四四)

第七章 雲溪……………

(五四九)

第一節 傳記……………

(五四九)

第二節 著述……………

(五四九)

第八章 大象……………

(五五〇)

傳記……………

(五五〇)

第九章 東漸……………

(五五一)

傳記……………

(五五一)

第十章 大岳……………

(五五二)

傳記……………

(五五二)

第三編 室町期(下半期)……………

(五五三)

山内……………

(五五三)

第一章 玉腕……………

(五五二)

第一節 傳記……………(五五三)

第二節 著述及び詞藻……………(五五五)

第二章 心華……………(五五六)

傳記……………(五五六)

第三章 鄂隱……………(五五七)

第一節 傳記……………(五五七)

第二節 著述及び詞藻……………(五六三)

第四章 西胤……………(五七一)

第一節 傳記……………(五七二)

第二節 著述及び詞藻……………(五七四)

第五章 儼仲……………(五七九)

傳記……………(五七九)

第六章 石屋……………(五八〇)

傳記……………(五八〇)

第七章 惟肖

肖……………

(五八一)

第一節 傳記

記……………

(五八一)

第二節 著述及び詞藻

藻……………

(五八四)

第八章 岐陽

陽……………

(六〇〇)

第一節 傳記

記……………

(六〇〇)

第二節 著述

述……………

(六〇二)

第三節 學術

術……………

(六〇四)

第四節 文藻

藻……………

(六一〇)

第九章 曇仲

仲……………

(六一五)

傳記

記……………

(六一五)

第十章 心田

田……………

(六一六)

第一節 傳記

記……………

(六一六)

第二節 著述及び詞藻

藻……………

(六一七)

第十一章 江西

西……………

(六二二)

第一節 傳 記……………(六三)

第二節 著述及び詞藻……………(六三)

第三節 四六法……………(六六)

第十二章 瑞岩……………(六九)

第一節 傳 記……………(六三〇)

第二節 著述及び詞藻……………(六三一)

第十三章 信 中……………(六三二)

第一節 傳 記……………(六三二)

第二節 著述及び詞藻……………(六三二)

第十四章 雲 章……………(六三四)

第一節 傳 記……………(六三四)

第二節 著 述……………(六三五)

第十五章 東 沼……………(六三五)

第一節 傳 記……………(六三五)

第二節 著述及び詞藻……………(六三六)

第十六章 南 江……………(六四〇)

第一節 傳 記……………(六四〇)

第二節 著述及び詞藻……………(六四〇)

第十七章 翺 之……………(六四五)

第一節 傳 記……………(六四五)

第二節 著述及び詞藻……………(六五〇)

第十八章 瑞 溪……………(六六一)

第一節 傳 記……………(六六一)

第二節 著 述……………(六六三)

第十七章 一 休……………(六六四)

第一節 傳 記……………(六六四)

第二節 著 述……………(六六五)

第二十章 桃 隱……………(六六六)

傳記……………(六六六)

第廿一章 雪江……………(六六七)

第一節 傳記……………(六六七)

第二節 著述及び詞藻……………(六六九)

第廿二章 村庵……………(六七〇)

第一節 傳記……………(六七〇)

第二節 著述及び詞藻……………(六七四)

山外……………(六八九)

第一章 足利學校……………(六八九)

第二章 朝廷儒者……………(六九〇)

第三章 卜部兼俱……………(六九一)

第四篇 室町末造期(至戰國)……………(六九二)

上半期 足利末造期……………(六九二)

第一章 季弘……………(六九二)

傳記……………(六九二)

第二章 天隱……………(六九三)

第一節 傳記……………(六九三)

第二節 著述及び詞藻……………(六九三)

第三節 四六圖……………(六九六)

第三章 了庵……………(六九九)

傳記……………(六九九)

第四章 横川……………(七〇一)

第一節 傳記……………(七〇一)

第二節 著述及び詞藻……………(七〇四)

第五章 九鼎……………(七一七)

第一節 傳記……………(七一七)

第二節 著述及び詞藻……………(七一七)

第六章 九淵……………(七一九)

傳記……………(七一九)

第七章 正宗……………(七二〇)

第一節 傳記……………(七二〇)

第二節 著述及び詞藻……………(七二九)

第八章 蘭坡……………(七四一)

第一節 傳記……………(七四一)

第二節 著述……………(七四二)

第九章 東陽……………(七四二)

第一節 傳記……………(七四二)

第二節 著述及び詞藻……………(七四三)

第十章 周興……………(七四六)

第一節 傳記……………(七四六)

第二節 著述及び詞藻……………(七四七)

第十一章 益之……………(七五五)

傳記……………(七五五)

第十二章 景徐……………(七五五)

第一節 傳記……………(七五五)

第二節 著述及び詞藻……………(七五八)

第十三章 琴叔……………(七六七)

第一節 傳記……………(七六八)

第二節 著述及び詞藻……………(七六八)

第十四章 月舟……………(七七〇)

第一節 傳記……………(七七〇)

第二節 著述及び詞藻……………(七七〇)

第十五章 常庵……………(七八五)

第一節 傳記……………(七八五)

第二節 著述……………(七八七)

第三節 四六語……………(七八七)

第十六章 雪嶺……………(七八九)

第十七章 梅屋……………(七八九)

第十八章 萬里……………(七八九)

第一節 傳記……………(七八九)

第二節 著述……………(七九〇)

第十九章 策彥……………(七九〇)

第一節 傳記……………(七九〇)

第二節 著述及び詞藻……………(七九八)

第三節 四六圖及法……………(八〇一)

下半年 戰國期……………(八一〇)

第五篇 地方分布期……………(八一)

附 錄

吸江文學……………(八二)

南學史を讀んで義堂の郷友を偲ぶ(關田駒吉少將)……………(八三五)

五山開版刻書考略……………(八六九)

五山文學消長七期表……………(八七二)

農尾文學……………(八七四)

西學(山口文學)……………(八七四)

肥筑文學……………(八七四)

薩學……………(八七五)

南學……………(八七五)

五山文學史稿目次終

總論

五山文學の世に知られざるも亦久し。徳川氏三百年間の思想界を獨占せる所の儒教は、五山文學が其の常に抵排する佛徒の手によりて成れるの故を以て、空しく之を荒寺殘院の一隅に閉鎖し、古塵堆裏に埋没せしめて世に顯はるゝことを許さず。今や儒佛内外の小町畦を脱却して古今を商榷し、須らく之が中正の批判を試むべきの機會に到達したりと雖も、猶且彼の保元平治以來四百幾十年の天地を蔽ひて飛揚せし兵塵は觀察討究の人目を眩迷せしむる者ありて、未だ容易に五山山深き處に閉藏せる異彩爛然の文學に注視し難きもの無きに非ず。されば殊に其の文運の後末、殆んど二世紀が間の如きに至りては、所謂戰國時代の稱呼の下に無文無明の暗黒視せられ、或は彼の歐洲中世紀上半に於けるダークエージの昏昧を將て擬せられんとするに至る。幸にして偶ま好古新識の云爲に與かること無きに非ずとするも、亦唯に彼のダークエージに於てベネチクトの僧徒が爲せし事業と同一視せられ、僅かに古來文運の餘命を香烟一縷の中に維持せしと見做さるゝに過ぎず。安ぞ復た能く其の内容の何如、

發達の何如、影響の何如を闡明するを得ん。恰も是れ鎌倉京都五山叢林の間に古色蒼然として錯落せる古刹殘塔は、長く遊人が仰視懷舊の料に供せらるゝと雖も、中に潛みし幾多大智碩徳が行迹に至りては苟も拜佛崇法の列に非ざる人の爲めには、却て全く等閑に附し去られ、敢て顧視せられざるが如き者歟。惜まざるべけんや。

夫れ鎌倉以後の文學は漸く細流の中に歸せんとするの勢あり。長明・西行其の始に鳴りしより、兼好・頓阿の輩、平家作者の流之に次ぎ、五山以外に於ける佛敎的數字は既に頗る時代の傾向を示す者あり。然れども鎌倉及び南北朝の二代に於ては、此の外に彼の千載・新古今・新勅撰より新後撰・續千載等に至る歌集を續出せしめし京都臺閣的精華の猶ほ殘芳を放ちしを見る可く、更に之を儒學の方面に觀ば、連綿傳來の明經文章の江菅諸家の後裔漸く凋零に歸せしも、猶ほ栗田口儒者として鎌倉武家の爲めに敬迎せられし者あり。室町頃には講説に雄辯を以て一時に鳴れる船橋業忠の如き、將た又自から菅丞相より三長所を有すと傲れる該博多通の一條禪閣の如き、問々人の注意を惹くに足る可き莫かりしとせず。然れども當時朝廷儒者の學問は死學なり。彼等は單に古來の典故に精を得たるのみ。世に働き事に應ずるの活力に至りては既に全く滅絶せるなり。彼の菅原爲長が大相國の前に出でて僧圓爾と儒佛兩道の優劣を對論し、孔子よりの系統幾世なるやを反問せられたるに箝口し、他に言を得ずして退き

しが如き、彼等の氣力なく能力無きこと鎌倉時代よりして既に然りしを示すに非ずや。之に反して細流の學は新なる活氣に滿されて、日に駸々たるを見る。例せば彼の北條顯時によりて建てられたる金澤文庫は、應仁の亂後猶釋奠の禮を擧げ、而して此に出入したるものは全く五山の禪僧なりきと傳へらるゝに非ずや。且つ之を再興したる上杉氏の祖先は、曾て鎌倉管領として常に禪僧の教を蒙りし者なり。又彼の古書逸篇を藏するを以て名ある足利學校を再興したりと稱せらるゝ足利基氏は、今將に紹介せんとせる禪僧義堂を奉じて師事したりし者に外ならず。細流の當時文敎に關係あること如此深く更に禪徒の之に力あること如此大なり。而して禪徒の冥想し諷誦し鍛鍊し陶冶するの叢林は五山の中に在り、五山の中に於て蕪蓄せられ咀嚼せられたる文學は之を十刹に及ぼし、十刹は更に之を布きて天下に普ねからしむ。其の脈絡の貫通し呼應し以て時代の風潮を鼓動するに便益ある、復た彼の孤絶的臺閣的文學の能く比し得べくもあらず。

鎌倉五山

一、建長

二、圓覺

三、壽福

四、淨智
五、淨妙

關東十刹

- 一、禪興
- 二、瑞泉
- 三、東勝
- 四、萬壽
- 五、東漸
- 六、善福
- 七、大慶
- 八、興聖
- 九、法泉
- 十、長樂

京都五山

(五山の上、南禪)

- 一、天龍
- 二、相國
- 三、建仁
- 四、東福

五、萬壽
京都十刹

- 一、等持
- 二、臨川
- 三、真如
- 四、安國
- 五、寶幢
- 六、普門
- 七、廣覺
- 八、妙高
- 九、大徳
- 十、龍翔

(時代の遷るにつれて多少の變更はあれど大體は是なり)

且や鎌倉より新に勃興したる禪宗に随つて起れる新なる文物は新なる思潮を生じ、新なる面目を開くに於て極めて適當したりし也。而して之が新要素としては、相次いで歸化せし文字學問ある高僧蘭溪、無學、一山、西澗、東溟等の宋元文化を輸入する有り。我よりも亦彼土に渡りし者極めて多く、室町氏が明との交通は頗る頻繁となり、新奇の傳來は更に加はれり。而して幕府が此の交通の使節を撰ぶや一に之を五山禪徒文字ある者の間に於て爲し、且其の内治顧問に供せらるゝ者も亦此等の禪徒なりしかば、一面よりして之を見ると、幕府が外務、内務、文部等凡て天下政教の實權は五山禪徒の掌

中に歸したりし也。されば苟も武事争鬪を好まずして政治的才幹を抱ける者、文學的技能を有せる者等に向つては、五山は實にその登る可き唯一の龍門たりし也。故に此に入る者を指して必らずしも武夫の跳梁を避け、或は殺逆の悲觀に厭世の情を起して佛門に逃れ來れる者と云ふべからず。又必らずしも受性空寂を愛し坐禪を好む不立文字本色の僧侶と見做す可からず。各種の人才は雜然として集まり來り、五山の間に出没して各其の長所をば發揮せんと欲する也。而して之を爲すには皆極めて平和の方法に依らんと欲す。即ち武を偃せて文に反さんと欲する也。故に幕府及び諸侯に向うて干戈を收めしめんが爲に、慈心に訴へて法を説き、徳化に依らしめんが爲めに道念を導きて學を勸め、文物を入れしめんが爲めに交通を盛にして國を開かしむ。而して疎暴なる將軍武骨なる諸侯は、反つて性相遠き五山僧徒を崇愛して又之を保護せり。故に彼等は社會に對して生氣あり活力ある働を爲すを得たりし也。然れども世は尙ほ武夫の天地なり。争亂は已みて復た起る。彼等が盡瘁も未だ其の効果を現ること能はざるなり。特に政事の如き竟に紛擾錯亂を免れず。爲めに室町に於ける義堂、空谷等は徳川に於ける惺窩羅山等に配すべきも、義堂等が後には竟に徂徠白石を得ること能はざりき。而かも彼等は別に超然世塵を脱せる叢林の別天地を有せり。泉水靈にして掬す可く、風月清くして嘯く可し。於是乎五山の文學は世の紛亂に關せずして蔚然として興りぬ。

宋元文化の鎌倉に流れ入りしより、我邦學界風潮の趨向如何は略之をトするに難からず。室町に至りて明初の文運に接觸せりと雖も、宋元文化の輸入の影響は更に盛なる者あり。虎關の韓文に於ける、中岩の揚子に於ける、雪村の莊子に於ける、一庵の柳文に於ける、或は絶海の唐詩に於ける等、個人に就いて見れば宋元以外に逸出せる者無きに非ざるも、一般の傾向に至りては宋元なりと云はざるを得ず。其の宋元と云ふは裏面に雄健清新の風潮あるを指すもの也。故に間韓柳を混へ莊揚に及ぶも、文體に於ては氣格を備へ思想に於ては脱落を養ふに就き、更に一般の風潮に妨礙無きのみならず、彼の六朝綺麗の風を受けて整細なる體裁の見るべきなく、盛唐を摸すと雖も徒に元薄白俗の餘味を味ふのみにして更に李杜韓柳雄渾の氣格なかりし王朝の氣風を一洗し、且つ薄弱平板なる精神的思想を除却し、更に之に加ふるに幽玄深遠の眞諦を以てしたるが如き、時代の新面目を顯はすに與りて頗る力ある者也。要するに剛健にして清新なるは五山文學の特性にして、是れ禪宗の直截にして活機を尊ぶに因りて養はれたる也。即ち一種の活力を以て支那文化を吸収し咀嚼し脱胎せしめたり。其の吸収せし者は詩文也。其の咀嚼せしものは宋儒程朱の學也。其の脱胎せしものは謠曲是也。

今先づ其の吸収せし詩文に就いて見んか、亦一般宋元の氣風を脱すべからず。而も全く王朝貴族的臺閣的餘習を絶てり。頼山陽曾て謂へらく、國朝詩運兩開兩壞、猶文章也、初壞於長慶體、後壞於萬曆

體、中間爭亂不暇爲中晚宋元也、五山僧侶頗爲瘦硬絕句、其中巨擘有若義堂絕海、頗雄奇、有臺閣儒紳不_レ及處、當時王霸盛衰、渠輩冷眼傍觀、頗形_二之吟詠、含有_二譏諷、又非近時士君子徒鏤_二刻風月_一爲無益詩_一比也。是れ單に詩を評し且つ絶句に限りたる者也。其の五山を推重するや則ちよし、其の絶海を以て瘦硬となし絶句作者の巨擘と稱するが如きは非也。而して中間爭亂中晚宋元に暇あらずして此に五山を擧げ、五山を以て中晚宋元に配せんとするが如くにして、只に瘦硬の絶句云々と説く要旨竟に求む可からず。以て精論と爲し難き也。龜田綾瀬に至りては言稍明瞭、曰く、藏經東流、高僧鉅緇、代作並出、關_二揚宗風_一、外、擒_二翰吐_一辭、其言高古、固非末學所_二能優劣_一也、弘安應永間、義堂絕海、策_二師鍊_一諸老宿駢起、其風調格律、皆師_二晚唐_一、雖_レ乏_二冲和之音_一、沉澹之思、終是足_レ稱_二宗工_一也、云々。五山を尊崇することは更に山陽に過ぐ。而も雪村、天祥、機先等を措きて策彦、師鍊を取れるは既に其の撰を誤り、その皆晚唐を師とすと言ふに至りては最も不可也。要するに五山の詩は家を以て論ずると時を以て論ずるとによりて甚だしき差異なき能はず。是れ常に支那と往來する者の絶えずして、而して支那は恰も宋元明三代更移の時に際したれば也。故に絶海の如き元末明初雄渾の氣格を傳へて、中晚唐を兼ねて更に盛唐を凌ぎ、以て家を立つる者あり。而して其の門下には多く中晚を宗とせる者あり。されど時を以て之を見れば、鎌倉に輸入されたる宋元蘇黃等の風潮は、室町に至り義堂等によりて大に鼓動せ

られ、瑞溪、江西、東沼等が室町の末に輩出し、後に明への渡海も漸く衰ふるに及んでは主として前代に輸入せられし者にのみ限るに至れり。蕭菴、東陽、桂菴、策彦の如き以て見つべし。此の餘波は遠く徳川の初代に迄及ぼし、遂に徂徠の逆流に立ちて古文辭を主張するに至れる也。試に當時に流行せる書籍を擧ぐれば、虎關の聚分韻略の編有りしより、周伯弼の三體詩は傳へられ、杜詩を講ずる者は多く、其の抄出本には心華の臆斷の如きあるも、蘇詩抄に至りては、江西の天馬玉津沫、大嶽の翰苑遺芳、瑞溪の腔說、竺雲の河入海の如き頗る多し。萬里には又山谷抄の張中香、東坡抄の天下白等あり。又當時の五山版として傳はる者には北湖集、鐔津文集等より無準虎丘語錄等あり。如何に宋元詩の行はれしやを見る可し。文に於ては古文眞寶、文章軌範は始めて傳へられ、孟子、史記、韓柳の文學最も雄健暢達の筆路ある者愛玩せられたれども、猶ほ王朝に用ゐられたる四六駢儷の體の盛なる者ありしは奇なるに似たり。蓋し是れ禪文體裁の然らしめし者にして、絶海、太白、惟肖等其の巧を極め、而も風神諧暢、絶えて繁縟慨傲の態なきは、亦王朝の作者より一頭地を抜き得たる所也とせん。次に五山が咀嚼したりと謂へる宋儒程朱の學は何如。夫れ宋代の學術が一般佛教と近接の關係を有したりしは明かなる事實にして詩文も勿論特に程朱の學に至りて然りとす。朱子最も禪に耽り禪を以て儒教の本體を説く、其の學說の禪徒の間に入り易かりしも固より其所なり。況して當時朝廷の儒者は

古來訓詁學をのみ是れ襲ぎ、勅許あるに非ずんば程朱の新註を用ふるを許さず。故に清原家に於ては早く頼業の如き、禮記の中より中庸を抄出せしと稱する卓識の士の間と無きにあらずしと雖も、義理の學は竟に明經家の内に多く行はるゝに至らず。又彼等活氣なき精神者流には適切なる學風ならざりしなる可し。されば斯學の進入し得べき又歡迎せらるゝ處は獨り縮流の中にある也。而して斯學の傳來に就きては、古來尺素往來に據りて彼の叡山の玄惠法師が南北朝時代に於て講明せしを以て始とす。傳來の先後の如きは敢て之を争ふの要を見ず。されど若し強ひて之を明かにせんと欲せば、亦玄惠の前に己に鎌倉の五山ありしことを記せざる可からず。五山の内には既に早く程朱性理の學は傳へられ、而して室町に至りて咀嚼闡明せられたる也。鎌倉に歸化せし碩僧、學あり識ある者幾人、而して寧一山を以て之が白眉となす。彼が道風才學は本國たる元に於ても輕視せられざりし者也。而して彼の其の釋典諸部儒道百家より、釋官小説郷談俚語に至るまで綜錯汎濫せざるなきの資を以て、常に叢林禪榻の上に坐して親しく學徒の質義に應じ新進を導きしより、虎關、中岩、夢窓、雪村、龍山、の如き多士濟々其の門下より輩出し、各一山が包藏の一部を得て其の家を爲せり。而して其の程朱性理の學に於ては虎關最も之に妙達し、以爲へらく、仲尼没して一千餘歲、之が美を繼ぎ興す者は獨り周濂溪あるのみと。乃ち初めて斯學を五山の叢林に移植しぬ。義堂は則ち之を受けて出で、單刀 入禪儒の關

係を闡明し、學者をして歸適する所を知らしめんと努めたり。時既に室町の盛時に在りて、惟肖、岐陽、一慶の輩相次いで之を講じ、差別因果の旨義に依りて儒佛不二の經典は成りぬ。是に至りて宋學は全く咀嚼せられたる也。然れども朱子の學はもと圓顯の徒を嫌ふ者にして竟に長く縮衣の中に潜み得る者に非ず。されば若し當時學術の進歩如此にして止らざれば、其の佛界より脱殻して儒に歸する者或は惺窩・羅山の徒を俟たざりしやを保すべからず。若し果して然りしならんには、儒佛兩界の俊豪が相角逐磨勵するの多景多趣なる、安んぞ徳川儒林の單調にして僅かに性理と古學との争の見る可きが如き者にして已まんや。況んや一休、正徹の如き輩は、彼の一山が傳へし釋官小説の中より元戯曲に脱胎して文壇の一隅に別に一種の異彩を加へしとすら言はるゝものあるに於てをや。然るに忽然土を捲いて起りし應仁の大亂は鞞鼓の下を動かして五山の側壁を崩し、禪徒四散して叢林は徒に狐鼠跳梁の荒窟と化し去りぬ。於是乎ダークエージの稱呼は爾後の天下を蔽ひ、軽く史家が一筆の下に掃去せらるゝに至れり。然り五山は崩れたり、されど尙殘壁の遺典は惺窩・羅山を起すに足るものある也。一休、雪江、横川、天隱、蕭庵は、亂後久しからずして相次いで没せしも、東陽、宜竹、雪嶺、月舟、三益、江心、策彦、常庵、絶天、梅屋、琴叔、仁恕、大林等の建仁、相國、南禪、大徳、妙心の間に殘るあり。且つや良知の學祖王守仁の名の初めて了庵によりて傳へらるゝ者もあり。惺窩も初めは五

山に遊び相國に入りて學びし者に過ぎず。此の如くして五山の命脈は繋がれたり。然れども是れ唯に命脈の繋がれしのみ、氣運の衰頹は復た見る可き者無く、若し五山山内を指して暗黒なりと言はゞ、山内の殘院に閉藏せる偶像も亦之を首肯せざるを得ざるべし。然れども若し天下も亦五山山内と同じく暗黒なりと呼ぶに至りては、彼の四方に散亂したりし禪僧は其の雲水の邊に於て、微明の曙光を望んで破顔微笑を洩すものあらんか。

夫れ中世紀の西歐洲に東方の文物を傳達せしは前後數回の十字軍にして、鎌倉室町の兩幕下に支那の文化を輸入せしは宋元明の交通に在りき。而して彼土諸國が漸く學術復興の新動機を得しはコンスタンチノープル陥落の爲め學者袂を聯ねてセントロツヒアの堂を棄て、西奔せしの際に在り。我國諸州が初めて文藝普及の曙光を見はしは、京都井陌の蹂躪せられ群衲錫を飛ばし五山の叢林を出でて四散したるの曉に在るなり。蓋し此の四散したるの群衲は素と坐禪修法のみを是れ事とせし者に非ず。彼等は曾て文筆を弄せし者也。儒道を講ぜし者なりき。政事に與かりし者也。而も亦臨變應機住着自在の妙通を得たる者也。於是乎諸州の諸侯豪族に依りて新に政に參し學を講じ文を論ずることを爲し、又之を爲すを得る也。東に於ては則ち萬里、正宗の江戸の太田道灌に於ける、機雪の相州北條早雲に於ける、希庵快川の甲州武田信玄に於ける、戰國英將が得力の處を見るべし。濃州の武將東常縁は江西

慕哲が姪にして、正宗が兄希庵が父なり。齋藤妙椿は萬里を師とせり。共に文事に達す。凡そ濃尾の間に出沒せる文學の僧は已に土岐氏より多くして絶えず。他日梁川星巖以下幾多の詩人の輩出せし源も遠しと云ふ可し。彼の金澤文庫、足利學校の全く禪徒の手に歸せしこと更に言はず。萬里も曾て文庫に入り、更に諸州を風化し(常に詩文を説き諸州にて三體詩序を作る)、北越、加賀に及べり。其他常、總、野、陸、相、甲、紀、遠、參、勢、丹、江等諸州に隱見せる衲僧枚舉に暇あらざる也。而して此東及び北方に於ては極めて新智識を撥撒し、戰國武將が活潑々地の禪機を養ふに頗る力あり。其の學藝の布かれしは輕便なる詩文和歌謠曲の類を以て先驅としたるに在り。槩を横へて詩を賦する風流の名將をも出したるき。以て此の地方が徳川時代に向へる學術氣運の那邊に在るかを見るべし。之に反して西及南の方に於ては、天隱の播州赤松氏に於ける、細川幽齋の肥州に入れる。稍や東北の趣無きに非ざるも、要するに西南に發達し來りし者は極めて莊重漸進の趣を有して、宋儒程朱が義理の學、名分の教なりき。亦是れ五山禪徒が行化の迹に外ならず。先づ長、防、石、筑等の大封を有せし大内氏が治下の學藝は、惟肖碧山等が振作により、頻りに新書籍の輸入となり、更に朝廷の儒者をも招きて既に早く見る可きものありしが、南禪の桂庵(本貫防州山口人)が惟肖等に學びて程朱の學を受けて國に歸りしより後、此の地は斯學の淵藪となれり。桂庵の明に遊びて更に研鑽を加へて東歸し、應仁の亂後に接して五山に入るを得ず。

夫れ斯くの如くにして五山は常に新要素を咀嚼し新發展をなし、更に之を天下に布遍せしめて、徳川の文教を興起せしめたるを看來りなば、鎌倉以後世に未だ曾て所謂る暗黒時代なる者の存せずして、

ペネデクトの五山に配するの非なるを悟り、彼の聖書以外に智識の出でざりし西歐中世紀と頗る其の趣を異にせる者あるを了するを得ん。たゞそれ五山文學は幾百千年間臺閣的貴族的の氣習を降して江湖的たらしめ平民的たらしめ、能く六十州に分布せしめしが爲め、彼の深殿玉帳の中に瓊翰を弄し錦箋修め來りし華やかなる雲上の面影の忽然として消失するありて、更に之を蔽ふに暗澹紛飛の兵塵を以てせしかば、動もすれば人をして覺えず茫然自から失はしむる者無き能はずと雖も、若し翻りて靜かに彼等碩僧が雨花の靈場を尋ね、方外自在の雲蹤を検して（寺子屋教育等）徳川文運の起點を求め、列藩參差の情景を察するあらば、豁然として思半ばに過ぐるものあらんか。然れども此に之が細説に躊躇するは予が今執筆の目的に違ふ。故に姑く之を措く。唯知るべし、彼の一代の諸豪傑踵を接して草莽の間より輩出し、性理と稱し、古文辭と唱へ、幕學と命じ、勤王と號び、佐幕となり、討幕となり、遂に維新に至り狂瀾怒濤の大奇觀を呈するに至りし其の源頭の活水を探り來りなば、亦唯に此の幽僻なる五山叢林の間坐禪徑行の境に、時に天地の空寂を破りて微音を傳へし谿邊冷々の涓滴たりしに過ぎざることを。（明治三十二年雜誌帝國文學第五卷七、八、九、十二號所載）

第一篇 鎌倉期

山内

第一章 圓爾

氣局弘恢、機鋒銳利、道時と合し術地と順ひ、遂に東方に於ける宋元文化の大源流を啓く。文學の大いに振ふは固より一山・虎關・中巖等を待つと雖も、王朝學術の一轉して叢林に入る者、圓爾實に先づ之が大關頭をなすなり。

第一節 傳記

圓爾、名は辨圓、俗姓は平氏、駿州葦科の人、母明星を探ると夢みて妊むことあり。此より常に天女の相隨ふを夢む。母疑ひ怪しみ、久野山に詣り、堯辯法師に謁して之を質す。辯曰く、懷中恐らくは聖子あらんかと。既に誕れて三歳にして人の言語を聞きて能く是非を辨ず。五歳に方りて母携へて

之を辯師に付す。稍や長じて臺教を學び、早く大義に通ず。十五にして止觀の講席に廁る。講師滯澁の處に至りて爾進みて解釋し、詞義渙然、講師歎稱す。十八にして髮を園城寺に剪り東大寺の戒壇に登る。洛に入りて外學を聽く。又三井に歸りて教乘を綜錯す。已にして禪法を慕ひ上州に往きて釋圓朝に長樂に従ひて教外の旨を問ふ。稽叩する事久し。相州の壽福寺に抵りて行勇禪師に謁す。其の徒大歇心公と問難して心解答に澁る。賴憲僧正なるもの有り。深く教乘を究め三井の大鏡と稱す。

爾と對論して届す。爾笑ひて曰く久しく大鏡と響く、是の鏡鐵に非ずば恐くば瓦なる乎と。爾大藏を閱する事四年にして長樂に歸りて朝公を辭し、嘉禎元年海に浮ぶ。十日を経て明州の界に達す。即ち宋の理宗の端平二年なり。景福院に寓して月宗主の律を談ずるを聽き、天童山に入りて癡絶沖に見え、漸く都下に抵りて、天竺寺の柏庭圓公に謁し優稱を蒙む。又笑翁堪に淨慈に參し、石田薰公に靈隱に謁す。時に退耕寧知賓を司る。爾を指して徑山の無準範に見えしむ。範公一面器許し、尋いで巾瓶に侍せしむ。親薰參詳して遂に大事を了す。一日範爾に告げて曰く、爾學海浩渺我が竹篋下に於て一時に乾枯す、他日歸國すれば、須らく無涓滴の處に於て波瀾を横起し、無勝幢を豎てて吾が道を發揮し、從上乃祖の遺芳を踵いで永く未來際を利すべしと。淳祐元年三月朔夜、範公爾を召し香を燒き謂ひて曰く、你化道の時至れり、早く日南に歸り祖道を提唱せよと。便ち親書の宗派圖を授け上に拈華の

像を畫き、并に密庵祖師の法衣及び自贊の頂相を付す。復た備必らず王公の崇ぶ所とならんと曰ひて、敕賜萬年崇福禪寺の八字を書し、囑して最初の住に此額を掲げしむ。爾拜受して出づ。時に會中の龍象即庵覺、東山日、西巖慧、斷橋倫、簡翁敬、希叟曇等相送つて山下に至り、絶岸湘、雪巖欽は眷々として追うて歸途に至り別を惜しみて別る。孟秋博多に着く。本朝の仁治二年なり。太宰府の湛慧、横嶽山に精藍を規營して即日迎請す。爾乃ち之を崇福と名づけて開堂說法す。肥前の水上山の榮尊、教寺を革めて禪刹となし爾を請ひて開山祖と爲す。壬寅の秋、宋人謝國明承天寺を博多に建て、爾を延きて主とす。有智山の徒衆、爾の禪化を嫉みて承天寺を毀たんとす。執事朝に聞す。寛元癸卯、敕して承天崇福の二寺を陞して官寺と爲して衆僧の濫叨を熄む。爾便はち無準書する所の敕賜の大字を掲げて丕に宗乘を振ふ。四方の學實争うて來り萃まる。湛慧事あり入京して爾の智辯を大相國藤原道家に説く。道家乃ち使を發して聘請し、終日道を問ひ之を僧正に任ず。爾辭して受けず。復た日本國の總講師に補す。爾又辭す。道家重ねて親しく聖一和尚の四字を書して之に授く。唐の代宗の徑山の法欽に國一と賜ふに擬するなり。是より先、道家洛の東南に大伽藍を構へ東大興福の字を取りて東福寺と名付け、將に八宗の衆圖と爲して國家の安寧を禱らんとす。乃ち爾を延請して開山始祖と爲し、其の三子をして弟子の禮を執らしむ。文武百官拜禮相繼ぐ。甲辰の秋、東關に往き長樂に至りて朝公を

觀し、駿州に過りて老母を省し、洛に歸りて月輪の別墅に寓止す。翌歲關に詣りて宗鏡錄を進む。四年道家東福の洪營成る事晚きを以つて普門寺を建てて爾を延きて假居せしむ。丞相藤原兼經爾を請ひて宗鏡錄を講ぜしむ。性相の碩師田憲、真空等座に列して預り聞く。建長甲寅相州に往きて龜谷に館す。北條時頼請うて禪戒を稟け外護と爲る。翌載京に回る。乙卯六月東福落慶、構營都下に冠たり。藤原實經爾を請うて入寺す。正嘉丁巳、後嵯峨上皇爾を龜山宮に召して大乘戒を受け、宮に留むること七日、親から御扇を賜ふ。是歲時頼再び爾を招きて相州に入れて壽福を董せしむ。明庵以來未全の禪規を整頓す。二年皇子大將軍宗尊親王の命によりて洛の東山に主どる。時に寺回祿に嬰りて諸堂索然たり。爾遷りて二年にして殿堂咸舊觀に復す。弘長辛酉相陽に往きて兀庵の建長に住するを賀す。文永の初詔ありて法成、天王、尊勝の三大刹の事を幹す。大相國堀河源基具、三教の主旨を問ふ。爾其の要略を述べて之を呈す。諫議菅原爲長は時の儒宗たり。常に釋氏を厭す。一日偶々莊嚴藏院に會す。兼經曰く、兩雄相遇ふ、願はくば儒釋の論を決せよと。爾曰く、承はり聞く、菅公儒術に従事すと、然るや不や。爲長曰く、然り。爾曰く、我が法の中佛々手を授け祖々相傳ふ、師授に因らざれば虛設と爲る。某甲は世尊より五十五世達磨より二十七葉、強弩の窮矢魯縞を穿たずと雖も猶、系授を以つて釋氏と稱す。釋を以て儒に例するに亦當に此の如くなるべし。知らず公の孔子に於ける幾世を得たるやと。

爲長口を箝して退き人に謂つて曰く、爾師と儒佛を論ぜんとするに、彼詰るに世系を以つてす。我已に重圍の中に陥れりと。今想ふに此事殆んど一時坐上の戲談に過ぎざるが如し。然るに當時儒佛消長の情勢隱々として此等の處に於て見るべきなり。六年東大寺の幹事を領す。八年總州別駕源滿氏實相寺を參州に建て爾を請ひて開山祖とす。壬申の春、後嵯峨上皇不豫、爾を召して法を聽く。弘安三年春、疾を示す。夏、常樂庵に移る。龜山上皇、官醫を遣はして診せしむ。丞相藤原實經山に入りて問候し信宿して回る。十月十六日行者に命じて房宇を灑掃せしむ。晚間客來り宗旨を問示す。夜已に深更にして使を藤丞相に馳せて辭を告げ、左右に問ひて曰く今幾時ぞ。曰く雞已に鳴けりと。爾乃ち椅に登り端坐す。諸徒遺偈を乞ふ。便ち書して曰く、利生方便、七十九年、欲知三端的、佛祖不傳と。筆を投じて化す。龜を留むること三日顔色常の如し。全身を常樂庵に瘞む。緇白來り哭して聲山叢を撼かす。爾、器量宏遠、性諧調を好む。沙彌童行と雖も輒語爾汝す。槌拂を乘るに暨んでは舳稜近づき難し。室中理致・機關・向上の三科を擧して以て學者に接す。八字の奥義を究めて智辯無礙。性相の講者來りて禪要を問へば、先づ其所蘊を詰る。彼早く口を箝めば、爾曰く子未だ教乘を委せず、豈に別傳を問ふに堪へんやと。故に教より禪に歸するもの多し。文曆中、高麗國王、爾の道義を聽き貢船に附し書幣を齎らして法語を求む。爾、宗教の大意を書して之に答ふ。其の徑山に在りし時、侍局に居ると雖も、無準只だ

爾老と呼べり。正和の初敕して國師の徽號を賜ふ。本朝の國師は爾より始まるなり。虎關贊して曰く、禦外侮一而立正宗、整教綱一而提禪綱、蓋復三祖道之時一者と。鐵牛（心）年譜を作り岐陽（秀）梓に上す。門弟子を度する事無慮千萬人、其法を嗣ぎて一方に據る者、東山堪照、三聖萬壽兩寺を創む。無關門普南禪の第一祖と爲る。白雲（慧曉）語錄あり。癡元（大慧）枯木集及び十手訣あり。南山（士雲）語錄あり。偈頌を工みにす。東洲（至道）元國都に在りて大覺寺を創む。無住（道曉）沙石集及び聖財集あり。

第二節 著述及び詞藻

圓爾語錄一卷あり。元徳三年虎關の輯刊する所、元和六年年譜と共に再刊せらる。（今共に大日本佛教全書にあり）。語錄は略其體裁を具ふるのみ。今其の偈頌二三を録すること下の如し。

春空春水起蒼龍、飛上雲衢歩々通、風雨無私隨處施、須知四海一雷同。賀新命定慧圻長老（方庵）

妙在佛祖不傳處、高超理致去機關、去機關兮沒窠臼、水是水兮山是山。示藤丞相

秋空如水水如空、衲子茲時活路通、直向孤峯峯頂上、草庵盤法展家風。送僧

第二章 蘭 溪

圓爾歸朝の後五年にして東來し、鎌倉叢林の基礎を築き、文學禪學の大緒を發せる者を蘭溪と爲す。

第一節 傳 記

蘭溪名は道隆、姓は冉氏、宋の西蜀涪江の人。童稚にして俊邁。年方に十三にして成都の大慈寺に投じて薙髮稟具す。初め講肆に遊びしも、棄て去つて浙に入りて無準範、癡絶冲、北磻簡の諸大老に謁して參究し、又陽山に届りて無明性禪師の鑑下に依る。辭して明州の天童山に止まる。嘗て人の日本に教説盛にして禪宗乏しと言ふを聞きて常に遊化に志あり。淳祐六年、日本の商舶來遠亭に在り。隆往いて之を浮橋頭に見る。忽ち偉人あり。隆に謂つて曰く、師の緣東方に在り。時已に至れりと。言ひ訖りて見えず。溪乃ち義翁龍江等の數神足を率ゐて海に泛んで太宰府に著く。本朝の寛元四年なり。時に年三十三。筑の圓覺に寓す。明年都城に入りて泉涌寺の來迎院に憩ふ。院主智鏡は宋に在りての舊交にして待遇甚だ腆く、指して相陽に赴かしむ。時に大歇心公龜谷山に住す。溪錫を席下に掛く。北條時頼之を聞きて大に喜び、迎へて常樂寺に居らしめ、軍務の暇に、駕を命じて道を問ふ。建長壬子の冬、府城の東に大伽藍を營して巨福山建興國禪寺と號し、溪を請じて開山初祖と爲し、兼て莊田若干畝を施す。人傑に地靈に海内奔湊す。居ること十三年。詔ありて維の建仁に遷る。都下の緇素香華瞻禮す。開山明庵の忌辰の上堂に曰く、蜀地雲高扶桑水快、前身後身一彩兩賽、昔年今日死而不

と、今日斯晨在而不_レ在、諸人還知_レ落處_二麼、香風吹萎_レ花更雨新好者、と。是に於て寺衆益々畏敬を加ふ。後嵯峨上皇其の道譽を欽して宮中に召見す。溪偈を進めて曰く、夙緣深厚到_二扶桑、忝_レ主_二精藍_一十五霜、大國八宗今鼎盛、建禪門廢仰_二賢王_一と。上皇其の護宗の志篤きを感ず。三禪を歴て關東に返る。北條時宗禪興寺を開きて居らしむ。何ばくもなくして建長に還る。其の大室の後に松樹あり。一日其の枝垂れて室に及ぶ。衆僧疑ひ訝り、流言延いて起り、遂に讒に遭ひ甲州に謫せらる。居ること三載にして鎌倉に歸り龜谷山を主どる。已にして流言復起りて再び甲に移る。幾ばくならずして又召還せられて壽福に居る。時宗親ら入室參禪して弟子の禮を執る。弘安元年再び建長に旋る。時宗別に精藍を營して開山と爲さんと欲し、一日相偕ひて郊外に出で、鏝を將つて地を鋤き莖艸を挿んで圓覺の基趾を立つ。秋七月微疾を示し、二十四日沐浴更衣し偈を書して曰く、用醫晴術、三十餘年、打翻筋斗、地轉天旋と。衆に辭して寂す。住世六十六年。石骨を本山に藏し、庵に扁して西來と曰ふ。時宗朝に奏し、敕して大覺禪師と謚す。本朝に於て禪師の號を賜ふは溪より始まる。法嗣二十四人、大率傳あり。所度の黑白勝げて記すべからず。元遺して靈鏡あり。觀首の妙相を髣髴すと言ふ。佛光(子元)、一山、月江印、靈石芝、靈山隱、虎關鍊、龍山見、伯英俊等一世の名衲皆爲二記贊を著はす。師贊の贊に曰ふ。大覺禪師聞_二此方禪宗之乏_一、而飛_レ錫來儀、承_二英檀平公之歸崇_一、開_二營大伽藍_一、倡_二松源之禪_一、自_レ爾

序遷之名流所_レ躋、爲_二龍象淵藪焉、是故額_レ門以_二天下禪林海東法窟_一矣、云云、余鎌倉に遊ぶ事前後二次、親しく海東法窟を訪ひて先賢傳道の高風を欽す。時偶々季夏、寺僧庭樹の枯枝を伐去す。院中數幹の老樹、蒼鬱として翠を含むもの殊に異香あり。僧云ふ、此れ開祖の自から齋らし來る所と傳ふ。植物業者亦未だ其の何樹たるを名付る能はずと。想ふに蓋し蜀地に産する所の奇樹の遺種ならんか。

第二節 著述及び詞藻

蘭溪の著大覺語錄三卷あり。宋の僧錄司上天竺の佛光_{照法}序を爲り、徑山の虛堂_{愚智}景定甲子春跋を作りにて刊行す。後延享年間に再刊し、文政年間に至り更に補遺して刊せらる。別に元祿中梅峰の錄せる拾遺錄あり。梵語心經及び遺誡等より成る。今悉く大日本佛教全書中に收めらる。其普說、法語恰も宋明道學諸家の語錄を讀むが如く有益の語鮮からず。

信得及時。鐵壁銀山。透則容易。疑心纔起。好聲美色。總被他瞞。是故往日具大信根之人。著眼於形迹未分已前。介意於行持不到之處。寬之以歲月。緊之以脚手。時節既偶。驀_レ割大笑。一聲起來。虛靈寂照。如太空相似。包裹一切。一切皆在太空中。拈將爲人。應機無盡。縱橫妙用。收放臨時。到此境致。說空亦得。說有亦得。云々。示裕上人
欲了此潑天大事。只在人發志而已。未聞有不發志而自透脫者。設有皆爲外擾。何足以紹隆聖種矣。

云々。示榮意禪人

石含珊瑚。非精鑿者。安能識知。道在己躬。苟外求之。應難辨白。鑑之弗精。珊瑚不現。求之在外。道何以明。要體道之本源。非一朝一夕事。求之不憚。探之既深。力到功圓。自然發露。如良匠琢玉。磨兮磨兮。終成大器。云々。示承性西堂

欲作九仞峯。非其力而不可作。要行千日之道。非其力而不可行。作之既深。終有摩空凌雲之勢。行之既久。豈無到家安樂之時。作之與行。皆由力也。設或中道而廢。不能勉力盡心。九仞之峯。何緣得成。千日之道。疑其難至。云々。示道然上人

道固非遠。窮之在人。惟患人之不能一往直前。所以對面有千里之遙。舉止止被萬緣所隔。苟或信而不疑。行之不倦。時來緣熟。道無不通之理。心無有不明之時。道既通達。心亦明白了。居聲色之場。不被聲色所轉。入是非之域。不逐是非所迷。到此境界。謂之大自在人。謂之出塵羅漢。然後隨世流布亦得。不隨世流布亦得。應物副機。更無別法。如上密用。本自信心中流出。云々。

示左馬禪門

奮志於道者。初不在擇其靜處。厭其喧譁。靜鬧之中。無時不顯。欲避喧而投靜。還墮杳冥之都。苟捨妄而求真。總是奔馳之策。須是萬機泯絕。一往直前。昔年行處。不復追尋。自己珍藏。常當

檢察。如是則居貧賤。而不足以移其志。處富貴。而不足以紊其心。塵勞榮顯。視若空花。定慧圓明。終無退失。纔涉纖毫染汚。當自警脫教行。忽然諸境崢嶸。切忌隨他轉卻。要在四威儀內。二六時中。牢牢把定。喚醒主人。動靜無拘。涓滴不漏。自然虛靈空妙。至鑒無私。見處朗々全彰。用時頭々合轍。到此境界。猶有朗々全彰頭々合徹底在。豈不聞。巖頭和尚向雪峯云。他日欲播揚大教。須是一々從自己胸襟流出。與我蓋天蓋地去也。雪峯向這裏。便倒戈卸甲。大用現前。一生只以赤手空拳。臨機殺活。儻非內出。何以濟人。所以吾宗。信之者易。行之者難。行之者易。悟之者難。云々。示玄海大師

此等の語、嘗に禪家の預知たるのみならず苟も一教一道に志ある者の深く翫味すべき所たり。且つ此に因つて鎌倉時代に禪宗一派の一時に勃興したる洵に偶然に非ざるを知るなり。左の一篇の如き又特り文の妙なるのみならず作者道風の高逸なる、亦以て想望するに足るものあり。

示宿屋居士

佛法不離於日用。日用中全體現成。但於左轉右旋。西行東道處。偷眼一看。誰教我恁麼來。誰教我恁麼去。識得來處。便知去路。來去分明。便識蘭溪自東至西。從朝至暮。無一時不爲汝談玄說妙也。兄將行矣。予以一劍相餞。即非世間之物。已是老婆心爲汝徹困了。既不肯受。山僧且留在

壁角頭。待兄於無滋味處。咬出滋味時。卻來。建寧依舊分付。策馬歸故鄉。故鄉在何處。一物不將來。兩肩擔奪去。去々來々。當恁麼舉。

更に偈頌二三を録すべし。

了無一物可相呈。不用重添眼裏筋。倒卻門前刹竿著。倚筇閑看暮天雲。

迦葉答阿難

真不掩偽。曲不藏直。向上別求。鐵壁鐵壁。達磨告二祖

十五年前鬢未斑。拋砂撒土不曾閑。而今老大渾無事。行看山來坐看山。

南泉答僧云、平常心是道

日暖風和春晝長。杜鵑啼在杏花鄉。明々向道無人會。又逐流鶯遇短牆。

開口不在舌頭上

第三章 子元

蘭溪の緒を續ぎて厚く其の根基を培養し、文字禪を實地に活用し、大いに邦人をして景仰向歸の心を加へしめしものに子元あり。

第一節 傳記

子元名は祖元、別に無學と號す。宋の明州慶元府の人。世姓は許氏、父祖高族たり。七歳就學、習

誦強化、夷倫に穎脱す。性沈重にして聲色に狎れず。葦簞を喜ばず。十二、父と偕に山寺に遊ぶに、僧の竹影掃階塵不_レ動、月穿潭底水無_レ痕、と吟ずるを聞きて殊に警省あり。明年父の憂に丁りて塵羈を脱せんことを求む。伯氏冲虚禪師攜へて杭の淨慈に往き、北磻簡和尚に禮して圓頂進具す。服勤すること五歳にして、辭して徑山に趨きて無_レ準に依る。體究五年。一夜四更、寮前の版聲を聞き忽爾として省あり。口を衝きて偈を作りて曰く、一槌擊碎精靈窟、突出那吒鐵面皮、兩耳如_レ聲口如_レ啞、等閒觸_レ著火星_レ飛と。準順世し、石溪月に靈隱に謁し、偃溪間に育王に參し、錫を小朶峯に寄す。時に虚堂愚公登峰庵に居る。峻機逸辯、湊泊し易からず。元常に往來講明す。時に石帆、石林、横川の三師天臺に之く。堂偈を作りて之を送る。相送當_レ門有_レ脩竹、爲_レ君葉_レ起_レ清風、の句あり。舉して以て元に示す。元曰く、和尚此偈只是閒言語、中間無_レ些子禪、と。堂頌子を拈起して曰く、者個禪と。元對へんと擬す。堂劈面に一揮す。此より句語三昧を得たり。後故里に旋り、大慈の物初願公に依りて持淨すること二載、河湖其の操を高とす。一日井樓に登りて水を抱み轆轤を牽動して廓然開語す。時に年三十六。明年邑宰羅季莊招くに東湖の白雲庵を以つてす。居ること七年にして靈隱の退耕寧の鎚下に歸りて第二座に居る。大傅賈秋察請うて台州の真如に補せしむ。唱道七課、聲光四方に輝く。德祐乙亥北虜の兵戟中國に包_レ然す。元、兵を温の能仁に避く。明年元兵温境を壓す。衆舉つて竄匿す。元獨り堂裏に踞す。

虜會双を揮うて已に頸に擬す。元神色動せず偈を説いて曰く、乾坤無_レ地卓_レ孤筇、喜得人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影裏斬_レ春風、と。羣虜之に感じ、懺謝して去る。翌歲四明に歸りて天童の法兄環溪一公を訪ひ、留まつて前版に居る。我が弘安己卯の冬、鎌倉建長席を虚うす。北條時宗書幣を具へて詮・慧の二禪徳を遣はし、元に入りて有徳の禪衲を聘請す。元其の選に中る。環溪即ち佛鑑の法衣を授く。元乃ち偈あり。世路艱危別_レ故人、相看握手不_レ知_レ頻、今朝宿鷺亭前客、明日扶桑國裏雲、と。祥興三年夏五月太白山を離れ、六月晦日に太宰府に著く。即ち弘安三年なり。秋八月相州に至る。時宗郊迎し、請うて建長に住せしむ。明年春時宗來謁す。元、莫_レ煩惱_レの三字を書して之に呈す。時宗曰く、是れ何の言句ぞ。元曰く、春夏の交、博多騷擾せん、而るに不日に靜謐を得ん、公慮と爲すこと莫れ、と。果して孟秋に海虜百萬將に鎮西を侵さんとし、一夜の風浪に悉く敗没す。五年十二月、時宗、圓覺寺を建て元を請じて開山第一祖とし山を瑞鹿と名づく。上堂の語に、爾若去_レ得_レ許多知見解會、空蕩_レ處參、虚豁_レ處行、不_レ是大徹大悟、也と。時宗世を謝し、子貞時相續いで嚮信す。九年八月疾を示し、翌月三日遺書して貞時及び故舊に別る。晩に至りて偈を示して曰く、諸佛凡夫同是幻、求_レ實相_レ眼中埃、老僧舍利包_レ天地、向_レ空山_レ撥_レ冷灰、と。夜三更に至り衣を易へて端座し筆を索めて書して曰く、來亦不_レ前、去亦不_レ後、百億毛頭獅子現、百億毛頭獅子吼と。筆を擱いて寂す。年六十一、本山に塔す。

勅して佛光禪師と諡す。光嚴帝重ねて圓滿常照國師と賜ふ。元の淨慈の靈石芝公行狀を製し、翰林學士揭傒斯塔銘を撰し、四明の東陵璣公碑銘を撰す。(高僧傳に云ふ、此の碑現今洛北真如寺に在りと)。師變の贊に曰く、余見常照國師道蹟、中玲瓏無毫髮瑕翳、外荏苒有許多光輝、至其句語宛轉自在、胸襟藁籥動而愈出、雖雪竇顯保寧勇、有所不讓焉、虎關和尚採二十四章、載于釋書、譬如長安鄜裏羅綺萬品、出其錦繡段片而傳買者定高價也、學禪者宜看讀焉、然近世儒者、見其臨刀偈曰、此本平乎晋肇法師嬰劍難之偈也、凡爲世儒者、不窺禪家之藩籬、只信一己情慮、妄取句法、以胡亂指注、和宋俱然、殊以不知了悟之人自然有高妙之格矣、夫至白刃揮時、迅自閃電、豈容思惟於其間乎、國師自言知見之害、載在本傳、乘此不爲己之戒、反討文句、以吟佔筆、實可感之民也。

第二節 著述及び詞藻

佛光語錄十卷、享保中遠孫碩隆等の補校重刊に係る。末一卷は年譜とす。大日本佛教全書收之

今其偈頌中誦すべきもの若干首を録する事下の如し。

白雲庵居咄と歌

(二十八首)

參禪不識主人翁。癡拙無人在下風。一曲村歌爲誰發。海天空闊有孤鴻。

同 右

千山風雪假孤蹤。回首西天路不通。憶著普通年遠事。老猿啼上最高峯。

同 右

七喻千年恨未收。風煙如結馬郎愁。樓前不宿雙飛燕。寂寞楊花送釣舟。

馬郎婦(四首)

九重春色正漫漶。花映千門萬戶寒。阿闍一聲難報午。睡仙猶在紫雲端。

達磨(四十餘首)

胡寫亂寫。千偈成集。寒巖倚天。飛湍箭急。寒山(四首)

虛堂和尚(四首)

舊去新來懶送迎。叢叢百草遶塔生。明朝又是春風動。一雨還添一度青。

悼支梅屋(二首)

爲人出不爲人出。一條性命若懸絲。金陵路上誰收拾。一任梅花取次吹。

偃蓋序

欄干共倚送飛鴻。萬里青天一蓋風。相識還如不相識。水聲松韻各西東。

四郎金吾求偈

秋入扶桑海國寒。白蘋紅蓼接沙灘。夜來添得孤鴻跡。留與人間作畫看。

示僧(二首)

碧天無際水風涼。楊柳絲絲引興長。獨立沙頭看山色。蓼花叢裡浴鴛鴦。

沙彌求語

高下秋雲半欲垂。水光瑟瑟弄斜暉。鳥飛不度扶桑碧。萬里孤僧獨立時。

題清見寺

暫歇征鞍此地遊。回看廣岸一沙鷗。欲留姓字無新句。馬上頻頻又轉頭。

葉と戦西風。肅郎筆掃空。一聲雷電裏。龍去不知踪。湘岸綠猗猗。湘波弄夕暉。美人天共遠。獨自立多時。一雨一番新。蕭蕭入座頻。香嚴猶自可。多福更愁人。曉露日欲上。嵐光一半收。

休聽竹枝怨。孤棹在東洲。

題竹畫 四首

先生採藥未曾回。故國關河幾度埃。今日一香聊遠寄。老僧亦爲避秦來。

寄香燒獻熊野大權現

爲愛扶桑水國清。烟霞爲屋水爲城。十洲三島蓬壺裏。添得龍眉一老僧。

題屏風海圖 二首

碧天連水水連天。秋色依々上釣船。我亦不知身是客。數聲寒雁斷雲邊。

同 右

故園望斷碧天長。那更衰齡近夕陽。補報大朝心已畢。送歸太白了殘生。

辭檀那求歸唐

得月樓前春未饒。青山影裏雪初消。隔池兩樹梅花白。髣髴孤山第四橋。

信筆爲寶光書

青鞋與竹杖。尋訪過前村。一度見顏色。微月正黃昏。

墨 梅

玉立映蒼苔。禪房一半開。通身風露冷。午夜定初回。

墨 竹(二首)
(錄一)

歸心半落水雲邊。又看巴江江上猿。一聲啼斷碧天暮。回首何人在故園。

畫 猿

其禪偈に入るものには

森羅萬像寂無言。不住虛中落斷邊。垂乎空王殿前立。一塵不到獨體寒。

靜 齋

頽然齒豁又頭重。一息青山萬劫空。後二千年雲水客。是誰來比吊孤踪。

自 悼(七首)
(錄三)

爲法求人日本來。珠回五轉委荒苔。大唐沈卻孤筇影。添得扶桑一掬灰。

同 右

灼然悲願示無窮。是處青山有古松。有舌不談無舌句。朝々呵雨又呵風。

同 右

左の文賦各一篇亦た観るべし。

跋松憲頌軸

松之堅貞。冬夏不凋。憲之虛明。晝夜齊照。人之入道。發於堅貞。成於虛明。會虛明反堅貞。虛明堅貞。二俱舍離。或於風清月白之秋。或於坐涼分影之際。或於虎嘯龍吟之夜。或在猿鶴嗚唳之時。皆與松憲發上々機。松憲著眼於煙霞雨露之外。寄情於榮枯消長之表。收視於色空明暗之裏。放懷於通塞迷悟之初。松耶憲耶。啓耶閉耶。禪耶誦耶。偃耶息耶。焚々然澄々然。皓々然凌々然。一塵不立。萬機齊赴。悠然與吾相會。內外皆無外物。松憲眼豁無關鑰也。弘安五年三月七日

送雲溪歌并序

己酉上元夕。僕與雲溪客長安。過蘇堤直北坂者數里。倚而歌。歌而止。終則愴焉以悲。噫星月在空。燈花如晝。今夕何夕。奈此離別。又未知何夕復見子於何地。其所成立者。又如何哉。命騷以送之行。

梧桐生兮高岡。鳴鳳鸞兮朝陽。哀吾生兮誕老。猗若人兮珪與璋。故山兮瑤艸芳。鞭螭虬兮絕大江。大江兮天長。望之子兮歌吉祥。安熙々兮樂康。朝澗々兮滄浪。折若木兮扶桑。潔爾佩兮穆芳。夕彌節兮望八荒。繫日星兮煌々。覽物化兮蒼黃。肅々兮自將。德音兮予所望。嗟人生之幾何兮。毋

消搖以相羊。

第四章 大 休

第一節 傳 記

大休名は正念、宋の温州永嘉郡の人、初め東谷光に靈隱に參し、次いで石溪和尚に謁す。共に脱然として省悟するあり。咸淳五年の夏、商舶に乗じて東渡す。本朝文永六年なり。繼いで相州に届る。建長の蘭溪延いて高賓と爲す。北條時宗禮貌を備へて禪興の精藍を主らしむ。次に建長・壽福・圓覺の諸刹に遷る。後壽福の龜谷山巔に於て小庵を創め、扁して藏六と曰ひ、壽塔を築きて歸藏の地と爲し、自ら圓湛無生銘を著して行李の始卒を識す。正應二年冬病に圓覺に寢す。十一月病革り正觀寺に遷る。晦日偈を書して曰く、拈起須彌槌、擊碎虛空鼓、藏身沒影踪、日輪正當午、と。筆を置いて化す。春秋七十五、此方に淹留して龍象の衆に接して横説堅説倦まざること二十二年を経たり。敕して佛源禪師と諡す。

第二節 著述及び詞藻

高僧傳に大休語録六卷とあり。今東大圖書館所藏別置本五山版四冊は永和四年東山同源塔下に重刊

せるものに係る。第一冊首に弘安甲申大休自述の序あり。禪興、建長、壽福の諸語を載せ、第二冊は圓覺の語、諸寺の小參、普説、大小佛事、第三冊は頌古、讚、偈頌雜題、第四冊は偈頌、法語及び題跋並に無生銘等を收む。若し全書散見する所の警策の語句を玩味すれば、北條氏時宗平生涵養得力の處亦た以て察知するに難からざるなり。今唯だ其の偈頌中諷誦し易き者若干篇を抄録するのみ。

蒼々老榦拂雲霄。格外清音古調高。霜雪堆中無異色。此時應見歲寒操。

禪會圖十三則(錄四)

趙州不下禪床接燕趙二王

策杖閑尋仙子徑。仙翁住處白雲深。忽驚鶴唳青霄外。回首人間日未沉。

同 右韓文公參大願

小亭西畔畫橋東。兩岸天桃相映紅。一夜落花隨水去。遊人多怨五更風。

同 右

圓靈訪羅居士見靈照問居士在麼

遊遍江南江北地。鶯吟燕語一般聲。歸家隨分田園樂。共話山雲海月情。

同 右 羅公羅婆男女共說無生話

孤舟夜泊瀟湘岸。靜聽蕭々兩打篷。却憶寒巖々下寺。微風瑟瑟撼幽松。

瀟湘夜雨

極目長沙遠際天。滄溟幾度變桑田。有人問我家何在。笑指扶桑日出邊。

東 叟(號道)

雲擁巖房撥不開。鶴飛松露漬莓苔。凝然宴坐無言説。自有天花動地來。

石 室(號道)

江島追遊列俊髦。馬蹄獵々擁春袍。穿雲分坐烹香茗。策杖徐行踏巨鰲。洞口千尋石壁聲。龍門三

級浪花高。須知海角天涯外。萍水權迎能幾遭。 蘭溪和尚同遊江島歸賦此以呈

道尊不在位。清聲四海宣。大辨猶若訥。春雷鼓噤淵。得之由自己。何必問蒼天。上不攀於聖。下不負於賢。身不混流俗。名不寄宰官。知足無妄取。知止何辱焉。有言警於世。時復寓短篇。石房香一縷。竹椅自安禪。萬般存此道。一味信前緣。勿耽於泉石。勿厭於塵寰。縱使八風吹。心若泰山安。黃卷聊遮眼。白日常清閑。無心與物競。得喪不相關。健則稽筇步。困則枕石眠。知世如大夢。終不惜長年。逍遙事物外。優游天地間。無人知此意。志懷自嘿然。不因智者問。應是懶開言。

和守殿示至白居易長篇韻以自見意

山寒水冷客稀逢。喜有東君信息通。但覺春風生小袖。不知身在白雲中。

謝守殿送小袖

萬里雲收天宇清。無邊利海夜澄。長鯨一吸徹源底。留得珊瑚帶月明。

題松憲居士圓相中海印圖

虛名擾々實徒勞。漁隱忘機自晦韜。漢將功臣三十六。雲臺爭似釣臺高。

大休自號(二首 錄一)

休論身後與身前。目擊三生事宛然。故國山川無復見。夜來歸夢遠雲煙。

藏六庵有感因述三偈自見(今錄 其一)

奇巖兮藏昂。古源兮流長。嘉木兮繁茂。野花兮幽芳。想像兮居雁蕩。入眼兮遊石梁。志趣兮友雲

月。操節兮輕雪霜。採擷藜薇兮澗壑。負絕利網兮名羶。寂寥元坐兮無寄。放曠自若兮洪荒。對此

恍然兮神飛夢鄉。頓忘客寄兮身在扶桑。 觀山水圖恍若舊遊歌以紀之

狸奴春睡足。花下恣遨遊。舉頭看蝶舞。渾似夢莊周。 題守殿扇上

峭峙千巖香靄中。回環八面自玲瓏。幽深闌寂無人到。水自流兮花自紅。

空山(號道)

源出崑崗流益別。冷々漱玉奏無絃。賞音會有清心士。月下徘徊曲磻邊。

荆溪(號道)

第五章 高 峯

圓爾に承けて更に其の法域を擴張し、學道の基礎を鞏固ならしめしものを高峯となす。其道天岸、夢窓、此山等を得て之を傳ふ。

第一節 傳 記

高峯名は顯日、後嵯峨帝の子、城西の離宮（後龍翔寺と爲る）に生る。幼より羶を茹はず。嬉戯せず。坐すれば必らず跏趺す。年甫めて十六にして圓爾に従ひて、落艸披緇す。行業純真。一日人の草を刻り誤りて蚯蚓を斷ずるを見て爾に問うて曰く、蚯蚓折りて兩段となる、兩頭共に搖く、未だ審かにせず佛性那頭に在るやと。爾曰く、須彌高からず大海深からずと。峰便ち旨を領す。時に年二十な

り。南都律師某爾を訪ふの次に峰の英敏なるを見て爾に白して携へて去る。之に居る事久しからずして潜かに遁れて東福に歸り、巾侍すること數載、會々、兀庵宋より來りて建長に住す。峰往いて掛塔す。後下野の那須山に入り茅を誅して隱棲す。道香發聞し、禪客路を跡ねて至る。圓堅く拒んで許さず。若し偶々其の接客を被るものあれば之を登龍門と謂へり。檀越の請に因りて精藍を建つ。即ち東山雲巖寺是なり。時に子元巨福に住す。一翁豪書を馳せ、峰を招きて元に見えしむ。既に雲巖に旋り、元書を致して其の平生の述作を求む。峰偈を以て答へて曰く、一見明師意轉閑、癡癡終日坐三烟罍、飽柴飲水無餘事、禪道文章何處安と。後問答數返、明珠の玉盤を走するが如く、更に凝滯なし。元即ち信衣並に法語を付して之を印す。是より久しく雲巖に住して玄化を闡く。時に南浦（紹明）筑の崇福に住し、天下の學徒、那須横嶽を指して二甘露門と爲す。正安二年、峰年六十、相の淨妙を董す。嘉元元年、乾明山萬壽寺に住す。三年淨智に移る。正和三年建長を主る。江湖の雲衲利毎に堂に填つ。兩歳を歴て東山に歸る。五年十一月二十日、中夜偈を書して坐化す。壽七十六、東山に歸して淨智に塔し正統と扁す。（後建長に移す）。敕して佛國應供廣濟國師と諡す。法を禀くる者二十餘人、皆龍虎の翹角ありて五山十刹に住す。

第二節 述作

高峰に五處七會の語録あり。元の鳳臺の古林茂、鷄足の清拙澄、本覺の靈石芝之が序跋を爲れり。

第六章 南浦

第一節 傳記

南浦名は紹明、姓は藤、駿州安部縣の人。幼にして本州建穗寺の淨辯法師に事へて教を學ぶ。英氣同隊を出づ。十五にして爰染受戒し盤桓すること數歳、棄て去つて建長の蘭溪に參す。正元の間宋に入りて徧ねく諸刹を訪ふ。時に虛堂愚淨慈に主として、門庭高峻宿學に非ずんば教を其の牆に闢ふなし。浦往いて拜謁す。賓客を典らしむ。昕夕參決す。咸淳改元の夏、浦、堂の頂相を寫して贊を請ふ。堂即ち書して曰く、紹既明白、語不_レ失_レ宗、手頭籤弄、金圈栗蓬、大唐國裏無_レ人會、又卻乘_レ流過_レ海東_レと。玆の秋八月、堂詔を奉じて徑山に遷る。浦を攜へて俱に行く。三年秋堂を辭して東歸す。堂偈を贈りて曰く、敲磻門庭細揣摩、路頭盡處再徑過、明_レ說與虛堂叟、東海兒孫日轉多と。本朝文永四年に當る。再び蘭溪に謁して藏論を建長に知す。乘拂の提唱に曰く、十載中華歷徧歸、未_レ將_レ佛法掛_レ唇皮、無_レ端今夜始開_レ口、鐵樹生_レ花正是時と。七年冬、筑州の興德に出世す。嗣法の書並に入寺の語を以つて曇侍者に因つて徑山に呈上す。虛堂之を閲して大いに喜びて衆に謂つて曰く、吾道東矣と。九年

太宰府の崇福に遷る。門を指して云ふ、山横翠壁、水出高源、解脫門開大衆歸去來と。上堂の語に云ふ、道遠乎哉、嶺頭雲淡々、聖遠乎哉、磻下水冷々、須知瞿曇日と出現、達磨時々西來、靈山一會何異、今日、少室家風在此時、便見佛日增輝、堯風永扇、世出世間能事云畢、然雖如是、與變告報也是應、箇時機、若是向上全提遠之遠矣。何故青山不鎖長飛勢、滄海合知來處高と。住職三十餘年、關西風に嚮ひ門庭日に盛なり。嘉元三年秋、詔を奉じて京師に入る。伏見太上皇召して宮掖に對して問答旨に稱ふ。敕して萬壽を主らしむ。帝又東山の故址を以て嘉元禪刹を興造し、浦を延きて第一祖と爲す。德治二年、北條貞時聘して相州に赴かして正觀寺に留め、請じて署所に就いて演法せしむ。復た敷奏して建長興國禪刹を董せしむ。翌歲、太上皇手詔を降して存問恩禮優至す。延慶元年臘月二十九日微疾を示す。偈を書して曰く、訶風屬雨、佛祖不知、一機暫轉、閃電猶遲と。筆を收めて跏趺して逝く。閱世七十有四、敕して圓通大應國師と諡し、重ねて寺を西京に建てて龍翔と曰ひ、塔を寺後に樹て榜して普光と曰ひ、庵を祥雲と曰ふ。弟子建長崇福に在る者、各舍利を奉じて塔を建つ。門下の英納通翁(鏡圓)、絕岸(宗卓)、峰翁(祖一)、宗峰(妙超)、秀崖(宗胤)、可翁(宗然)、物外(可什)等齊しく龍蛇の如く、血孫遠く繁して全國の禪林を中分す。關山(慧玄)、莊海(性珍)、梅屋(宗香)、日峯(宗舜)、義天(玄詔)、雪江(宗深)、東陽(英朝)、一休(宗純)等凡そ大德妙心二寺の諸衆、皆此

系に屬するものなり。虛堂賸行の偈懸識に當れるなり。

第二節 著述及び詞藻

高僧傳に南浦語錄三卷、明の徑山の愚庵、及び天界の季潭勸(室)其首に題し明極後、西澗曇其尾に跋すとあり。今東大圖書館所藏本二冊は京都書肆松月堂の重刊に係る。奥書に依れば應安五年龍翔寺に於て始めて入梓せしを知る。今明極の跋文を見ず、全室の序文は洪武八年に成りしものにして、中に云ふ、蓋其履踐眞實。開示學者之語。簡古嚴整。無毫髮虛偽。眞一代宗師也、と。收むる所、興德、崇福、萬壽、建長の諸語、法語、讚、小佛事、偈頌等なり。其の筆致は已に上傳記中引く所の語中に見えたり。今唯だ其の數偈を下に附記するのみ。

相逢道伴交肩過。山自青兮水自清。後夜無人知此意。屋頭唯聽野猿驚。 和悟藏主韻
 常思詩人錦繡腸。氣如虹色映朝陽。此文未喪今猶在。目擊道存意自長。 次資緒卿韻
 世上無人來問我。山深唯聽磬泉聲。一從這裏挨得入。獨自枕流看月明。 隱溪(以下五首道號)
 四面寥々無一物。纔存毫髮路難通。鳥啼花笑樹梢外。只見三更月到意。 空庵
 巍々峭峻難窮頂。雨洗風磨不記年。莫謂劫空消息斷。春來花鳥尚依然。 古山
 秋來群木添蕭索。獨有丹根花正開。無限清香收不得。夜深和月滿空塔。 桂堂

曾在桃源誇上色。風光漏泄到人間。老來不改紅粉面。誰識心肝如鐵山。 花翁
水漱雲根來處異。分明源脉出蓬壺。磷々岸石壓台嶺。湛々金池勝太湖。松竹影斜浸碧玉。瀑泉聲
碎散真珠。遊人到此忘歸路。不覺舉頭日欲晡。 和泉石韻

第七章 鏡 堂

第一節 傳 記

鏡堂名は覺圓、宋の蜀の人。詩仙白玉蟾が後なり。蚤く經籍に通じて兼ねて雅思あり。志心宗を求め峽を出でて吳に遊び、諸老の門を敲闔す。太白峯に躋りて環溪一和尚に參し、玄機頓に明なり。巾侍すること數禩、江湖之を欽す。祥興三年、年三十七にして子元と船を同じうして東渡す。北條時宗慰勞崇敬す。首め法を相の禪興に開き、移りて淨智を領し、奥の興徳の開山と爲る。再び禪興に住して十寒暑を経て圓覺に徙る。明年建長に昇る。正安二年、雒の建仁を董す。到る處の名藍禪客堂に盈つ。上堂の語に言ふあり、秋露讓々滋々池稻糧、秋蟾皓々洞々照八表、秋蛩唧々入々于牆壁、秋砧琅々徹々乎枕傍、無文印子重々露、般若微言恣舉揚、山僧恁麼饒舌、諸人忌錯搏量、別有靈蹤在上方と。一住七禩、聲華寰宇に達す。王公歸嚮すること大旱に霖雨を得るが如し。年卦爻に垂んとして、滅を寺の正寢に

唱ふ。實に徳治元年九月二十六日なり。臨亡に偈あり曰く、甲子六十三、無法與人説、任運自去來、天上只一月。建仁建長の兩處に塔す。救して大圓禪師と諡す。

第二節 述 作

師蠻の贊に曰く、予閱大圓禪師遺錄、語脈出塵、標格驚世、白玉蟾之風雅、用之格外宗旨、言々句々蘭秀菊香、可謂西川十樣錦、添花色轉鮮者也、不入濟北師(虎關)之高覽、可惜也已と。語錄三卷あり。

第八章 一 山

蘭溪・子元等の開拓せる田地に據りて多數棟梁の材を造成し、之をして大いに次期に繁榮せしめ、遂に五山文學勃興の機を爲すもの、惟だ一山の道力學術あるのみ。

第一節 傳 記

一山名は一寧、世姓は胡氏、宋国台州の人。稟性端重にして氣宇神秀、韶齡にして學に就きて晤尹琅々、郷黨其の英敏を稱す。稍長じて桑門を慕ひ、郡の鴻福寺の無等融公に投じて童侍すること二年、辭して四明に往きて普光寺の處謙に隨ひ法華等の諸經を習ふ。二歳を踰えて得度進具す。律部を應真

寺に聴き、台教を延慶寺に學ぶ。義學の支解を嫌ひて棄てて天童に到り、疑を簡翁敬和尚に質し、坐究すること二朞にして、育王山に上りて藏叟珍公に依る。珍退きて後、東叟愷寂照、頑極彌相繼いで住持す。山四師に奉事して獨り頑極に欽す。一日愷勲に宗要を乞ふ。極曰く、我れ一法の人に與ふる無しと。山即ち契悟す。尋いで大藏の關鑰を典どる。印を解いて天臺雁蕩の間に雲遊し、環溪一、横琪、巧庵祥、清溪沆の諸老に謁して敲磻酬酢し、益々造詣を深くす。至元甲申の夏、四明の祖印寺に住す。居ること十載にして慶元府の補陀山に遷る。住持六年、海岸の靈區、山の道義、光輝並び騰る。一日巖洞に詣りて忽ち大士の圓光の中に現するを見て隨喜作禮す。是より先き至元十八年、世宗日本を兼併せんと欲し、戰艦六萬軍卒二十萬を發して襲來せしに、一夜神風大いに起りて海軍悉く没す。成宗秦心未だ歇まず。有道の名衲を遣して勸誘して以て附庸と爲さんと欲す。大徳三年、我國の商船偶々明州に在り。是に於て俊髦を遴選して臺評山に洩る、乃ち山に金闌の伽梨並に妙慈弘濟の號を賜ひ、慶元府の判官、僧録司、知書、及び官員五十人を差して寶陀山に至らしめて山に東渡を勸め、軟語囑勞す。山道るべからざるに逼りて、命を受けて舶に駕す。旬有三日にして太宰府に届る。本朝の正安元年なり。舶主書をもつて帥府に白し、相州に發遣す。北條貞時、山を疑ひて游偵と爲して、豆州の修禪寺に偏置す。山、晝夜禪誦して悠然として道を樂しむ。或人貞時に説きて曰く、寧公は彼の國の

望士、來る事抑逼に出づ。有道の士は萬物に無心なり、豈必ずしも區々としも子卿が節を慕はんや、且つ夫れ沙門は福田なり、元國に在りては元の福なり、我國に在りては我の福なりと。此に由りて相陽に赴かしむ。東方の緇素隨喜瞻禮して山内の館舍門外市を作す。冬十二月建長の大道場を主どる。其地に臨んで語あり、中に云ふ、十方無壁落、四面亦無門、豈有去來之相、何曾彼此之分、張弓架箭、列主分賓、正是鑿空造端、欺胡瞞漢、畢竟太平時世、説甚干戈、山僧萬里西來、素面相呈更無勞攘、將此身心奉塵刹、是則名爲報佛恩、今日有大力量人、親承記莖、向二千年後、於日本國內、續此一燈、直得輝今輝古、靈山佛法付王臣、今日扶桑話又新、一道恩光徧塵刹、東溟天曉湧金輪と。其の心機一轉、別に東方に千歳の道光を立つるの猛志を見るなり。一住四載、法規濟々、諸擅信服し萬納鑽仰す。壬寅十月圓覺に遷り、住職二禩にして復た福山に歸り、幾ばくならずして淨智に移る。道望愈々高し。正和癸丑の秋、南禪席を虛しうす。後宇多上皇貞時に敕して山を促して住持せしむ。緒神官輔車馬路に載せ、土庶趨謁して後れん事を恐る。山老病を以て屢々逸退を乞へども優詔ありて允されず。潜かに越州に通る。上皇宸書慰諭す。文保元年季秋疾を示す。上皇寺に幸して蹕を龜山廟塔に駐めさせて時々疾を問はる。二十四日の曉、遺表を手書して廟塔に獻じ上皇に謝し、又偈を書して曰く、横行一世、佛祖吞氣、箭已離絃、虛空墜地と。筆を置き奄爾として逝く。壽七十有一。上皇表

を得て意忙として寢室に幸すれば跣坐儼然として生けるが如し。皇情震悼す。便ち宸奎を齎して國師の號を贈り、源僕射有房に宣して文を作りて之を祭らしむ。敕して塔を龜山廟側に建て法雨の額を賜ふ。又像贊を御製して曰く、宋地萬人傑、本朝一國師と。その崇ばるゝこと此の如し。

第二節 著述及び詞藻

一山性仁慈和氣物と通る。其學釋典諸部儒道百家より稗官小説鄉談俚語に至るまで綜錯泛濫せざる無し。常に一榻に坐して通謁を須ひず、舊侍新到出入問なし。禪策の中古事方語の曉り難きは學者之を病みしが、山の辰上するに暨んで就いて之を質すに、山管を運して之に酬い、羣玉の府に入り手に信せて之を執るが若かりしと云ふ。山又筆翰を善くし楮帛を持して書を需むる者常に門限に盈つ。師贊の贊に云ふ、寧師逼三元帝命、來止此方、住四大刹、德化王侯、藐焉、幻身浩蕩、不_レ比_レ其胸宇之恢、與_二天地_一同大、不_レ知_二其本_一者、詭爲_二問_一、又猶如_二以_レ管_一見_二月_一、曷知_二大明無_二私照_一邪と。法嗣に石梁_{仁無著_良無惑_良歛_良雪_良村_良梅_良支_良等_良あり、}虎關、夢窓、嵩山、龍山等亦皆之に參謁せり。特に虎關は之に従學すること十數記請益最も多く、後、山の爲めに行記を作れり。

一山四會の著述若干帙、山手刪して一卷と爲す。門人齎して元に入る者あり。靈石芝・古林茂・中峯本等各々題尾を著く。後、門人又補編して二卷と爲して刊行す大日本佛教全書收之

今其の偈頌若干を録して其の學風の一斑をしめす。

一川虛漾漾。流注知經幾劫塵。桃破小紅春著岸。可曾無路接秦人。 古源

一秋長是雨淋零。點滴空塔夜々聲。三十餘年江海夢。博山煙斷一燈明。 雨夜作

雪霽層巒爭聳玉。曉風高拂凍雲開。瑤英滿樹天香遠。一夜清寒徹骨來。 千峯寒色

萬物既唯我。脩然只自由。宗乘竟何有。佛祖是怨讎。天淵孤雲晚。風高一鷲秋。寥々閉送目。新月又懸鉤。 獨脫無依

山中行。艸鞋跟斷腳頭輕。縱閒情。眼裏風光耳裏聲。悠然心跡既雙清。步々無非是證明。

山中四威儀和大休四首和尚讚(錄一)

雲鬢亂縱橫。悲深一寸情。金沙灘上月。長照讀經聲。 馬郎婦

澗泉研墨汗苔石。斷壁題詩雜薜紋。好句依然顯不得。峩眉山月五臺雲。 寒拾

風神清峻。氣宇宏豁。跳出北磻波瀾。奮迅龍淵鱗鬣。四十年宋土放憨。七八載扶桑肆點。提出格

機。用鎖口訣。佛眼欲覷無門。衲子有恨難雪。龜毛拂子信手揮。海岳掀翻雷電掣。臨濟一宗。楊

岐正續。被渠陵滅。別々。耿光千古照塵刹。 無學和尚

高明氣節。清朗容儀。太白的嗣。冷泉孫枝。在唐土已兩開鋪席。來扶桑則重運爐錘。大用處不存

佛祖。妙唱時不犯離微。謂此大通之真。是錯認渠。謂非大通之真。是蹉過伊。竹篋橫揮處。又見花開五葉時。西澗和尚

春空之雲。秋水之月。舒卷高閒。光明澄潔。法道之龜鑑。僧中之奇傑。早依龍江老子。契刻艸機。便具超方之志。後侍佛光佛心。棒喝下妙稱鎖口之訣。以妙密鉗錘。煅煉諸方衲子。以眞實道福。契合龜山上皇。二十餘年。大其設施。化荒棘之林。爲一方巨利。功成不居。時至便行。末後全提。尤爲奇絕。些子徑山文武火。今日扶桑焰氣烈。規庵和尚

學爲萬世所師。道由一貫而傳。也知三千高弟。尙泥六籍陳言。孔子
先天地而有生。極玄妙而莫傳。不遇得關尹喜。誰可授五千言。老子

第九章 西澗

一生高操を堅持し、海上を往來して傳道倦まず、遂に一山を輔けて其の志を成せしもの西澗あり。

第一節 傳記

西澗名は子曇、姓は黃氏、宋の臺州仙居郡の人。幼より聰敏にして志操踔絶、本郡の紫籜山の廣度寺に入りて出家す。身長七尺、眼光人を射る。才思濬發、特に筆翰を善くす。十七遊方して蘇州承天

の石樓明禪師の會裏に在りて内記を典どる。咸淳乙丑、石帆衍和尚に淨慈に參謁し、又之に従ひて天童に遷り執侍すること六載、常に東遊の志あり。遂に文永八年を以て吾國に觀光す。時に年二十三、東福の聖一、建長の大覺、榻を下して相待つ。而も年弱なるを以て一刹をも董せず。弘安戊寅、衣を卷いて元に歸り、天童の環溪和尚に依りて藏論を主司す。至元二十三年、臺州の紫巖に出世す。一住四歳、去つて杭に入り、徑山の雲峰和尚に歸して首座となる。職解けて嶽に遊び、丙寅潭の天柱を董す。數禪を歴て盧阜に回る。圓通の玉崖振公之を第一座に擧ぐ。乃ち一山萬、斷江恩、月江印等と往來酬唱して聲江湖に流く。大徳元年、南洲珍公に平江の萬壽に謁し、延かれて首座寮に居る。正安元年、一山寧禪師に偕ひて重ねて來る。年五十有一、北條貞時弟子の禮を執り、請じて圓覺に住せしめ、公務の暇に宗乘を參尋す。海衆屯聚して聲光宸に達す。後宇多上皇親しく綸綍を降して禪要を諮詢す。澗法語一段を獻ず。大いに聖旨に愜ふ。嘉元元年、遷りて建長を董す。四たび歳序を更へ、緇白歸抱すること益多し。徳治元年十月、正觀精舎を退居す。二十八日凌晨、手簡を貞時に遺し、門人を召して後事を付し、遺偈を書し筆を擲つて化す。春秋五十有八、諸徒遺殖を奉じて福山の傳燈庵に葬る。塔を定明と曰ふ。敕して大通禪師と諡す。法嗣に嵩山（居中）あり。

第二節 著述

師蠻の贊に曰く、曇公道貌偉奇、材力雄富、年僅十八觸石帆之風、振松源之宗、再來此國、管轄大利、想夫妙提玄唱、堆册盈帙、而今難得半稿隻簡、蓋乏於貽厥也。又六代祖師眞贊在法山之庫、余幸獲高躅之遺、既書載燈錄と。今延寶傳燈錄に據りて其偈二三を見るを得るのみ。

第十章 規 庵

鎌倉期にありて汲々として専ら宋末元初の文物を輸入するに當り、早く能く之を咀嚼消化して我が有となし以て一家を成すもの有り。規庵・鉄庵等はなり。

第一節 傳 記

規庵名は祖園、其の姓氏を詳かにせず。信州長池縣の人。母氏龐眉の沙門般若心經を持して之に授くと夢みて娠むことあり。弘長元年に生る。童髻にして相の淨妙の龍江宣禪師を師として下髮受戒す。稍長じて、福鹿の間に在りて佛光國師（子元）に參す。光器許して痛く錐割を下し、命じて内記に充つ。佛光の示寂するに及んで、襪を卷いて東福に入り、大明國師（無關）に謁して入室請益し、又紀の鷲峯に往く。法燈國師（心地）舉げて版首に居らしむ。正應の間、大明瑞龍山を開く。庵を率ゐて行き、命じて箋翰を掌らしむ。辛卯の冬、大明寂するや、龜山上皇庵に敕して席を繼がしむ。時に年三

十一。庵乃ち相州に往きて佛光の塔を拜す。高峯日公之が爲めに證明す。既にして龍山に據る。四方の英傑翕然として臻り集まる。庵爲人頗長疎眉秀目、人に對して溫柔、衆に臨んで威嚴あり。上皇晨昏孜々として參請す。御製の偈あり。酬和頗る多し。庵の依韻上進せる一首に曰く、玉皇仙是病無垢、一朵紅雲擁九關、常寂光中塵不到、上方香散午盃盤と。時に南禪惟だ舊貫に仍りて、梵制未だ全からず。庵住持すること二十四載、力を造營に盡し、堂宇大いに備はる。正和二年首夏二日中夜坐化す。辭世の偈に曰く、一躍躍翻黃鶴樓、一拳拳倒鸚鵡洲、臨行一著元無別、黃鶴樓前鸚鵡洲と。閱世五十有三、歸雲庵に葬る。敕して南院國師と諡す。蒙山（智明）其の行狀を作り、清拙（正澄）其の後に題す。虎關久しく規庵に従ひて請益す。其の元亨釋書の傳贊に云ふ、祖道被日域也、五傳不續矣、云々、圓公以英妙之姿、當咫尺威、蒙訓蛟龍、指搗鷓鴣、宗門之光、晃煜雲衢、假如圓也庸才諛誠、取侮於講儒、祖道殆廢于草澤矣、因之而言、圓其祖道之益乎と。一山、絶海等の贊各其の語録に見ゆ。

第二節 著述及び詞藻

規庵著す所南院國師語録三卷あり。大日本佛教全書收之弟子師鍊虎關智明山等の編する所に係る。南禪に於ける上堂小參の諸語簡淨洗鍊頗る觀るべし。末に偈頌を附す。今其若干首を録すること下の如し。

皓彩堆中開碧眼。威風凜凜逼人時。無端撞着日天子。露出波斯舊面皮。

雪達磨

一重山了一重山。家在風光杳靄間。終日懶開香佛口。隔窓幽鳥語喃。

曾爲謝郎據要津。鉄船打就駕波心。歸帆高掛奔明月。留得寒濤助夜砧。

片殘納綻不懷橋。古寺閉房未織鞋。握斷烏藤千里外。話歸遙指白雲隈。

柳梢新綠垂金穗。池上殘紅濯錦紋。呼起瘦藤春力健。徐行踏斷數溪雲。

詩膽弄奇峻。恐驚它嶽靈。樹橫千嶂錦。山拔半天青。風物自蕭散。道情太徑庭。對床同夜話。剪燭破幽冥。

游洞雲庵(同韻二首)

閑地息疲頓。神清句更灵。相逢頭半白。未話眼先青。梨美勝玄圃。橘香憶洞庭。投吾金玉好。吟味洗昏冥。

同 右

秋景蕭疎神爽拔。黃花處處碎寒金。風磨廣澤玻璃鏡。霜染小倉錦綉林。砧杵杳茫林落遠。茅茨半

隱洞門深。暝禽飛盡天空闊。勾引鳳雛吟竹陰。

游洞雲庵(同韻二首)

雲埋石磴苔粘履。花落水流山更幽。燕子梁間談實相。被人喚作語春愁。

路隨芳草繞雲根。風攪千畦麥浪翻。滿目春光誰領略。物姑啼在落花村。

翠蘿深處掩茅衡。香爐瓦區跡尙清。截斷紅塵無俗客。只餘谷口片雲橫。

碧池塘畔構新閣。翠竹叢中占淡齋。沙鳥烟雲忘爾汝。千峯奔放入簷低。

春日遊歸雲庵(五首)

同 右

同 右

題歡喜光院閣(三首)

五二

烟蘿庵

悼光別浦

送僧歸省母

春日卽事(三首)

碧雲回合出西岫。家在河東嵐靄層。孤坐幃中無一事。青天爲帳月爲燈。

界破人間紫陌埃。高排十二玉樓臺。洞天日暮碧雲合。鶴駕朝臣來不來。

薄暮投棲江上寺。寒濤只向夢中聞。天開圖畫無邊表。何止嶺頭多白雲。

一巖絕了一巖絕。淡靄堆中林壑深。徐步高々孤頂上。撥開重霧見天心。

路入深村通古寺。一溪流水繞蒼烟。殘僧數輩續香火。堪作東山七葉傳。

坂頭盤折絕攀仰。路截青雲一線橫。莫遣天風吹笑語。下方恐作步虛聲。

數峯々巒松萬株。待船歸客隔江呼。夕陽雞犬聲相接。沙際人家烟有無。

渡頭怪石似人蹲。雲外青山簇馬鞍。三扣船舷清興遠。一聲欸乃過前灘。

女仙骨朽名猶在。千古悲風動地來。唯有七株松上月。夜深還照白沙堆。

村杵杳茫蒼莽間。釣舟無主傍江干。鷺翻雪影下烟浦。劈破滄溟碧玉盤。

蕭條古逕就荒蕪。原上迎晴雉引雛。猿臂將軍來也未。寒雲半罩石菸菴。

踏碎重雲逕似迷。虛嵐空翠濕征衣。烏藤駐劄峯回處。數盡歸樵送落暉。

青々活轉虛庭下。面々冰霜玉絕瑕。相對忘言終夜坐。只餘落月動金蛇。

晚自蓮花峯寺歸河東

鳥羽殿

宿紀三井寺

鎬 阪

圓滿寺

由良阪

由良港

和歌浦

衣透姬陳迹

篠田濱

片 野

葛城山(二首)

種 竹(五首)

第十一章 鐵庵

規庵の専ら偶頌を事とせるに對し、別に一家の文章を以て崛起するもの鐵庵あり。

第一節 傳記

鐵庵名は道生、姓氏を詳かにせず。羽州の人なり。久しく佛源(大休正念)に參して心源に瑩徹し、去りて諸方に遊ぶ事三十年、至る所の諸刹授くるに高職を以てす。乘拂說法、名翼叢林に轟る。本州の資福に出世して、筑の聖福、洛の建仁、相の壽福に歷據す。包笠景從す。元弘元年正月初六を以て東山の瑞應庵に寂す。遺偈を書して曰く、罵晉佛祖、今七十年、一舌拈、兩脚踏。天と。塔を海性と曰ふ。本源禪師と諡す。法嗣に無涯仁、浩あり。

第二節 著述及び詞藻

高僧傳に云ふ、鐵庵天資秀拔内外を採り、特に文學に富むと。語錄一冊建仁寺本あり修史局謄寫して今史料編纂掛に在り。元の育王の月江印、雪峰の樵隱悟、四明の東陵水、本朝の大休正念等諸老之が序跋を作る。附するに清拙・東陵・龍山三人の鐵庵頂相の贊語をもつてす。樵隱序文中云へるあり、曰く、大休久依佛海。分其派而東之。得法鐵庵。實其上首。五據巨刹。名譽振響。如鐵之錚錚者。

其徒智藏主。泛舶來關。携乃師五會提唱。請余訂證。其語緊嚴諧洽。不墜家世。後之染耳濡目者。領旨於言句之外。庶知久不在茲乎と。又師贊の贊に曰く、余鐵庵和尚の語錄を看るに逸格高古心を乗ること塞淵先覺に雙びて慙る所なく、後昆に垂れて範となすべしと。而して左の二語を引けり。

風標雪灑蝶驚夢。奈此寒威徹骨何。樓上角吹殘臘月。短檠燈吐兩宵華。 徐夜小參

認得漁篷離岸火。瞿曇夜半作明星。一聲鐘動海天曉。依舊數峰江上青。 臘八辭衆上堂

此外更に見るべきものあり。

乾坤一略約。(延寶傳燈錄 約作約談)萬古一驢鞍。聞說茶川路。水聲山影寒。 郁山王

穿木屐。戴樺皮。一嘯裂石。五字哦詩。峩眉五臺共明月。祇許豐干老禿知。 寒山二首

天地一經卷。古今一舌頭。讀到句讀不分處。忘却峨眉明月秋。 同右

塔戶玲瓏風月冷。是師當日舊封疆。蘿龕一遠秋將老。落葉聲中踏夕陽。 禮佛光禪師塔前有玲瓏岩

外集名づけて鈍鉄集と曰ふ。五山文學全集第一輯之を收む。偈、詩、題贊、疏、序、跋、祭文より成る。詩は特に見るべきものなし。只其の一二首を取るべし。

又得羽州消息回。寒驢破曉海雲堆。隨潮月與山高下。喚客舟經岸往來。數岫青邊螺髻卷。一絲白處浪花開。竹枝曲盡滄茫遠。鷓鴣雙々落釣臺。 金川曉行

地角天涯行遍了。又於西海盡頭遊。柱枝露滴望東眼。屐氣薰時看白鷗。

博多八景 莊瀨 泛月

鉄庵實に其の簡練清醒の文を以て獨り虎關・中岩の前に鳴る者なり。試みに左の數篇を讀め。

安侍者隱居序

人生天地間。非出則處。古今常分也。豈獨山林之士爲然。鉅公縉紳。莫不然也。近世言出者。必曰吾於利祿得之矣。言處者。必曰吾無意於榮途矣。若以出處而辨。莫若不出不處之爲愈也。余萬里歸來。借榻於巨嶠深雲之中。以南山老人之所畫。岫雲二字。揭於所居軒。蓋取淵明雲無心而歸岫之意也。于時秋風襲襟。落葉堆雲。有禪者扣扉者。倒屣而迎。卽越之安侍者也。隱德閑暇之氣。浮揖讓之際。逆知爲其人也。既而袖出軸子。需一語冠卷端。得而披之。隱居之詩也。客窓對讀。十未及五。而置卷謂之曰。吾聞。古有三隱。與公評焉。形隱也者。密藏深伏。非世傲者之所好也。長沮桀溺者其人也。名隱也者。不觀治亂。與世浮沈。全生者之所好也。東方曼倩者其人也。天隱也者。心不凝滯。事無固。必通其變者之所好也。孔子顏淵者其人也。皆是英賢良佐者所好之隱也。非予所取者。若夫遽廬於天地。逆旅乎古今。闢人天之玄路。拔蒙滯之幽關。噓少林灰寒之秋。振臨濟已墜之緒。而壽吾宗於無窮。是予所好之隱也。安唯々。故爲之序。

宣侍者歸建仁省觀本師軸序

青陽之景。花錦飄空。林樾清麗。余起禪龕。步履春風。於堤綠之間。秀瘠而挺者。悠々然至矣。丞揖之。乃海西宣侍者也。共床坐。寒暄未叙。出一巨軸云。吾師耄矣。而病垂々。定省無人。臥起誰掖。遽促西上之興。江湖朋舊。各賦式微。以爲贈。願着語于卷陽。余得而閱之。皆是緇林之瑤英。法海之結緣也。孰敢置硯硃於其間耶。固辭。不聽。因語之曰。士之所常者道也。而道之所從者時也。不在歸實也。觀時而自警。却步而反求。則不移寸步。便到長安。豈跋涉高深。徃反途路。而以爲至也哉。夫如此。則嚮風投契。隔江領畧矣。藥籠寒煖之節。給侍勞苦之功。盡在其中也。宣唯々而已。故摘古之警策。題于卷首云。

早梅序

已酉仲冬。余客古倉。借榻於巨福之澗陰。達侍者曰。龜峰過余。且出早梅軸需序。雪夜短檠。對讀未了。目睫已交矣。與達就寢。夢蝶動遽々。更鼓已三四矣。寒梅漏香。隙月低影。忽得四句。續其韻曰。不黨俗桃奩杏春。參橫月落雪魂新。求儔天老地還盡。韻度抗衡唐宋人。次日書於卷尾。齒名士之末。余試戲達曰。於名葩萬卉。未着陽鞭之時。獨揚清芬於天地間者。必以梅爲稱首。離騷遺而不錄。當時屈平含忠憤吟楚澤。取蘭茝芳草以自況。何不以梅喻己耶。達作色曰。夫梅之所以見稱於世者。鍾一元之鈞陶。魁群芳之掄撰。與松筠並駕。謝蘭蕙之殘馥。紅蠟凝蒂。黃

英摘鬚。疎影拂水。暗香浮月。僅見林逋絕唱。古今韻人吟士。膾炙其口。迨乎標其英。成其實。則調陽后之鼎。和商宋之羹。我於梅策勳於用夥矣。余唯々而已。方是時。小雪初霽。天風徐來。簫楞岩雲。拔蓬竇蘿。游華嚴塔庭。釘諸老舊題於嵐靄翠霧之間。然後嚼玲瓏之寒英。嚙蘼碧之清冷。瞑歸來。作早梅序。贖戲試之罪矣。

乾峰嘗て鐵庵文集に序して云ふ。漢士好而不達者。不識字。我朝學而至毅者。能屬文。然而近來。貴國而貴其才。信人不信其法。雖爲漢土之寸磔。以換我朝之黃金焉。烏乎惜乎。我鐵庵老。詞伯而不稟漢山川之氣矣。傍有中山明視之孫。獻義曰。惟漢之幸也。而問出其地。古湯惠休。今洪覺範。安得歌詩過雲。以久鳴世之者乎。曇也。唯々。爲之序。元亨之三。當月之五。云々。(見廣智錄卷二)又鐵庵を祭るの文あり(同上)。善く鐵庵の面目を發揮するものと謂ふべし。

第十二章 東 明

第一節 傳 記

一山西澗に踵いで渡來し、靈妙の筆翰海衆に應接すること三十年、其の會下に中岩・別源等諸高才を出したる者を東明となす。

東明名は慧日、姓は沈氏、宋の明州定海縣の人、孩兒より志幹清爽九歳にして奉化の大同寺に投じて童侍と爲る。十七にして直翁舉和尚に本郡の天寧に參して侍香を典どる。辭して天童に遊び、更に西に渡りて灵隱萬壽蔣山を經一時の尊宿優賞待接す。後姑蘇に旋りて藏鑰を承天に掌る。又東に歸りて法を明堂の白雲白雲山寶慶寺に開く。一居六載海衆風に歸す。至元戊申日本の書聘に應じて明年東來す。本朝の延慶二年に當る。時に歳三十八なり。繼いで相州に入る。北條貞時請して禪輿に住せしめ、自ら戒を受けて弟子の禮を執り、崇信日に腆し。翌歲圓覺に遷る。一住七年東關の禪客旁午請謁す。寺偶に白雲庵を卓て、靖間の所と爲す。後、建長・萬壽・東勝・壽福に歴住して三十年に垂んとす。海衆を引接すること始終一の如く聲丹墀に達し建武二年秋後醍醐帝敕を下し朝廷の爲めに上堂せしむ。曆應三年復た建長に住し第五登と爲る。夏六月微恙を示して庵中に退居す。法語眞讚を需むる者晝夜武を接して門に填つ。明酬酢常の如く筆を執りて難む色無し。十月三日夜漏將に盡きんとす。侍僧に問ひて曰く、塔已に成るや否や。曰く、已に成れり。明曰く、畢竟事作麼生。侍僧語なし。首座別源圓衆を出で、曰く、青山白雲。明曰く、我れ去らん。首座曰く、和尚那裏に去らんと要するや明拳を豎てて之に示す。首座便ち禮拜して曰く、三十年後人の拳するあらんと。明遺偈を書して曰く、六十九年有生有死古渡雲收青山在水と。筆を擲つて逝く。門弟子全身を昇いで本庵に瘞め塔を大明と曰ふ。生前自ら塔銘を撰して曰く、

東則東明。西則西明。道無方所。故曰大明と。天童の雲外雲明の頂相に贊して曰く、器量宏深。範儀出格。眉分海嶠雲。眼帶鄞江月。得古柏傳芳之意。入妙莊嚴城之室。玄機借路。洞水逆流。偏正互融。功勳不昧。有時說一句如須彌頂上擊金鐘。有時說一句如瑠璃殿前栽玉樹。有時如桂棹蘭舟兮自在。有時如濤山浪屋今崩騰。潑天聲價難收。動地風雷易發。夫是之謂曹洞十五葉之正傳。東明禪師叢林禪伯。淨慈の靈石芝も亦之に贊して曰く、軒昂氣宇。豁達襟期。穎叢林之翹楚。鍾鄞嶺之英奇。索出牛兒。領直翁單傳密旨。揭翻華藏海。奪雙峩向上迅機。方遊不固。道行徇時。董七處望刹。破群犀柄生疑。不萌枝上春花慘玉。夜明簾外霜月流輝。振洞上玄旨於扶桑國內。雷霆百世者大章一夔。師贊の讚も亦云ふ、爍々東明師。歷任六大刹。堆然接海衆。其體裁布置。隨時應機。如弄春花。似向新月。吾欲讀東明師之道。馳書不到家矣。法嗣に別源の外、不聞契壽勝圓月逢圓太虛契少林春等あり。明に圓旨侍者參天童老人の偈あり曰く、家貧累子遠馳求。喜有同風未寂寥。古錦一機新織就。春歸東谷雪初消。又た中岩圓亦曾て明の會下に在り。明に圓月侍者南遊の偈あり曰く、從來無人教壞我。我又安能教壞人。若是金毛師子子。懸崖一擲自翻身と。明、平生、清拙・明極等と往來唱酬したり。

第二節 著述及び詞藻

東明に七處十一會の語録あり。今史料編纂掛所藏寫本は表紙に白雲東明語録と題し、内には東明慧

日禪師語録と爲せり。三卷三冊に分つ。山城一乘寺村圓光寺藏本を謄寫せし者なり。圓光寺藏本は元錄五年、梅峯信の瑞鹿の白雲大明塔院の陣置より出して京師書林をして重刊せしめたる所に係る。上卷の首に元の至治二年蘆華道人の別源の請に由りて作れる序文あり。又天童の軸雲外の東明住白雲諸山疏あり。次に白雲・禪興・圓覺・壽福・建長・萬壽・東勝の諸語を收め、中卷には再住建長・壽福圓覺、三住圓覺の諸語、小參、法語、及び佛祖贊を收め、下卷には自贊、題跋、偈頌、小佛事を收め末に古杭南屏の灵石芝、及び雲外軸の亦別源の請に因りて作れる跋語、竺仙の東明塔銘、明極の東明字説及び梅峰の重鐶の跋文あり。

東明語録詞萃映發白雲流水空靈容妙の致を盡す。洵に是れ叢林の珍師贊の讚辭虚ならざるを見る。乃ち今特に其の數條を摘録すること下の如し。

轉身白雲影裏。明月趁夜舟而來。繼踵禪興寶坊。玉花慘枯木之上。直得頭々應用。處々全彰。黃閣簾垂。裏許暗通消息。紫羅帳合。何妨密撒眞珠。偏正不曾離本位。功勳復妙見回途。

禪興小參

窮萬化之根元。體空明妙。極離微之出沒。圓湛亡依。便可以隨物作則。應緣無礙。且作麼生說箇應緣無礙底道理。良久曰。野雲收半夜。明月上前峰。 圓覺上堂

用而不動。寂而不凝。清風偃草而不搖。皓月普天而非照。新豐古佛。是則雙明齊運。事理俱融。只如千波競注。是文殊境界。一旦晴空。是普賢牀榻。借一句如指月。其中事如畫月。從上宗乘中事。如節度使信旗相似。又作慶生。良久曰。一片月生海。幾家人上樓。圓覺中秋上堂

真機不立。妙應無方。借位明功。月晒露梅香破玉。借功明位。日和堤柳靜搖金。等是秀發壺中。化分三量外。更須知有三全功宛轉位裏逢迎底時節。始得。因甚如此。岸斷疑無路。山回別有村。

壽福進退職事上堂

盧明田地。似玉無瑕。月冷秋清。蘆花覆雪。當與慶時節。誰是應時納祐者。暮拈拄杖。卓一下曰。石女夜拋梭。織錦於西舍。萬壽上堂

第十三章 清拙

第一節 傳記

元より渡來して大に文字禪を鎌倉末期に振起し、南北朝學者を誘啓せる者に清拙あり。

清拙名は正澄、元の福州連江邑劉氏の子、家世々儒を業とす。母孫氏僧伽授くるに神珠を以てすと夢みて振むことあり。四歳にして學に就く。英智倫に邁ぐ。十五にして伯父月谿圓公に城南の報恩寺に依

りて落髮す。十七鼓山の平楚聳禪師に參して會下に敲問すること六年にして去つて浙に入り、愚極慧公に淨慈に謁す。極順世し方山寶公來りて其の席を補す。命じて經函を掌らしむ。後策を杖いて遊方し。灵隱の虎巖育王の東嶼蔣山の月庭等諸老を見る。皆之を器重す。一時の龍象古林茂、東嶼海、竺田心、斷江恩の如き皆其の同參莫逆なり。後虛谷陵公に仰山に謁す。谷擧げて版首に居らしむ。澄擧屠尊嚴禮法を失はず一衆肅然として叢規大に整ふ。谷徑山に遷り晦機熙公來り代る。澄亦衆に首たり。袁州太守王本齋一面して道を問ひて膠漆の如く翌日公奉疏請して雞足山に出世せしむ。一住四載道俗風を仰ぐ。又衆請に應じて松江の眞淨を補して丕に法柄を振ふ。泰定丙寅六月我國の請を受け神足永鎮等と海に浮び、秋博多の濱に著く。乃ち嘉暦二年なり。明年正月平安城に入る。北條高時專使を遣し迎請して建長に住せしめ大に製規を行ひ、鐘鼓響を改む。居ること三載にして淨智に移る。結制上堂に不得著守頑空生斷滅見。青蘿寅綠。直上寒松之頂。白雲澹沓。出沒太虛之中。萬法本閑。咄。切忌錯會の語あり。明年圓覺に入る。辭衆上堂に、蕩々十虛。無内無外。住無靜相。去無動心の語あり。住職四歳にして福山の禪居庵に退居す。元弘三年後醍醐天皇龍馭維に入るや、拙に詔して建仁に住せしめ、莊田若干畝を賜ふ。居ること三載、衆と苦甘を同じうす。一日帝詔して大内に入らしめ、命じて南禪を主らしむ。拙辭するも聽されず、乃ち命を拜す。南禪に住すること前後兩回、信州太守小笠原貞宗其の道貌を

欽し、就いて戒法を受け、開善寺を州内伊賀良縣に窺め拙を迎へて開山第一世とす。住すること二載にして東山の禪居庵に歸る。旨ありて再び建仁を董す。湖海の雲衲歡喜踴躍す。曆應二年正月、微疾に嬰るも弟子の爲めに指畫輟まず。又自ら上表を作り遺書を裁し、殊に勸色無く藥餌を進むるものあれば笑つて之を卻く。十七日剃髮沐浴して新衣を著け、談笑平常の如く伯州太守土岐賴貞等に應接して戒法を授け、偈を書して曰く、毘嵐卷空海水立。三十三天星斗濕。地神怒把鐵牛鞭。石火電光追不及と。筆を擲つて逝く。壽六十六。龜を停むること三日、容貌紅潤生けるが如く、道俗先を争ひて香華瞻禮す。藤典厩某計を聞き榻前に至りて泣拜す。拙俄に目を開き戒語を授け即ち目を閉づること初の如し。建仁建長の禪居庵に塔す。上遺表を見て轟然として哀歎し、諡を大鑑禪師と賜ふ。拙専ら百丈清規を行ひ叢林の禮樂斯に至りて盛典す。其寂亦偶々百丈の忌日に當れり。元の四明の東陵瓊公、金山の即休了公は拙の故舊にして共に塔銘を爲れり。法嗣に天境靈中致溫清中性瑜義空忠獨峰正獨芳等あり。又鐵庵・明極・雪村・夢窓・中岩・龍山岩山二人在元相知 嵩山・乾峰・蒙山等と交友ありしこと其の遺す所の偈疏によりて知るべきなり。

第二節 述作及び詞藻

高僧傳に清拙著す所語錄七卷並に大鑑清規ありて共に世に行はると曰へり。今東大圖書館所藏別置

の語錄は建長・淨智・圓覺・建仁・南禪の五會の語を録し、三冊に分ち正徳二年の活字版にして首に元の至正三年鄧峰の正印の序あり。中に云ふ、昔無準石田二大士。同出破庵之門。而無準一枝。橫出於扶桑久矣。今石田二世。得大鑑。與諸大老。抗衡於東海之上。風蜚雷厲。玉振金聲。石田一枝佛法流通。自師始也。師示寂後五年。其徒堅一藏主。携五會錄來。求題於余。刊行于世。云々。五山文學全集第一輯には禪居集を收めたり。此れ拙の偈頌疏文の遺稿にして製作篇什甚だ少からず。學術精深筆力勁健其の爲人と相副ひ、當時學徒の矜式する所と爲り、其の渡來後十三年間の努力發揮我が文海に影響せるもの頗る大なる者ありしや疑なし。竺仙と共に稱して斯壇の二雄と爲すべし。師蠻の贊に云ふ、其句語無礙。如禹之行水。而不鑿於智耳。大凡東渡宗師。十有餘人。皆是法中獅也。至大鑑師。可謂獅中主矣と。今其の若干篇を下に録せんとす。但其の偈語を含まざるもの乏しきを憾とするのみ。

東海游

南洲海色凝瑠璃。上映碧落清無疵。譬如明鏡互鑑照。未易矚目分崇卑。玉盃倒懸蓋水面。藍澱遠漲浮坤維。金鳥曉浴紅瑪瑙。銀蟾夜碾青玻璃。高深一體俱莫測。變化萬狀誠難知。蛟龍睡穩宮闕廣。鯨鯨戲擲波浪隨。呀吭忽成堆阜湧。飛雪半作霧雨吹。接雲螺喚光眩眼。張空火傘寒生肌。丙寅六月歲泰定。吾道自此行東之。平生胸次小瀛渤。長風巨艦共遨嬉。耽羅高麗在吾左。扶桑日本

至可期。斯遊豈爲山水樂。願與祖室思安危。人言觀水須到海。此意遠詣當語誰。浮幢王利渺何許。百億香水迷津涯。普賢境界罔思察。一毛孔內纔毫釐。修羅過腰尙嫌淺。鐵山匝圍須彌。

遊臨川寺

祇林厦屋臨長川。嵯峨勝域真超然。神龜背負萬松奇怪照地赤。上有雪櫻千樹青相連。小倉何輪囷。青壁無路愁蚤緣。嵐山玉霧起晴晝。朝暮蒼蒼鬱蒸雲天。法輪金碧出林抄。虛空藏界流禪飄祥烟。山豈愛人人看山可愛。梅津松尾縹緲連山田。金剛古院鯨吼月。梅檀瑞像來優填。西禪道者長打坐。一麻一麥滿庭積翠封苔錢。大井河無音瀑。交流赴海輪潺湲。雨多溪漲石齒怒。誤聞大塊噫氣號山巔。真機活意塞穹壤。一一旁午環吾前。居僧幽隱世味薄。影不出戶唯安禪。人由境兮道益盛。境有人兮名始傳。萬富樓中趙州老。大方龍象加筵鞭。緣生如麻悲願廣。中流兩岸母停船。伊予衡廬臺雁夢想絕。沈吟此地若可終餘年。京城三歲只自餒。便當拂衣徑去千峰萬峰皎月聽寒泉。

宮根嶺

泥深棧道滑。十步九折遷。牽挽勞人力。如彼上瀨船。雖云乘肩輿。坐若針隱氈。君馬在吾右。約東巖後先。僕夫半沒脛。咫尺憂路顛。往來共歎息。此路開何年。積雪壓山谷。千林樹水懸。回觀富士頂。倒覆白玉盆。微霰入懷袖。白日徒在天。況當孟春盡。尙駐窮冬堅。俯見宮根廟。突兀清

湖邊。莫辭辛苦行。明日鎌倉前。

橫州春景

山遶水兮水遶山。亂青虛碧界塵寰。烟凝萬柳瀛橋畔。春入千林金谷間。桃李艷催潘岳興。櫻花笑慰石崇閑。紅葩白蕊俱堪愛。嫩葉柔枝低可攀。舞蝶醉香狂汲汲。嬌鶯囀暖語關關。海中只欠乘桴孔。巷上何看掩戶顏。古岸風過波面皺。欹巖雨後蘚痕斑。咸將佳景賦齊物。滿目韶光題取還。

徧界一覽亭記

名區勝槩。充塞寰宇。天慳地秘。常恪於人。唯深機上智。旁搜遐討。搜玄剗贖。得司其要者焉。相陽之東。有紅葉谷。紆嶺而上。一牛鳴地。入錦屏山下。流泉脉脉。前淨智夢應石禪師。鑿巖敞地。創瑞泉練若以居。前峰後洞。巧奪造化。洞之西。略約橫空。風磴委蛇。盤迴十八曲至絕頂。翼然新亭。名之曰徧界一覽。暇日招予。臨眺其上。大矣哉。屏張障列。若是其周回也。前有巨溟浸天。萬頃一碧。海外鬼。而傑出者。宮根走湯。神山鬱然。左有長谷圓通大士闡化之境。右當富士之雄。綿亘數百里。立空數千仞。積太古雪。突兀雲際。鶴岡靈山。則又分其次焉。且夫山川融結。高低遠近。各不相知。能司其要者。俾衆美奔趨。如揖如獻。千奇萬怪。雜然前陳。使天不能慳。而地不能秘者也。幽花異卉。爛漫群發。雲敷錦覆。香風遠吹。方春之時。登斯亭也。則使人

觀色明心。聞香入理。珍林寶樹。翹幢偃蓋。紫翠浮空。巖巒秀潤。方夏之時。登斯亭也。則使人增神育志。長養聖胎。霜露既降。楓林盡赤。商飈凄冷。來雁叫雲。方秋之時。登斯亭也。則使人精爽飛越。覺天明明。大雪新霽。凍日出海。諸峰璀璨。萬象寒色。方冬之時。登斯亭也。則使人還源返本。歸復實際。然則斯亭者。非徒爲遊觀之樂而作也。夫嘗試論之。十虛無間之謂徧。心所至極之謂界。殊途同歸之謂一。境與神會之謂覽。然此予之所謂人人者也。若夫包二儀。超三界。育萬物。空群像。則山中主人。獨而有之。又非人人之所能知也。主人謝請以爲記。嘉曆四年己巳脩禊後十日。

天隱四六圖本に建仁清拙和尚四六句法あり。云ふ、長句不可過十字。短句不可減四字。一篇不可過九對十對。不可減六對七對。隔句對句。不可過二對。短對不可過三對と。

第十四章 天 岸

鎌倉期の末に當りて清拙・明極・竺仙等東渡の諸龍象と應接し、彼我兩國文字禪界交通の橋梁をなす者に天岸あり。

第一節 傳 記

天岸名は慧廣、姓は伴氏、武州比企縣の人、年十三にして佛光元に建長に投じ、又往いて佛國高に雲巖に依る。天性伶俐禪學の外文翰に達す。既に印訣を受け出でて諸刹を敲きて造詣益々深し。後圓覺に歸して第一座に居る。元應二年天目中峰和尚の道風を聞き、同志物外什等數十人と太宰府に往き明年春洋に浮ぶ。時に年四十九。船中にて忽ち中峰の遷化を知り舉哀一偈あり。曰く、萬斛堅舟何所載。都盧一個大疑團。中峰昨夜利竿倒。打破一團無應看と。物外等之に唱和し、編して巨海一滴と曰ふ。岸既に天目山に登り前偈を以て寺主に呈す。主希有の想を爲し柱杖并に中峰の眞蹟及び幻住庵記を以て岸に與ふ。尋いで江右に諸祖塔に巡禮し、袁の仰山を過ぎ、道に翰林學士揭文安公僕を訪ひ、屬して佛光塔銘を作らしむ。丙寅の歲、錫を洪州の翠巖に掛け、佛國の語録を抱いて保寧の古林本覺の靈石及び鷄足の清拙に謁して之が題跋を求め、海に東浙に走せて徑山南北の叢社を徧歴す。後復鳳臺に回りて古林に侍す。林甚だ器重す。時に竺仙同じく席下に在りて共に住す。仙人に語りて曰く、廣首座二六時中坐禪言句を做すを除くの外別に他想なし。佳衲子と謂ふべきなりと。竺仙の來々禪子集に懷天岸首座の詩あり、曰く、亮月上空碧。桂影青婆沙。故人在遠道。照我良夜歌。我歌聲慷慨。氣與山嵯峨。故人不可至。如此良夜何。又別源の南游集に和天岸首座大江舟中韻、又和采石渡、寄天岸首座の諸詩あり。適々郷舶至り、明極聘に應じて東渡せんとす。岸乃ち具さに本國禪席の盛を言つて之を強ひて偈に

來る。時に我が元徳元年なり。岸洋中設成あり、曰く、沂盧東渡扶桑碧。萬里無山天水橫。識浪多於滄海澗。人情輸與道途平。不知帆腹孕風飽。只見船頭向日行。爭得任公重下釣。六鯨一掣到蓬瀛と。明極之に和して曰く、蒲帆十幅掛危檣。截破洪濤萬壘橫。風正不須愁海闊。路遙何必待潮平。已投幻質三韓去。昔羨虛名兩浙行。來往鶴書應可卜。扶桑咫尺是蓬瀛と。又岸の到岸の作に曰ふ、卸卻風帆船到岸。驚人波浪怕曾經。青松陰裡白沙上。閑嘯閑吟歇又行と。善狀と謂ふべし。既に歸りて物外庵に居る。口號あり、曰く、歸隱方休事杖鞋。綠鏡門逕長莓苔。厭繁斫却軒前竹。放取一天明月來。又曰く、翠竹青杉園老屋。紫蘇黃菊滿疎籬。獨居物外無拘束。日上月沈十二時と。明年春出でて淨妙に住す。三門を指して曰く、推門者多。拔關者少。即今要關鑿。因莫道鷄天曉と。江湖傳へて絶妙と稱す。四來の禪客園遠隨侍す。建武元年足利家持尊氏相州功臣山に建忠報國寺を建て、岸を請して第一世と爲す。北條高時豆州の香山寺を靱めて敦請し、又淨智の請ありしも皆高臥して就かず。建武二年三月八日病に遘うて跣坐し、辭偈を書して曰く、末後一句佛祖不知揭翻大海躍倒須彌と。又手して寂す。行年六十三。報國の側に塔す。休耕と曰ふ。勅して佛乘禪師と諡す。

第二節 著述及び詞藻

天岸著はす所の偈讚類の稿を東歸集と曰ふ。史料編纂掛の所藏二本あり。一は修史局の明治十九年に

報國寺本を影寫せし者、一は同廿年相國寺本を影寫せし者とす。報國寺本は天岸手録の原稿にて字體行草交へ用ひ遒逸高雅亦珍とするに足る。集中に送筆の詩あり。書法筆意を論ず。即ち以て其の自贊と爲すべし。相國寺本は元祿十六年京師書林の刊行に係り、今又五山文學全集第一輯に收めらる。此の本は前の報國原稿本を改編次序せしものにして又若干の増補あり。卷末附する所の天岸傳は臨川の龍睡・座元なる者の撰にして、高僧傳に較して稍や多く精確を得たるに似たり。卷首に澄月潭の序文あり。中に云ふ、余曾觀竺仙爲師諱晨陸座法語。其中說禪師富於製作。琢成言句。清新可愛。出人意表。今讀此集。竺仙之言不虛矣。又夢窓國師錄中。與師唱和篇什有數首。今見此集所載其原韻。因知師與國師填篋造奏水乳相合。昆仲法誼。尤爲敦厚云々。今本集を通檢するに、其の在唐中作には并正續祖師塔、拜明教祖塔、宿鶴林寺、寄龍山見首座催回鄉、寄竺仙藏主在徑山、寄呈雲門斷江和尚、遊天童、大慈山、國清寺、石隱、次雪村藏主閩中韻、下閩道中、過嚴陵臺、過蘭溪、越王臺等諸偈詩あり。歸朝後の作には赤間關次清拙和尚韻、次夢窓西堂寄明極韻、次韻謝竺仙惠茶等あり。此の類以て其の足跡交際の及ぶ所を見るべきなり。但だ其の作品に至りては則ち概ね平淡、特に奇警なるものあるを見ず。其の唱すべき者幾ばくも無し。然るに天岸の當時、藝文輸入に於ける影響は重大なるものあるを以て左に其の作若干篇を録す。

樹々着芳紅爛熳。峰巒無處不春光。夜來雨打巖花落。送出滿溪流水香。

英山號

杖鞋曾媿點盆埃。佳處優遊心未灰。閩苑花回芳事遠。院門竹暗翠雲堆。求閑無客逢僧話。訪古有人尋鶴來。浩々清聲同老素。謂言叢社又重開。

宿鶴林寺寄呈息休長老

放洋十日竟無山。漸說平生眼界寬。弱水誰言三萬里。扶桑仙島照眸寒。

喜見山

再接高城信。江鷗不冷盟。風塵孤客迹。金石古交情。一夜對燈影。何時共雨聲。看君雙鬢上。思我雪千莖。

寄答高城卍字堂(三首)

踏盡溪聲一逕窮。蕭條深院亂山中。不知香火幾年遠。吹面欲寒花木風。

遊山寺

第十五章 明 極

清拙と略同時に渡來し、道望殊に一時に高く、風化に關係すること大なる者に明極あり。

第一節 傳 記

明極、名は楚俊、元の明州慶元府黃氏の子、性姿閑雅にして戲弄を好まず。幼にして郷庠に入る。誦課強記、倫輩に冠たり。年甫めて十二にして靈巖の竹應喜和尚に投じて剃髮受具し、去つて横川琪禪師に玉几峰に參して昕夕研精す。又虎巖伏和尚の化を冷泉に旺にするを聞き、往きて侍し、更に天童

に屆りて藏鑰を止泓鑒公の會下に掌る。金陵の奉聖に出世し、繼いで瑞巖普慈の二寺に遷る。印を葵の雙林に解く。徑山、靈隱、天童、淨慈皆第一座を以て之を聘す。至る所の諸刹包笠門に填ちて爐糲宏敞なり。至順庚午、極年六十九、書幣に應じて東渡す。我が元徳二年に當る。乃ち京都に入る。後醍醐帝之を宮に召して問答して大いに喜び、佛日燄慧禪師の號を賜ふ。攝の廣嚴寺を創建して第一代と爲る。續いで相州に抵る。北條高時請じて建長に住せしむ。居ること二載、雲澤庵に退靖す。幾ならずして再び建長に住す。湖海の雲納山中に靄著す。檀越あり。律を革めて禪と爲して報恩寺と名づけ、極を請じて開山祖と爲す。已にして詔を奉じて洛の南禪建仁に遷る。釋氏の宿願儒宗の備彦風を望んで至る。建武三年九月二十七日を以て建仁の方丈に寂す。辭世の頌に曰く、七十五年一條生鐵、大地粉碎虚空迸裂と。門人爪髮を併せて建長の雲澤及び南禪の少林二塔に分藏す。閱世頌の如し。神足春谷(永蘭)、竺堂(田瞿)、艸堂(得芳)、不味(奥志)等六人、皆大利に分據す。艸堂の下傳へて惟肖を得たり。明の天臺國清禪寺の文懿大師夢堂曇噩其の塔に銘せり。師蠻の贊に云ふ、燄慧禪師年垂古稀爲弘道而來、雖時孔艱、願輪不撓、以臘德共邵、夷華悉靡風、自非容攝三世十方於屋裏、點發九流百氏於毫端、豈能至斯耶と。

第二節 著述及び詞藻

高僧傳に云ふ。明極に支那日本九會の語録ありと。今東大圖書館本明極録は原と南禪寺天授庵の所藏寫本にして四冊より成る。第一二冊は建長報恩及び建仁の諸語を收め、第三冊は語要語法序引題、跋、古風、五言律偈、七言律偈、偈頌、道號、小佛寔を收め、末に延祐丁巳秋徑山の希陵希陵淨慈の徳海徳海及び靈隱の演明演明の跋文あり。第四冊は語要警策及號說及び曇靈の塔銘を收む。五山文學全集第三輯には明極楚俊遺稿を載せ、別に偈頌古風類一篇を加へ、語録、道號、小佛寔を省き、語要は唯其の號說の小部分を取れるのみ。其の解題に云ふ、大永五年永洙の奥書ある謄本に據りて其の詞藻のみを抄輯すと。又末に夢憲・明極唱和篇を附せり。

明極述作頗る富むと雖も、専ら禪語に屬し、且つ其の平生詞章に於て甚だ意を用ひざりしを以て佳作として選取すべきもの多からず。然るに當時叢林學徒に影響を及ぼせしこと蓋し淺鮮ならざるべし。故に今其の數篇を摘録して其の體裁を示すこと下の如し。

天若無雪霜。青松不如草。地若無山川。何人重平道。願天霜雪多。願地山川窮。善哉君子人。萬世國之寶。古 意(二首)

幽居無出野僧家。白屋三間護紫霞。臨淵掬泉閑嗽口。傍籬拾竹自煎茶。黑猿抱子坐開法。青鹿呼群跪獻花。寄語世途塵俗客。淡中滋味實堪誇。 山 居

秋抄風清海郡城。再逢重九又欣晴。登臨未落孟嘉帽。酌酎先傾杜牧觥。繁臂紫萸疑復信。挿頭黃菊笑還驚。新詩有約來無定。辜負長檠燦夜明。 和長山王司丞閏月九日約來不至韻

窮郊雨歇暮天低。四野遐觀絕町畦。賓雁尙留淮甸北。春陽只隔楚山西。塵空鷓鴣迎風轉。脫伍騾駒背日嘶。莫向東南送遊目。神馳涉入恐成迷。 和一山和尚晴原春望韻

占斷天地春。氣槩壓群木。凜然冰雪姿。卓爾鐵石骨。浮動萬斛香。橫斜幾枝玉。百年日苦短。千載事誰足。不如居此林。恬然享清福。 贈梅隱費學士

客舍鄰居未久時。締交來往熟相知。通心吾以筆傳舌。領意君將眼聽辭。展席尙存唐宴禮。對賓猶習漢冠儀。最忻洞曉禪中旨。話葛藤時略露眉。 寄大友殿直翁居士(二首)

天地遽塵耳。客塵東復西。空花及夢幻。終當何所歸。世不重黃綺。我豈輕夷齊。結屋遠人境。口腹甘蕨薇。 山中雜言十章(四錄)

空岩閨且寂。此地真吾家。蘿葛謾駢織。松竹相交加。不羨珠無類。不羨玉無瑕。惟羨七寶池。一朵青蓮花。 同 右

有石如砥平。有泉如鏡清。鏡清可鑑貌。砥平可投誠。我無阿附意。我忘妍醜形。不知何所堪。相與長堅明。 同 右

東池種白藕。滿院香風清。一盃陽羨茗。數卷楞伽經。不送陸修靜。不邀陶淵明。龍吟天地靜。堪與誰交盟。

同 右

暮投烏回山。石榻暫一借。化龍竹已蒼。棲鳳梧未謝。月華照水明。洗我襟懷清。松頭有白鶴。便欲翔青冥。

宿烏回寺

苦吟不到。客枕夢何靈。開譙觀風閣。吹蕭進德亭。月臨書幌白。煙鎖梵樓青。覺後成追憶。揮毫寫石屏。

紀夢吟

雲首座自閑號說

白雲無羈。冷淡清奇。雪格鶴態。類之不齊。既無心而出岫。亦何意於雨施。或偶然狀爲蒼狗。或倏然變爲白衣。斯皆浪情思。絕念慮。不期如是爲而如是爲。觀其或開或合自若也。或捲或舒自若也。悠揚閑淡。亦自若也。凡曰雲者。必以閑爲表。凡曰閑者。必以雲爲表。世人通知者也。崇福義雲首座。問號於予。因撫曰自閑。授之。復請爲說。以曉其義。乃爲之曰。雲之閑。卽人之閑也。雲不閑者。風所飄蕩。龍所駕御。施霖雨。澤萬物。雖有用於世。濟於物。終不得閑淡靜雅。有自若之態也。林下人之別稱。不宜用此。何也。以道德仁義根於心。以溫良恭儉發於外。所以立身揚名。皆有矜式也。首座以爲如何。雲曰然。故書以爲贈。

山 外

第一章 足利學校

足利學校は下野國の足利に在り。或は小野篁の創設に基くとし、或は古國學の遺址なりといはるゝも、皆詳かならず。足利時代に入り永享十一年に鎌倉の管領上杉憲實が、五經注疏等の多數の珍本を寄附せしより再興せられ、僧快元を座主に任じ、孔子の聖像を安置し、次いで聖廟を建て釋奠の禮も擧げらるゝに至れり。當時肥後の菊池氏も同じく釋奠の擧ありしと、東西相對するものなり。憲實の子憲忠は周易注疏を、孫憲房は孔子家語・十八史略等の經籍を相次いで之に收め、父祖の志を成せり。

第二章 金澤文庫

武州の金澤文庫は、文永の頃より北條實時及び其の子顯時曾孫貞顯等相承けて經營せしものにして、建長四年には宗尊親王東下と共に清原教隆等の扈從して來り、北條氏を指導し、之がために經史の書寫點校に盡すこと尠からざりき。正平天授の際、學僧義堂の此の文庫を訪問せる詩あり。其の後其の

圖書、永く稱名寺の僧徒の保管に歸せり。文明年間に僧萬里來遊の詩あり。然るに此處は専ら儲書を主として足利學校の如く學徒に教授するに至らざりしも、其の儲書は徳川時代に入りて江戸に移され、先づ南富士見亭の文庫に收められ、次いで紅葉山文庫に移り、遂に今日の内閣文庫の中に歸せるは幸とすべきなり。就中羣書治要四十七卷、續本朝文粹二十三卷、太平御覽百十四卷等は其の尤となす。

第三章 朝廷儒者

鎌倉時代に入りてより、朝廷儒者の權威益々地に墮ち、偶々氣力あるものは、大江廣元の出でて、源頼朝の霸業を助成し、頼山陽の所謂其の才俊、以資梟雄に過ぎず。菅家の如きも、其の中に當時有名なる爲長さへも僧侶の難詰に會ひて辨駁する能はずして、一世の笑話となりて残れる如きあり。爲長の外、後に北畠親房・藤原時房二人の見るべきあるも、餘の日野氏・洞院家等は殆んど儒名あるに過ぎず。

第二篇 吉野朝期

山内

本紀

第一章 虎關

第一節 傳記

虎關名は師鍊、姓は藤氏、平安城の人、父は左金吾校尉、母は源氏、共に賢行あり。五子を生み、虎關は其の季子也。弘安元年四月既望に生る。伏犀額を挿み駢齒疎眉穎悟群を出づ。幼にして讀書を好み日に千言を記す。而して性多病、母其の勞を慮り、卷を奪つて深く藏せば、彼必ず搜索して之を讀む。母止むる能はざるを知り遂に之に任す。八歳にして寶覺和尚に三聖寺に依る。覺一見喜んで曰く「是誠千里駒也」と。十歳にして祝髮、叡山に受戒す。是年日に論語二篇を課し、隨つて讀めば隨つて誦し旬日にして擧ぐ。又十二歳にして寶覺より起信論を授けられ、明日之を背誦し、琅々卷を終へて一

謬なかりしと云ふ。覺一日上堂するや、虎關衆より出で問うて云ふ「如何是正法眼藏」。覺曰く「破沙盆鍊」。曰く「休將常住物作自己受用」。覺曰く「打草唯要蛇驚鍊」。曰く「忽化龍去時作嬰生」。覺曰く「拏雲鷹霧」。時に虎關歳僅かに十四、叢林傳へて奇譚と爲す。覺曰く「吾道を興す者は師鍊也。憾むらくは吾老いて焉を見るに及ばず」と。此より虎關を導くや寛を以てして少しも策勵を加へず。謂へらく「北溟の物其自ら記して鵬と化するに聽すのみ」と。覺死して游方す。規庵に南禪に依り、桃溪に南禪に參す。規庵に依れる時歳十五、龜山上皇下宮にあり、虎關の銳氣、稠人に出づるを愛せらる。十七歳、洛に歸り名縉碩儒に謁し、内外の學其の條貫を竭す。其の時儒者在輔に從つて文選の説を聽くや、在輔家に祖道眞公の自ら點竄を加へたる文選を秘藏し、天子侍講の外は凡て人に示さざるも、鍊の如きに對しては定規を慎しむを得ずとて之を講ずるを許せり。二十歳にして建仁に無隱に依る。時に虎關、源僕射有房と支許の游あり。有房人を屏け語つて曰く「易なる者は吾道の繼也。大臣吉備公より三十餘傳して我に至る。其の授受人を得ずんば則ち已まん。我れ吾家の童を顧みるに委託するに足るなし。乞ふ煩はずに此の託を以てせん」と。乃ち經及と筮秘説を傳へらる。此の如くして虎關は其の二十餘歳に及んで既に佛典語錄九流百家の書を極め、内外の學奥に通じ、苟も當時に行はれし學術は皆兼ねざるはなく、當時に存せし書籍は大概漁獵記誦せざるは靡く、巖然等類に頭角を現し、偉

大の氣局を示せり。而して其の特に心慕する所は、宋初三教一貫論の仲灵禪師潛子にありきと云ふ。亦以て其の志せし所を知るべき也。正安元年即ち鍊二十二歳の時、寧一來朝して京師に館するや、鍊往いて之を見、忽ち感發する所あり。謂へらく「今時此方の庸流奔波して元土に入る。是れ偏に我國の耻を遺すのみ。我其れ彼をして國に人あるを知らしめん」と。既に行を治め海に浮ばんとす。母源老且病を以て強ひて止めしを以て止みき。彼の遺憾や想ふべき也。然れども當時苟も渡海するもの、外に走せて内を忘れ、直ちに彼土の風に化せられ全く本朝を忘れ、歴代の故實に疎遠となれる情勢ありしより見ば、彼が行を止め其の全力を他日修史の事業等に注ぐに至りしは寧ろ幸となすべからんか。徳治元年二十九歳にして聚文酌略を編す。三十歳相州に行き寧一山に謁して書を献ず。一山甚だ之を稱揚し、又一偈を送つて曰ふ。「高人間疾過巖扇。一默相看意已傾。不是忘懷於道術。荒涼野徑有誰行」。是より屢々一山を訪ひて弘く諸種の學術を審詢し、得る所あり。其の修史の志の如き亦一山の激勵に由れるなり。三十三歳の時、無爲和尚北條氏の依頼によりて虎關を掌記となし、俗事に鞅掌せしめんと強ふ。彼れ表に拜して舍に退くや、群衲麋至して賀す。彼左右を顧みて笑つて曰く「我少年の命を聞けり。諸公何の爲めに來るや」と。其の自重の意氣を見るべきなり。虎關東西に遍歴する事殆んど二十年、名聲一世に聞ゆ。後伏見帝の詔によりて歡喜光院に居り、三十七歳にして梅坡道人なる者、京

師白川の北涯に一庵を翫め彼を招きて居らしむ。彼此に扁して濟北と曰ふ。室を掩ひ事を謝し専ら著述を以て務となす。三十九歳勢州景陽山を開く。四十五歳釋書稍成りて後醍醐帝に奉る。四十七歳三聖に入る。六十二歳南禪に住し、後東福の海藏院に退きて閑居自から風月主道人と號す。高師直亡父のために拈香を乞ふも、禪規に依り常用すべきにあらずとて許さず。尊氏招きて建長に入らしめんとせしも亦聽かず。人の勸むるあるも笑つて應ぜず。南帝後村上帝道風を尙びて國師號を賜ふ。貞和三十九歳を以て寂す。

虎關性健にして而も順温にして而も動作度あり。人に對しては言寡し。然れども若し語の日本支那の先言往行に及べば、則ち便として日を終ふ。其の窓紙破れて糊せず、草萊蔓して芟らず、身古道に率ゐて世と俛仰せず。眞に學者の高風を缺かず。平居また禪徒の晋清虛者流となるを惡む故に、世亦之に對して其の徒らに多く字を識るを以て之を誹るに至る。蓋し識字は禪徒の専ら尙ぶ所にあらずれば也。然れども是れ虎關の爲人と其の志を知るものにあらずなり。彼曾て從容其の徒に謂つて曰く、「吾幼より儒典に旁涉し顯密を宗貫するは以ある也。若等唯に心祖宗に究むれば則ち庶焉。不んば吾徒にあらずる也」と。蓋し彼の夙に慕ふ所は潛子の學術氣象にありて、唯に參禪超悟を以て足れりとするものにあらず。故に屹々鉛槧を取りて倦まず。而して一たび稿を草し論を爲すや未だ敢て昏氣

を以て之を出さず。必ず清且に駕して焉を發す。冬日嚴寒に當ると雖も夙に起きて炭爐を避け、凜然として却坐し、龜手筆を鉤し寒卷を握る。其の詩に「愛日南窓明又暖。穩乘朝氣注楞伽の句あり」。

想ふに虎關は博學にして才識ある學者なりし也。若し偏狹にして徒に一機一境を認めて禪也とする者の眼よりして之を評せんか、虎關は其の範域に局促せんには餘りに偉大なりし也。故に之を呼んで儒となせば儒たり、道たりとせば道たり、教となせば教たり、禪となせば亦禪たり、往くとして可ならざるはなし。蓋し彼は之を禪人と稱するよりは寧ろ禪學者たりし也。是れ五山禪徒に多く見る所たりと雖も虎關を以て首となす。而して彼の儒教に對するの態度は、宋の儒を排して醇ならざるものとし、直ちに孔孟に接して儒教の真相を探らんとせり。然れども彼の最も心血を灑ぎしは其の修史の業にあり。故に歴史の上には確かに一新機軸を出し、新眼識を具ふる所なしとせず。特に其の國史に明かなりしより、時輩の支那化し印度化するとは其の撰を異にし、別に國體論を掲出して一代人心の傾向を定めんとし、又皇室を尊崇して武門の跳梁を制せんとしたるが如き最も見るべき者あり。要するに虎關は五山時代に於ける最博覽にして、學者の節操ある者の一たるを失はず。否其の内外の典籍に通曉せる所よりして之を觀ば、其の前代に於て恐くば彼に匹敵するもの決して多しとせざるべき也。況んや別に一個の主張あるに於てをや。師鬢彼を富士山と並稱して「吾國山川之偉詭物産之魁殊金眼銅鐵

之外珍奇象夥而非吾所歆羨也。夫山有富士僧有鍊公是吾之所瞻仰也矣」と云へり。未だ直ちに首肯し難きも佛教學者の評語としては當に然るべからん歟。

第二節 著述

一、濟北集二十卷 十冊

卷一 賦

卷二 五七律

卷三 七言絶句

卷四 同

卷五 偈贊

卷六 偈贊

卷七 原記銘

卷八 序跋

卷九 辨議書

卷十 外記行記傳表疏

卷十一 詩話

卷十二 清言

卷十三 祭文

卷十四 論

卷十五 同

卷十六 同

卷十七 通衡

卷十八 同

卷十九 同

卷二十 同

原本卷二の五七律を唐律と題し、卷三の七言絶句を律詩と題せり。中らざるに似たり。或は議論あるか。清言論通衡は最も虎關の學術を見るべきもの也。清言には世間的の言議多く、論には宗門十勝論病議論等あり。通衡は儒佛の事雜見す。通衡の序に曰く、

師每披百家編、遇有褒貶之可寓、或長篇累幅 或折簡片紙、敬書斜寫、而投于几側、扁曰通衡、歷居諸失手紙燃案拭者、不可數矣、加以甲戌火、散亂燼亡、十無一二、今之纂輯者拾遺也耳。

是を以て見れば通衡とは、虎關平常の雜著に蒙むらせし名目なりしなるべし。同序に又曰く、

諸議論皆通衡之各篇也、隨類移于前焉、

と。即ち本書の編者類に従ひて卷を分ちしものと知るべし。

宗門十勝論は獨り禪宗を指して宗門となし、他教と區別せんがために十所長を條舉したり。禪理を説きしものにあらずと雖も、當時諸宗派より非常の反抗を蒙むりし者にて、亦歴史上一閱せざるべからざるもの也。依りて左に略出す。

- 第一 竺乾正續 仲靈の正宗記を憑據として禪宗の正統なるを述ぶ。
- 第二 達磨位高
- 第三 祖名通呼 祖名の通稱は獨り禪門にありとす。
- 第四 派流度長
- 第五 識記遼遠 般若多羅の豫言
- 第六 墳籍收藏 當時藏に入れる禪書二百四十三卷ありとす。
- 第七 規矩嚴整 百丈清規等による。
- 第八 王臣多人 五燈及び其の他の禪書により古來王者儒者の禪に歸せし者を擧ぐ。宋に張九成

迄を擧ぐるも獨り朱晦庵を擧げざるは意ありて然るか。

第九 應齒贊 感應の事

第十 佗家推稱

又た病議論は仲靈の孝論に似たる者にして孝論の如く備はらずと雖も、虎關が思想を窺ふに於ては必讀すべきものとす。其の序に曰く、

余性多病焉、總角之先、蚤嬰疾瘵、今踰不惑者三歲、其間雖有篤薄之異、而未有不病之年矣、不特風冷之侵尋、蓋夙殃而然矣、是以當其病時、從事醫藥之外、而且觀察宿罪焉、古人有言、多病

諳藥性、余亦曰、多病諳病性焉、元應庚申病餘、分其諳之者而爲十焉云々
是に依つて見れば、蓋し彼は自家の多病より經驗し來りて此の論を得たるに似たり。然れども其中論ずる所は生より死に至り、推より實に入り、性理を概括したるものにして、徒に肉體的方面のみを觀たるものに非ざるなり。其の目を擧ぐれば、

- 一回 序章
- 二回 愼心
- 三回 守口

- 四回 防意
- 五回 業空
- 六回 轉惡得善
- 七回 得善増上
- 八回 増上無得
- 九回 念願
- 十回 勸進

一は序説なり。十は跋文の如し。二三四五は生を論じ、六七八九は死を論じ、二三四は愚を説き、五六七八は智を明かにし、二三四五六七九は權を見、八を以て實大の涅槃境に達するものとす。

一、聚文韻略五卷

徳治元年、虎關二十九歳の時成りし者、一儒者の需に應じて爲れりと稱す。蓋し古來存せる韻書の聲響を主として作れるより、今搜索の便に供せんがために新に品彙分類せしもの也。十二門に分ち乾坤門、時候門、氣形門、支躰門、態藝門、生殖門、食服門、器材門、光彩門、數量門の十門、外に虛復二門を置き、押韻の單複を分てり。虎關自序あり之を説明す。本書極めて簡略のものに過ぎず。到

底今日の用に供するに足らずと雖も、從來の分類韻書に模範を與へたる者として珍重すべきの價なしとせず。寧一山跋文あり、中に明物察位聖賢之事也、鍊公是書門分類聚、俾閱者因門以明物、因類以察倫、使物理昭、然物理觀明、則聖賢可跋云々。寛永本存す。

一、諸佛書

佛語心論十八卷

十禪支録三卷

禪餘或問禪儀外文各二卷

正修論禪戒規各一卷

右六部の書は皆純佛敎に關する者たるを以て此に解釋するを要せず。唯其の著述に富めるを知らば可なり。

一、元亨釋書三十卷

虎關は殆ど其の半生以上を捧げて著述の爲めに盡せしもの也。而して元亨釋書は其の最も有名なるもの也。今本書の成れる次第を見るに、初め虎關の寧一山に謁するや、一山彼に問ふに國朝高僧の遺事を以てす。彼或は泥んで直ちに答ふる能はざるあり。一山甚だ之がために忻んで曰く「公の外方の

事に博渉して章々皆悦ぶべきに、却つて本邦の事に至つては頗る應對に澁るに似たるは何ぞや」と。虎關慚愧發憤乃ち禪餘の旁意を國史に注ぎ、洽く諸記を撮り裁輯すること二十餘年、元亨二年漸く成りて表を付して後醍醐帝に奉り、大藏に入れられんことを請ふ。其の表文左の如し。

上元亨釋書表

臣僧師鍊言竊以聖明之代必有著述、其來者尙矣、昔者漢武之雄略也、子長纂史記焉、宋仁之寬厚也、永叔修唐書焉、二作之高出諸史之上者無、乃二主文思之化乎、我金仙氏之道、雖方外塵表之詮、至有撰編者靡不繇旃矣、

嘉祥之創梁也、逢高祖之仁裕矣、西明之續唐也、遭太宗之緝熙矣、及天壽之成端拱也、皆秦平之標幟矣、伏惟皇帝陛下、道出震德重離、稟上聖之姿、膺中興之運、街談衢話、復延天之至和、祖業宗勳、授唐虞之淳化、師鍊生無爲之清世屬、空門之斐文、僧史才疎、耻刪手於照默、宗記氣懦、謝透瓜永安、寔縮田之稗稊、禪林之樸樵者也、陛下邁五君之德、而鍾五君之譽、師鍊之五子之才、而成五子之事、熟念、明時々繁矣、昌世々多矣、然、當聖代、而茲書出焉、豈我君文思之贖化、而太平之餘標乎、今夫隋珠趙璧、照乘夜光、久棄損于路傍矣、有一夫掇拾磨拭、縑藉襲藏、玉若有知、寧不怡哉、其夫不自珍、捧獻于一人、其人又雖威重、豈無動喜容乎、蓋諸師之高德、

不啻珠璧、七百餘年、不有通傳、可謂棄損矣、師鍊匹夫之頑嚚也、視斯散落、弗能無掇襲、如是至寶不敢私畜、敬上陛下、弗爲僭越耳、林下蔬笋、酸餽彫蟲、乞降中書得受官校、若有可采、入大藏行天下、於戲瓊瑤玩弄、王者之事也、匹夫唯輸貢而已、然則此書之流播、陛下之任也、觸撼疏續、伏待斧鑕、師鍊誠惶誠懼、頓首頓首謹言

釋門事始考に曰く、本邦の僧にして上書臣を稱するは虎關より始むと。帝之を覽て大に嘉納し、將に學者を集めて校讎し而る後大藏に入れて世に行はんとす。偶々正中の際北條氏討代の事起り、帝志を得ざりしより臺評も遂に寢みぬ。虎關曾て其の寫照に自贊して曰ふ「著書獻天子、天子不稱美、述論垂當世、不爲爾、兀々亘年、形絮神樂、於戲汝已替史索性品藻釋氏、宜乎人亦以聖墨塗汝目、膠青塞汝耳、斯經故獲罪如是」と。其の失望の情察すべし。但し天子は美を稱せざるにあらざるも、多事の時之を如何ともする能はざりしなる可し。蓋し後醍醐帝の之を嘉納せしことは虎關紀年録の記する所たり。紀年録は弟子令泮の編する所、而して令泮は後醍醐帝の皇子にして出家し亦厚寵ありしもの也。故に其の言信すべし。然るに義堂の日工集を見るに、曰く、虎關釋書不見入藏乃以達磨及弘法即身成佛現實事無所據也と。亦參照すべき也。正慶元年光嚴帝位に即くや彼再び釋書を抱き表して帝に上る。帝周覽再四大に感歎し、盟ひて將に論考して行下せんとす。而るに天下猶ほ大に疲勞して朝

廷暇日少なきを以て又成らず。後光嚴帝の延文三年敕に由りて漸く藏に入れ頒行せらるゝを得たり。蓋し弟子令淬の請に従る也。是書既に鏤版して世に行はれしも、會々永徳二年海藏院に火あり、其の版烏有に歸し、弟子性海之が重刊を圖り、義堂之が疏を作り、弘く施を募りて至徳二年再版す。今日傳ふるものは多くは寛永の本なり。

本書凡て三十卷より成る。先づ其の組織體裁を見ん。

- 卷第一 傳智一之一 (達磨慧灌智藏等)
- 卷第二 傳智一之二 (榮西) 慧解二之一 (義淵等)
- 卷第三 慧解二之二 (守印法師)
- 卷第四 同 二之三 (益信等)
- 卷第五 同 二之四 (安海等)
- 卷第六 淨禪三之一 (義空等)
- 卷第七 同 三之二 (辯圓等)
- 卷第八 同 三之三 (祖元等)
- 卷第九 威進四之一 (義覺道寧等)

- 卷第十 同 四之二 (相應等)
- 卷第十一 同 四之三 (理滿等)
- 卷第十二 同 (行尊等) 忍行五 (賢憬等)
- 卷第十三 明戒 六 (普照俊仍等)
- 卷第十四 檀興 七 (行基慶俊等)
- 卷第十五 方應 八 (聖徳太子等)
- 卷第十六 力遊 九 (曇慧等) 願雜十之一古徳一 (豊國等)
- 卷第十七 願雜十之二王臣二 (聖武天皇馬子時頼等) 士庶三 (藥延等)
- 卷第十八 願雜十之三尼女 (善信光明后等) 神仙五 (皇太神宮等)
- 卷第十九 願雜靈恠 (轉乘等) 度摠論
- 卷第二十 資治表一 (起欽明至皇極合七君)
- 卷第二十一 同 二 (起孝徳至元明合七君)
- 卷第二十二 同 三 (起元正至廢帝合四君)
- 卷第二十三 同 四 (起高野至承和合七君)

卷第二十四 同 五 (起仁壽至承平合七君)

卷第二十五 同 六 (起天曆至承保合十一君)

卷第二十六 同 七 (起寛治盡建曆合十三君)

卷第二十七 志 學修一 慶受二 諸宗三 會議四 封職五

卷第二十八 志 寺像六 (向原寺等)

卷第二十九 志 音藝七 (經師聲明唱導念佛) 拾異八 (山背大兄王等)

卷第三十 志 黜爭九 序說十 略例附 智通論附

本書の組織は傳贊論表志の五格より成る。虎關之を説きて謂へらく、「傳は十也。贊は二にして或は一に繋げ或は多を綜ぶ。論又二つにして通と別なり。通は評に託して別は惑を解く。表一也志又十也五格は半數也。蓋し渾にして而して判、々にして而して渾、滿而半、々にして而して滿なるは圓極之微旨なり。故に判に寓するも小にあらずとす。十傳は其人を載する所以にして、十志は其事を記する所以也。雙十は滿數也。渾に寓して而して大を設く。一表は中に居る傳志を通串する所以也。空言を載せず之を行事に見はす。國史に采ると雖も實に釋氏之通表也。數一に止まるは雙十之統也。蓋し一は十の歸する所、十者一の成る所、天下之數未だ曾て一にして十ならざるはなし。又一者渾也。十なるも

のは滿也。渾にして滿ならざるはなし。故に一にして十に之く。滿にして渾ならざるはなし。故に十にして一に反る。是自然の理にして此書之數也」と。亦以て其の組織の爲めに意を用ひしを見るべし。

抑も古來存せる僧史に三傳あり。梁唐宋是也。虎關以爲へらく、皆偏傳にして全史にあらずと。乃ち新に表志を立てたる也。其の傳は則ち僧尼士庶の傳、其の志は寺宇佛像の事を志し、其の表は國家君臣資治の蹟を擧げしもの也。昔は十科を以て傳を立てしも、今は之を廢して之を十度に配し、別に新體裁を作爲したる也。本書は實に傳(十)贊(二)論(二)表(一)志(十)の五格より成るものにして、其の序説は史記の序に擬へて作りたる者にして、本書の組織を論じて見識を示す。讀まざるべからざる者也。附載の智通論は序説の補論として濟北集より抄録せし者にして亦見るべし。

虎關本書の組織に就いて云ふ、十傳は其人を載する所以にして、十志は其事を記する所以也。雙十は滿數也。一表中に居るは傳紀を通串する所以也。即ち渾而判々而渾滿而半半而滿是我圓極微旨矣と。蓋し虎關は前代に出でし梁唐宗の三僧傳の體裁を不精なりとなし、新に史漢によりて表志を立て、上推古帝時代より下元亨に至るまで七百餘年間、寺宇佛像音藝等の志國家君臣資治の表を設けたる也。但し虎關の前廣太史、洪覺範等の既に彼の三傳を議するものなきにあらずりしも、未だ虎關の如く大膽なる方法に出づるものはなかりし也。中巖曾て書を贈りて之を評して曰く、

居閑細讀元亨釋書、多有所獲、心目朗然、忻慰無量、素以本朝諸名僧行實、及其所由者未嘗見聞、故注意於此、先取其傳并年表、披閱之、然至讀贊論志等文、所得更多、出於素望之外、幸甚、實是國朝之至寶也、豈翅可爲吾釋家席上珍而已、孔子十翼、擅美於周易、今之度總論、不可多讓也、班固九流垂光於藝文、今之諸宗志、當有所加也、其諸贊詞、則玉轉珠回、議論精密、實非洪覺範琇石室之能可詣也、至于以十波羅密、支而配之十傳、則道宣贊寧之輩、於史才者末也之論達矣、惜乎吾國無好事者、而如斯文不見廣流布也（虎關紀年錄、東海一漚集）

即ち中岩は釋書の組織に就いて之に贊し之を稱揚せり。後世林羅山も亦略ぼ同一の見を以て釋書の構造を解剖し、儒書に配比して左の如く云へり。

元亨釋書者東福寺海藏院師鍊虎關禪師之所撰也、其書三十卷、其立傳也則于史記、其著贊論也、則于班馬、其分類而首傳智次慧解淨禪等之類、則于序卦、其度總論者則于繫辭、其資治表則于春秋、其凡例者則于左公穀、其志者則于兩漢書、寔本朝僧史權輿乎、（羅山文集卷二十五）

本書構成の齊備せること殆んど難ずべきなき如し。本朝僧史の權輿と稱すべきのみならず、實に史學上の一大貢獻なりと云はざるべからざる也。此の體裁に就いて虎關の苦心は一年一月の事にあらず、從つて其の自信も甚だ堅確なり。彼中岩に答ふる書中に先づ修史の難を説きて、

忽領寶藏喜畏相并、所謂喜者、喜文辭之精粹、畏者、畏稱譽之過當耳、請言其所畏焉、予看大藏有三僧傳、其體製不全備、可不惜哉、夫僧傳者佛史也、大凡史者有法、三傳不備者、無法之謂矣、靈源刪而不畢、山谷議而不作、非予始言也、蓋古德動道而不動學、三傳不備者、不動學者與、唐宋之間道學兼備者間有之、不造佛史之全書何哉、就中而言明教嵩公其人也、然雖記吾宗、不作通史不能無遺憾焉、

彼の平生崇拜せる仲靈潛子も修史の點に於ては殆ど眼中に無き也。又曰く、

宗之未釋門正統佛祖統記出焉、其文局冗不足取矣、蓋史書之成一手者鮮矣、或出一手也、不足稱者多矣、史記者太史氏司馬公父子之所編也、而其十篇有目無卷、所謂景武紀將相年表禮樂律書三王世家崩成侯著龜策傳也、褚少孫段肅之輩補綴尤卑陋、漢書又是班氏父子所撰也、而八表天文志其妹曹娥補也、後漢書范曄之所集也、而曄令謝儼撰志、其文不傳、今之八志舍諸也、謂張衡蔡邕應譙董巴司馬彪也、又劉珍季充作儒林外戚傳、黃景作南單于西羌傳、其餘諸傳多雜造、唐書歐陽修宗祁分撰帝紀列傳此四史々家傑作也、皆非一手矣、餘史所謂不足稱者也、予思本朝無僧傳、不揆荒斐、表奏前朝、已過逾二十歲矣、其後亂離十數歲、不知公自何處得此書、古來難者爲之猶或畏之還逢過稱寧可不畏乎然有一不畏於斯焉、予釋書十傳一表十志合三十卷體製專蹈古史、其間他人

不措一辭、是畏而不畏者也、不知公謂如何不宣

實に修史の難なるや虎關の言の如く、又大史籍の唯一人の手によりて成れるもの之あるを見ず。然るに虎關は實に獨手之を成就したるより見ば、彼が精力氣魄眞に驚くべきものなくんばあらず。況んや「其間他人不措一辭」との自信力あるに於てをや。

今釋書を取りて反覆熟讀するに、實に羅山の解剖せし如く虎關は全く春秋によりて表を製し、史記漢書によりて其の傳志論贊を作り、傳の分類の次第は易の序卦に依り、而して傳の終に於て別に度摠論なるものを設けて易の繫辭に擬したること疑ふべからず。其の表は固より佛教に關する事のみなるを以て、未だ十分に褒貶の筆を下し難き所ありと雖も、亦意を致したる所なしとせず。其の十傳は未だ史遷の如く縦横の筆を振ひたるにあらざるも、論贊之を輔けて頗る見るに足るべきものあり。十志中初五志は佛教教理の發展宗派の源由を尋ね、亦決して班固に譲らざるの觀あり。序説は志中に編入せらるゝも、本書の總序として必ず一閱せざるべからざるものとす。而して傳は又た志中に感進神仙拾異等の篇を設け、神怪の事蹟を列記したるに就いては、附録知通論に於て十分に之を辨解し、一儒者の難に答ふるものとして、抑も孔子の怪力亂神を語らずと言ひしものは、絶えて之を言はざるの意にあらずして唯だ言を慎まんの意也。易の如きは不測の神を説き、春秋は亂を記し、季桓子の事、土石

水土の怪、凡そ孔子が此の四事に涉れるもの渺しとせず。然るを後儒仲尼の意を明かにせず、言を四事に於て絶たんとする如きは惑之甚しき者にして、徒に迹に迷へるを可笑の事に囑す。四事は昧者の溺るゝ所たるも、而も亦無かるべからざること也。君子能く之を辨ずとし、歐陽修の唐書多く之を削れるは偏識良史の事にあらず。若し善ならば之を褒して後を策し、惡ならば之を貶して後を警めて可也。徒らに吾が喜怒に任じて一切之を刪るは何ぞや。劉煦の文は淺なりと雖も、其の史識尙ほ修に優れりと。是れ實に名教主義なる支那史家の習弊を道破せしもの也。

度摠論は確かに本書中出色の大文字也。文體造句全く繫辭に依れりと雖も、一讀再讀、其の模倣の巧と運用の妙に驚歎せずんばあらず。苟も學者たるもの必ず一見せざるべからざるものとす。故に其の長を厭はず茲に掲ぐ。

度摠論

萬法森列、智在其中矣、因而分之、度在其中矣、慧禪相推、變在其中矣、繫傳焉、而位在其中矣、夫度者何爲者也、開道成務、冒萬生之化、如斯而已、昔者聖人之立度也、彌綸聖凡而生教、六分四析而倚數、觀變於智。立修、是故度之爲道也廣大悉備、有佛道焉、有法道焉、有僧道焉、兼三寶而十之、十者非佗也、三寶之道也、道有解脫故曰度、度有種種故十之、十而度者所以廣包

也、故心無體而覺無方、一性一相之謂道、繼之者智也、成之者善也、空者見之謂之空、有者見之謂之有、羣生日用而不知、故佛之道鮮矣、是故將以順性相之理、是以立佛之道、曰智願方、立法之道曰力慧、立僧之道曰禪進忍戒檀。夫度其至矣乎、夫度聖人所以明道而廣業也、是故學者所居而安者度之序也、所樂而玩者度之理也、所履而行者度之事也、古者能仁氏之王法界也、上利四聖、下濟六凡、內取性、外取相、範圍萬法、覆庇兆類、以修以證、蓋取諸智、能仁氏沒、四依氏作、述經爲論、釋論爲疏、疏論之訓、以教天下、蓋取諸慧、上古四八而修、安般而觀、後世聖人、易之以直指、蓋取諸淨禪、動天震地、使神役鬼、以利天下、蓋取諸進感、剝皮寫經、斬骨刻像、燒身捨命、以濟天下、蓋取諸忍、四六爲重、六八爲輕、五篇七聚、能辨開遮、蓋取諸戒、上古塚宿樹居、後世聖人、易之以寺廬、蓋取諸檀輿、出處無常、任道而行、不拘形服、治衲以纓、蓋取諸方應、跨險蹈遠、不撓素履、殊方異域、以隣以里、蓋取諸力游、王公而行、幽明而化、被子萬物、各得其所、蓋取諸願難、夫道有大覺、是生二法、二法生十度、十度生萬行、萬行定理事、理事備而復大道、是故證悟莫大乎法、修學莫大乎度、利濟莫大乎行、事理功成、復乎大道、莫大於聖人、聖人有以見天下之顯、而象其物宜、是故謂之智、夫智者聖人之所以極深而研幾也、唯深也故通天下之志、唯幾也、故成天下之務、聖人之道、見乎智、聖人之智、見乎傳、智其道之縝乎、

傳智成而道來矣、傳智廢則無以見道、道不可見、則智幾乎息、傳智之興也、其於中古乎、昔者羅曇氏沒結集作、三藏之典有大小二部之衆、分內外、空有性相、曇衍五天矣、結集後一千歲、震旦地明王起焉、感夢寐之瑞、馳聘求之使、摩騰竺蘭之階聖位也、喜聲教東漸之機至矣、躡葱嶺之阻峻、涉沙河之艱險、馱經像於白馬、論教法於蒼生、是傳知之所以興也、後二百年、士行跋大方之足、法顯縱聖蹤之目、玄奘道北狄而入、義淨泛南溟而達、結集之陳迹、譯布乎支那、四海百世、歌詠風規者也、我之國極東海隅、梵壤不接、是以譯事缺矣、雖缺譯事、而智之傳者無異、距漢明而殆半千、吾國又明王起焉、海藩之帥貢獻也、是真教之始被也、吾道者夫於明乎、奚兩士二名之相比也、達磨無畏之遊斯地也、豈傳智之幾乎、灌真踵騰蘭之跡、昭訓趁行顯之躅、亦是此方之所以從事於此也、爾來諸子、恐後驅逐、沼視溟渤、床居舟舶、觀明師而稟勝法矣、勤劬至而利濟博矣、非淨之行、焯々可見矣、其德大而其功遠者乎、夫度之爲道、原始要終以爲質也、上下無常、變動周流、不爲典要、唯變所適、十度相交盤紆綺互、而知者觀其智章、則思過半矣、夫知解脫之道者、其知度之爲乎、度有聖人之道三焉、以思者尙其慧、以定者尙其禪、以禁者尙其戒、度有聖人之道六焉、以行者尙其進、以達者尙其忍、以順者尙其檀、餘三如上、十度之興也其於衍乎、立度者其有著乎、是故智道之決也、慧道之辨也、禪道之正也、進道之昇也、忍道之任也、戒

道之制也、檀道之利也、方道之巧也、力道之強也、願道之敢也、是以智慧采禪專一也、進行而
不止、忍不悔、戒固、檀功而不居、方入諸趣、力有所遂、願混而不失、一與二體同而名異、而位有
差、八與九十、位差而德不差、然有次序者、理之順矣、有佛然後教生焉、其教明白也、故受之以
智、智者知也、物之有知也、必有分別、故受之以慧、物之別也必忙、不可以不靜、故受之以禪、
靜至即止、故受之以進、物進遇險、則屈、故受之以忍、忍久而心荒、故受之以戒、戒約而少恩、
故受之以檀、檀欲巧便、故受之以方、方多而緩、故受之以力、力強入物者治、故受之以願而終焉、
繫辭下傳の冒頭を取りて擬して之に冠し包含するに、繫辭全體の文脈を以てせしこと明也。

夫れ程朱の佛典に藉りし所ありしは人の能く認むる所、此篇の如きは佛者却つて儒教を取るが如き
の觀あり。故に林羅山は又曰く、

師鍊之於我書、猶盜之於主人也、剽掠僭竊爲工耳

と。然れども茲に虎關の儒經に取りし所は單に其の形式のみ。内容に關するものにあらず。固より程
朱が佛教の本體的方面に於て得たる所に比すべきものにあらず。但其の解説の方法の一層巧妙に進
み、其の組織に於て一新機軸を出すに至れるもの、實に儒經に負ふ所なしと云ふべからざる也。虎關
は確かに佛教哲學の上に一進歩を與へし者也。此の事其の學風を論ずる所に於て併せて見ることを得

ん。獨り歴史上の事として看過せずんば可也。

而して茲に釋書の特徴として否恐らくは虎關修史の大精神主腦として最も注意せざるべからざる者
あり。是れ其の古科を廢し十度を以て之に配し、即ち本邦人を以て皆大乘の大機に在るものと見做
し、日本を以て大乘の域となし、印度支那皆此に及ばず、支那は大乘にして小疵あるの國にして、獨
り日本は醇乎として醇なる至治の境にして、實に宇内に卓越したる國體を有せるものなりと論及した
ることは也。此の意實に其の序説及び王臣論に於て説述せられ、特に王臣論の如き最も其の編纂に意
を用ゐたるの迹を認む。此の事たるや虎關没してより五百數十歳、未だ一人の之を發揮したる者ある
を見ず。愚蒙の僧侶釋書を讀んで徒らに一事一蹟の查察に醒醒せるのみ。世の學者亦た之を見るに、
單に一部の僧史を以てして深く心を此の如きの邊に留むる者あるを聞かず。予釋書を反復細讀し忽ち
心に得るが如き者あり。窃かに以謂へらく虎關の微意茲にあるか、其の春秋を口にし讀書有以也と言
ひしもの茲に在るか。

第三節 學 風

第一 國 體 論

試みに先づ釋書の序説を取りて讀むに、其の立傳の法古十科に依らずして十度に依りたるの理由

として、彼説をなして曰く、

夫此方視於竺支狹矣、蓋印度濶於震旦、震旦濶於日域、而印度小乘多、大乘寡、加以婆羅門九十五種、大乘之於印度也、牛毛之雙角也。震旦大乘多小乘寡、加以儒墨老莊、乘時陵我者不少焉、大乘於支那也鼎鼐之一足也、我日域純大無小、其俱舍成實者備學而已、不立宗焉、有儒而無老莊、老莊之書又備於學而已、不立家焉、只儒有數家焉、而不與我競、蓋雖魔々民、皆護佛法之謂乎、以印度地濶而大乘寡、支那地狹而大乘多、而見之我國小而純全大機者、非理之迂矣、蓋我道之機法者、不因地之廣狹乎盛哉、吾國東方醇淑大乘之疆乎、命此士者、不淨不爭我無異道也、學我法者、不赴小徑、無二乘也、是故此書以波羅密建十科

是によりて觀ば、虎關は印度を以て波羅門等のために大乘甚だ行はれず。支那は儒老莊等の爲めに亦之れ甚だ流布するに至らず。唯日本に至りては儒老莊ありと雖も能く佛教と調和し、佛教には其の大乘能く行はるゝことを得ること、印度支那の上に出でたるを以て、此士を目して醇淑清淨の境域となすも不可なし。故に波羅密に依りて十科を立て、國民皆生れながらにして大乘の域に在るものとせるに似たり。更に支那と比較して、

支那者大醇而有小疵、日本者醇乎醇者也

と斷じ去れり。此説や初め勿々に之を一瞥すれば、只佛教特に大乘教の日本に多く行はるゝを稱揚したるに過ぎざるが如きも、其實決して斯かる表面的のことに止まるものにあらず。裏面の意義は確かに別に存せる也。乃ち其の日本を醇淑之境とせるものは、徒らに大乘の行はるゝを以て之を稱するにあらずして、大乘の行はれたる日本の地其物、日本人其物を指して言へることは是也。日本を以て全く大乘の域に在るが故に醇淑の國也とせる如きは、其の佛教的眼光より見たるものにして偏僻に陥りたるの嫌なき能はず。然れども虎關の眞意は決して然るものにあらず。國土醇淑なるが故に大乘亦行はるゝとなせる也。其の證には彼は猶ほ古佛經中にある語を摘出し來り、東北の地を以て一大靈境となせること、恰も易に於て東北を艮卦となして之を尙べるに似たり。且つ土地の神靈を加へんがために類に連磨渡來の事を主張し、其の完美せる史的才識に向つて人をして疑惑を挾ましむるに至るをも願慮せざりし也。唯だ虎關の言甚だ明亮ならず。故に人多く其の意を得ざるのみ。故に中岩の虎關に與ふる書中大に釋書を稱賛しながら、此の點に至りては疑念を挾んで曰く、

如謂震且爲大乘之域也大醇而小疵也、日本醇乎醇者、則如某器識浮淺、不可得而承當者也、且待尊體平復面稟以悉之

と。然るに此時、虎關病重く遂に其の歳卒し、中岩は其の疑團遂に晴るゝこと能はざりし也。中岩の

自曆譜に曰く「虎關濟北の門を閉ぢて釋書を修するや、獨り予と不聞と參敲を許せしのみ」と。又た自曆譜貞和元年の條に

訪虎關於海藏借元享釋書泛覽

とあり。中岩の學術文章は當時に傑出すと雖も單に支那學者のみ。國史國體を精察せざること、當時の禪徒と擇ぶ所無し。虎關に面し釋書を讀んで何の得る所ありしぞ。果せる哉彼は曾て日本紀を撰述して我皇祖を以て吳太伯の後となしたる者たり。何ぞ虎關と相戻らざるを得んや。何を以てか云ふ、請ふ試みに細心之を辨ぜん。

釋書の願雜なるものは十傳の結尾とせる者也、願雜とは何の意ぞ。虎關之を其の度摠論に繫辭して曰ふ、

王公而行、幽明而化、被千萬物各得其所蓋取諸願雜

又曰く、

願道之敢也

又曰く、

願混而不失

又曰く、

力强入物者治故受之以願而終焉

之を易の序卦に考ふるに、序卦の結尾は未濟なり。度摠論の結尾は願なり。乃ち知る虎關の意は未濟に反して遂也行也、又成就なることを。故に傳智は始にして願雜は終也。易の無始無終無首無尾なるとは異にして目的あるもの也。然れば則ち願雜の一傳は以て釋書編成の目的主眼なりと見るも可也。願雜の目六、古德王臣士庶尼女神仙靈恠是也。而して度摠論は則ち其の尾に付せられたる者にして、且つ王臣及び神仙兩篇には特に大論文を付す。實に他の傳表志中に見ざるの例也。而して此の兩論や空理を説くにあらずして着々事實に依りて述べ、人をして面のあたり虎關の談に接するの思あらしむ。而して王臣篇には特に首尾相睨んで論を着く。予が今特に標出せんとする者亦實に此の篇にある也。紛々たる餘篇は鷄肋のみ。(注、後世、谷桑山に此の王臣篇の批評あり)

王臣篇載する所、上は聖武帝より馬子鎌足等凡そ國事に忠にして而して佛事に怠らざりしもの數人を出し、終に北條時頼を擧ぐ。篇首に序あり。

修多羅曰、富貴學道難、士大夫猶病諸、況王公乎、我國家聖君賢臣相次間出、皆能欽歆我法、予博見印度支那之諸籍、未有此方之醇淑也、何者神世一百七十九萬二千四百七十餘歲、人皇二千年、

一刹利種、系聯禪讓、未嘗移革、相胤亦然、閩浮界裏、豈有如是至治之域乎、以故佛乘繁茂、率土和洽、君臣崇奉、歲曆綿邈、亦我真宗之助化與、予取居世相而契實相者、作王臣篇、

是れ實に虎關の初て其の國體論を發揮せんとするの端緒なり。其の神世一百七十九萬幾歳としたるが如きは、只だ古來の傳説に由ると雖も、人皇二千年皇統連綿として嘗て革命の事なき至治の域としたるもの、是れ彼の所謂醇乎として醇なる所以なり。其の國俗國風遙かに他邦に絶す。故に佛乘亦其の中に繁茂し、佛教又た皇化を補助し來れりと爲すに過ぎざる也。要するに王室尊崇の義を明かにしたるを見る。王政武門に落ち北條氏廢立を擅にせるの際、特に人聽を動かすに足る者也。彼れ乃ち時頼を賛して曰く、

贊曰、宗門入此土七十餘歳、王畿未徧、早播東裔、建長之間、平師握關外之威權、濫關外之體裁、故能與名師酬酢、暫脫造詣、昔者齊桓晉文、藩王室而不全、李昇錢俶、奉祖道而不契、兼二美而全者、其唯平帥與、

齊桓晉文王室の藩屏として未だ全からずとする所、時頼の勤肅を賛するの言外に北條氏に向つては苦言を陳ずる所なしとせんや。彼の北條氏を見るや一兵馬の家を以て之を見るのみ。敢て別に何の尊重する所も之れあるなき也。

副元帥平時頼者、家世將種、初右將軍源頼朝文治之間、領天下兵馬之權、時頼之祖爲其元佐、而屬姻婭、爾來世主兵權、皇考王父、皆居副帥之任、累代奉佛、至時頼益勤、云々

褒貶の筆彼は苟も下さざる也。然れども言簡に過ぎて微意或は人の知らざるを畏る。於是乎彼は更に或人の間に端を藉ると稱し、平生の主張を述ぶるの機會來れりとして十分に其の眞意を發洩せり。彼開口先づ自家の抱負自信を示して曰く、

或言子謂此土爲大乘之國、且從之、而又言閩浮界至治域、恐亦有黨乎、余曰建哉子之間乎、是余之公言之秋也、君子之言豈苟哉、若涉阿黨爲經世乎、若又不經不如默矣

蓋し其の公言の秋也とせるものは、其の平生の微旨を發するの時にあらずや。予窃に以謂へらく、此の論一篇恐くは序説成りて後筆を茲に加へ來りて其の意見を記したるに非ざる歟と。故に其の公言と云ふものは則ち序説に盡さるる所を補助發揮せるに似たり。然らずんば序説の文脈此の篇と參照して前後相貫かざる所あり。とまれかくまれ本論は虎關の其の主旨を發言せるに外ならず。彼曾て曰く「吾れ讀書以ある也」と。其の敢て洩らさざりし微意其れ此に出でたる乎。其の君子之言苟然哉と云へるもの、平生の信ずる所深きにあらずして何んぞ此言あるを得ん。又其の不經不如默矣とせる如き、彼の言論著作の意那邊にあるやを知るに苦しまざる也。彼此に於てか遠く國史に遡りて我國體

の醇美を説き來る。

夫物之自然也、天下皆貴之、其造作也、世未重之矣、吾讀國史、邦家之基根於自然也、支那之諸國未嘗有矣、所以是吾稱吾國也、其所謂自然者三神器也、三器者神鏡也、神劍也、神璽也、此三皆出自然天成也、初神天照太神在天宮也、召其孫瓊杵尊曰、葦原中國者、吾孫胤統御之地也、寶祚之隆、當與天壤無窮、即以八咫鏡八坂瓊曲玉草薙劍授之、乃天兒屋根命等五神爲陪從、告曰、杏爾從三器五神降下土、照臨斯民云々、以是言之、我國雖東方海極域、其統御之靈也、與天地之開闢同兆乎、不然三般神器何出於鑄刻之先、而降於天乎、是我國運之自然者也、

三種の神器を本據として我國開闢の神靈自然にして特質あるを説きたる所、神皇正統記の著者と其見を同じうす。釋書既に元亨二年に後醍醐の坐右に奉らる。近臣親房寧ろ此に見る所なしとせんや世に記録なし。消息窺ひ難し。吾人は唯々帝の釋書を覽て深く嘉納せられしを聴くのみ。(注、北畠親房、虎五歳、其正統記延元四年に作られ興國四年に修成す。元亨釋書の成りしより十七年の後に在り、或は曰く親房支惠に師事し、支惠は虎關と兄弟たりと。)

彼支那者、葱嶺之東數十之邦、咸取法度、推稱中國、又言文物國、然五帝之世、猶無傳國之信器、況三皇乎、又況邃古乎、至夏禹、始鑄九鼎、立爲國器、殷周相傳、遷移寶之、及秦奪周、鼎沒泗水、故始皇刻卞璧以爲國璽、漢亦以高祖、斬白蛇劍爲傳國寶、爾來劍璽爲二國器、魏晉以來

至趙宋、承傳之耳、故唐李白詩曰、一朝讓寶位、劍璽傳無窮、彼支那號大邦者、雖土地曠遠、而受命之符皆人工也、非天造也、我國雖小、開基之神也、傳器之靈也、不可同日而語矣

支那自から高く號して中國とし文物の國と稱するも、三皇五帝既に傳國の信器我が三種神器の靈徳に比すべきものなし。徒に人工の命符を用ふるのみ。我が天造なると同日にして比すべからずとす。

又劍璽之事、兩朝不相待而偶合者何、寧天子之運、彼此相同乎、然支那雖傳劍璽、更十數姓者、豈其寶器之所以爲人工乎、我國一種系連綿邈無窮者、天造自然之器之所致乎、因是而言、雖千萬世後、不有擾奪之虞矣、豈其天造神器者、佗氏異胄之所玩弄乎

三種神器の靈徳によりて皇孫無窮に連る。彼の人工の器に依りて革命頻々たる國風とは異なる也。我天造の神器は決して佗氏異胄苟も帝系にあらざるもの、玩弄するを許さざるものとす。當時武臣跳梁、動もすれば大義を誤らんとする者のために規箴とするに足る。

又支那之三皇五帝三代者、我鷓草一神之季世也、視天日神、曩古遼邈、不可爲比也、昌哉我國、皇裔五十餘世、年曆二百萬載、一種遞代、四夷無擾、其間或有戎羯之覬闚、皆悉靡爛於西部、無乃近帝畿乎、夫有國以來、不嬰蠻夷之攘奪者、未有如吾國之純全矣

年代の對比は固より正確ならずと雖も、開闢以來外夷の覬闚攘奪を許さざるもの我國の純全なる如

きはなしとす。其の戎羯とせるは蒙古の如きを指せるや知るべし。是より更に一步を進めて印度の國風も篡亂相繼ぎ見るに足るなきを説く。

余閱大藏奈女耆域經、曰摩竭陀國、頻婆婆羅王、承制遠夷、而遣耆域、故有八千里疾象之事、如來在世尙如斯、況滅後乎、犍三藏在印度、有成日王者、而非利利種、只是雄武信賢之主也、其餘僭奪、率見西方諸籍、天竺者、閻浮之本邦也、猶有此等篡亂、況諸夷乎、

是より又支那の事に反りて唐虞の世も亦取るべからざるあるの所以を述ぶ。即ち詩書を取つて、見虞夏之書殷周之詩、有兪玃獯粥之厄、

と議して憚る所なく、眼識の嚴利なる古來尋常儒者の外に在り。濟北集通衡、又唐虞を論じて其の衰世啓に始むとして辨ぜり。併せ見るべき也。彼又如斯の風、漢より以降は尤も甚だしとして、凡そ歷代の事變帝王に關する者を擧げ、讀み去つて轉た時勢に割切なるを覺ゆ。

春秋之時趙簡子起長城備胡、七國之世、燕秦亦築長城、至始皇、益遠、漢高帝之威武也、尙受平城之艱、故婁敬建和議、歲輸美女金帛、猶諸侯稅天子、賈誼疏曰匈奴侵掠、歲致金綵、張璠書曰、高祖窘平城之圍、太宗屈供奉之恥、魏晉之間、羌狄跋扈、不堪言也、揚隋一統南北、然北虜轉輸過於漢魏矣、李唐武德九年、頡利自將十萬騎、進至渭水、房玄齡等六騎隔水語、斬白馬與盟

便橋上、故太宗踐祚李靖取定襄、太宗曰足深我謂水之耻矣、代宗朝吐蕃陷京師、唐書突厥傳曰、漢至昭宣、猶襲奉春之過、傾府藏給西北、歲二億七十萬、皇室淑女嬪於穹廬、掖庭良人、降於沙漠、夫貢子女方物、臣妾之職也、中國異蠻夷者、有父子男女之別也、婉治之容、毀節異類、垢辱甚矣、漢之君臣莫之耻矣、魏晉羌狄、居塞垣資奉踰昔、百人之會、千口之長、賜金印紫綬、食王侯之俸、牧馬之童、乘羊之隸、齋毳毼、邀利者、相錯於路、乘耨之利綵泉所生、散於數萬里之外、胡夷歲驕、華夏日蹙、病則受養、疆則內攻、中國爲羌胡服役、且千載、可不悲哉、迄五代、石晉出帝、爲耶律德光所禽、后妃親戚、多被係累、趙宋時益邁前代、靖康之役、二帝附虜、讀其史者、含淚而不終卷、南渡之後、割地服事、漸至德祐、覆滅無遺、我見竺支之事、如我國之渾厚者未有之矣、是區域之靈勝、祖宗之聖武、而亦吾佛乘之資輔也、我至治之域者、其不然乎

虎關の所謂區域の靈勝祖宗の聖武にして佛乘の資輔あるもの、是れ本邦の淳淑渾厚の國風萬國に卓越し、皇統萬古渝らずとする所以也。故に革命の如きは本邦に未だ之なきことにして、又決してあるべからざるのこととなせり。今彼が主張を確實にせんがために、別に彼が斷じて革命の非なるを唱へし事實に就きて見る所あらんとす。

建武二年彼の三聖に在るや、南禪の夢窓來り告げて曰く、皇帝比者踈石に宣へて曰へらく、朕天下

の僧服を黄にせんとす。可なる乎と。疎石敎意を奉ずと雖も未だ斷せず。以て何如すべきと。虎關乃ち服色の敢て僧家に尙ぶべきものにあらず、必ずしも當時支那の風潮に従つて緇を變じて黄となすの要なきを辯じ、更に歩武を進めて深く論じて曰く、

我國百王同姓、四海一律、以此吾服色之居常、雖有此國風抑亦隨方毗尼之謂乎、然則以黃代緇者、一朝革命之元主之意也云々

と。蓋し服色の事たる何れを探るも可なりと雖も、之を支那の故實に見ば實に革命によりて之を變更する者也。且つ僧服のみを變ずと雖も、敢て邦家全體のことに關係すべきものにあらざるべきの道理なりと雖も、當時禪敎の盛なる際においては決して一小事として之を見るべからず。延いて國民全體の意向に連關し到るものなきを計らざりし也。若し又虎關の辯論を以て曲解に過ぎずとすとも、彼が革命の兆候だも惹起するの非なるを看破し且つ抗論せしものたるや明かなりとす。夢窓亦當時朝廷の事態に就いては三たび意を致せし者、於是乎虎關の議を可とし、以て天子に奉答し變服の事遂に止みぬ。次いで同年五月或は東福を平氏の墳寺に過ぎずとし、五山より斥けんとする議あり。虎關又起ち内謁して當寺は元と藤氏の建立にして王家に關するの緣故深きを説き、王法佛法は我國に於て一也と論じ、王は即ち、

百王一種未有改換、此國之所多昇平也

とし、佛敎は王治を補佐して共に万世に傳はり、支那の如き革命の俗と異なるを以て、濫りに先例を廢するの非なるを痛辯し、其議を除かしむるに至れり。是亦佛法を王法に比して牽強せしの嫌なきにあらずと雖も、彼が結論の常に帝統の上に歸し來る所、注意して見ざるべからざる也。

如上の二事實は虎關紀年録中に明記する者にして、釋書中に於ける彼の意見を裏面より實證する所として妨げなき也。猶釋書中に教見せる彼が議論を拾集せば、彼が意志を明にするに足るもの少しとせざるべし。例へば其の神仙傳の首に伊勢神宮を置き、其父神と稱する白山神を次位として、太廟に對する朝禮に従ふとせる如き、一見識の貫けるあるを見るべし。彼曰く、

或言妙現菩薩已言、天照太神者我子也、子今後白山何、予曰伊勢神宮朝廷立爲宗廟、白山雖伊弉諾尊顯應在後我又且從朝禮也、然以下不視神次、唯因吾法之先後爲排差耳、(白山神贊)

想ふに虎關の如きは北條氏の横暴武臣の跳梁の際にありて、最も早く我國史國體の上に留心して皇室を尊尙し、王道主義を確守し主張したるの一人なりと云ふも決して不可なき也。後醍醐帝英邁の資を以て武門の習弊を破らんとして志成らず、神器を抱いて南山に崩せらるゝに至るまで百折不撓なりし者親房の如き與りて力多からずとせざるも、夙に帝が志向を定めらるゝ上に影響を及ぼせしもの何ぞ

其他に之れ無しとせんや。而して夢窓が進退出處苟もせず、其盡瘁の績甚だ世に稱せらるゝものあるも、獨り虎關が事に至りては全く暗昧に付せらるゝのみ。惜むべき也。予乃ち窃に虎關の微志を推し、大要を記して世上君子の批評を待つ。

彼れ曾て曰く、

夫具正眼而著書傳世者、肉身之分身說法也、凡人橫說堅說、而一時所聽、不過數百人耳、豈如著述之施萬氏流千代乎（清言）

と。蓋し其の著述を以て他を傳へ又自から傳ふとせるを見るべし。

彼又自贊して曰く、

曲祿之牀、班駁之服、儉禪者名、欠禪者實、這般孟浪無方也、有惡稱可視、若非語心論師、卽是僧史大修撰（齊北集卷一）

自嘲の語直に取つて之を評すべからざるも、其の釋書のために最も力を用ひしや疑ふべからず。而して、其の釋書を編するの志なりとして彼曰く、

夫古之著述或罹窮愁、或求見世、雖仲尼猶然、矧其餘哉、余塵纏早脫、世繳不及、輒晦我常、豈冀閑名、只欲明佛祖之法、揭聖賢之迹、令可畏之人知所式之慶也耳、此予之志也（釋書序說）

彼が閑名を冀ふものに非ずとせる所大いに其の抱持する所を見るべき也。然れども其の釋書は彼の言の如く單に佛教に關するに限らず、其の他に於て亦頗る取るべきものありといふべき也。

而して本書編著に就いては、後世之を稱せしむの贊辭多く、難ぜしもの甚だ稀れ也。師鬻高僧傳を著すに當りてや、多少事實を補正せし所ありしも虎關に負ふ所頗る多し。但近代安永の頃に至り、尾州人事山博學の僧空華も隨筆に於て酷く虎關を難じ史識なきものとして之を貶し去れり。固より刻索人の美を創つくるの嫌を免れずと雖も亦見る所なしとせず。今左に付載す、亦公論の資とすべき也。

附

虎關が其の王道佛法并行論によりて革命を非議したる事實は甚だ注意すべきものあるを以て、紀年録より左の二條を拔載すと云ふ。

建武二年四月南禪夢窓和尚來告曰 皇帝比者宣疎石曰、朕欲黃天下僧服可矣乎、疎石雖奉 敕意未斷以謂何、師曰焉用黃、無以則青黑乎、是佛衣屈胸之遺製耳、近世庸繙之自元國還者、咸稱大元釋服、以梘易甚、其言必曰、彼國主上黃、黃中也、是命之也蓋尊僧也、且價廉而易辨、 皇朝若製是則豈不尊且廉也哉、聽者不察也、唱和一辭、甚矣、人之好異也、不揣其利、不推其害、惟異之欲視、伏惟 宸斷無私、人欲是從故欲使我服尊且廉也、 聖慈至厚恩紀難謝、雖然僂指以數、

是尊是廉之聲、未既此害端弊、未恐有餘耳、何也、廉而易治、故浮浪游乎之民以衣我衣、以壞我法者難以圖也、惟其尊之廉之者適所以使我賤且害者歟、況我國百王同姓、四海一律、以此吾服色之居常、雖有此國風、抑亦隨方毗尼之謂乎、然則以黃代緇者、一朝革命之元主之意也、安至使亂我常服、而追彼不常之制、以乍黃乍赤乎哉、若夫緇衣者帶五部之一種來者、而我國古德不改也久矣、此豈古所謂利不十者不易業功不百者、不變常者耶、黃其無乃不可乎、憲曰諾、吾將復奏、既而黃服果不行、

五月人或謨奏 朝、以斥東福五山、且居其末者、建言甲乙而主謂之墳寺、今之東福是也、墳寺其庸可列五山乎、假如爲五列宜附其尾耳、帝曰俞、雖 詔未行、業已決矣、住持雙峯、欲爭救、而相顧缺然、峯及南山俱勉師趨內、師以匪理當距、遂與雙峰輩數人、以二十八日入奏 帝御安福殿延見、師因進曰屬者伏承東福爲墳寺、宜下五刹、或第其季夫在奏之者、恐未之思乎、故我藤丞相親寺之日、奏爲國刹、非墳寺也、彼相之圓覺、實爲副元帥平氏之墳寺、而主盟託十方、以之驗此、慧嶠國刹而甲乙鹿阜墳寺而十方苟以其浸似者不能審訂乃元光外方區々之墳寺者、不亦誣乎、竊爲陛下惑之、大較釋刹之五大精舍、必將不出三科、三科也者、一檀位、二巨構、三久創、不知今之五山、三之中以爲何科乎、若言久創、建仁或署一、巨構則東福其中也、檀位則南福亦爲之最、

夫南福者 龜山上皇之 勅寺也、東福乃光明藤丞相之鈞刹也、君相々次自昔而爾、龍山已爲一、慧日豈得不爲之次歟、又東福草創之久、近率視建仁爲後、建仁若處首、東福當次之、然則五等未可降三四耶、抑東福甲乙之說、且以爲嘉規焉、是何邪、則竺乾者刹々一種禪讓系連、故其國治、支那者是不一姓、篡奪爭戰、故其國亂、 皇朝其如竺士乎、百王一種未有改換、此我國之所以樂昇平也、夫佛法 王法一也、故藤丞相以輔國之方、著管寺之令、而其門葉累々相承者、蓋象諸王道也、何管東福哉、天下顯密之諸院 朝野之列刹、由古抵今多皆類之、恭惟 陛下道貫三才、運膺一統 明鑑 叡斷、獨步古今、願幸因竺日之舊規、去奇表之新說、特 賜東福第二之 明詔、以大成其志也、帝曰吁法傳人而聯蟬、朕其嘗有聞、寺傳人而住持禪寧有古格乎、師復言金陵牛頭山法融禪師者四祖道信大師之嗣也、融禪師謂其徒智巖者曰、山門化導當付之於汝、巖稟命爲第二世、巖以是傳之慧方、方以是傳之法持、如是六傳而至於慧忠者、忠之後不得其傳焉無人也、非然何六世而止耶、繇茲視之、寺之傳人其來遠矣、是以我東福十有餘傳、猶未衰、借令不得人、雖欲其傳得乎哉 帝曰如是則五山上下之序、以夏其可乎、師復言善哉乎 陛下之言也、與我佛之言合、按梵網戒本云、先受戒者、在前坐、後受戒者在後坐、能如此乎、請降 詔無生人心、 帝曰事須平章、未晚也、諸師出、 帝獨召師曰 朕欲常々而見、必當源々而來也、 朝廷其後語塞、

第二 儒教に對する態度

虎關言あり曰く、余正和已前以書質心正和已後以心質書焉と。想ふに、彼は其の三十五六歳の頃より思想一變し識見確定せしが如し。之を其著述に徴するも其心力を傾注したる作物は大概正和已後に出で、特に老後に成りし者多し。是れ寧ろ彼が大家たるの資ある所以にあらざるなからん乎。彼は夙に聰敏、先づ儒教を學び特に菅家に就いて其の遺學を承け、更に本朝の歴史神書に目をさらしたる者也。故に佛敎を學ぶと雖も時僧の如く支那印度の教法に同化さるゝの虞なく、能く之を咀嚼して自立し、覇を斥け王を尊び、自から別に一家の言を成せり。而して其の學は儒佛の一貫論に歸すと雖も、其の態度や、宋儒をば寧ろ之を排したるの傾向あり。是れ宋儒が其學を佛敎に藉る所多きに拘らず、佛敎を排せしの反動に出でしものたるが如し。故に周濂溪の如きをば、之を稱して、

仲尼設而千有餘載縫掖之者幾許乎只周濂溪獨擅興繼之美矣（榮西贊）

と云へり。然れども彼は漢唐の儒を以て醇となし、直ちに鄒魯の淵源に遡りたるもの也。世人の五山に於ける、程朱學を論ずる、一概に其の崇拜繼承を以てす。蓋し深く之を究めざるの過也。因つて今略ぼ虎關の學風の如何なるものなるやを見んとす。

虎關が學問の進歩に一轉機を與へし者は實に一山の參問にありとす。彼の一山に謁するや、先づ端

を程揚の易說に起し其の疑問を提出して曰く、

某知薄識謫、每見程揚之易說、不能盡解、老師宏材博學、賴以愚所疑、合程揚之說、深考靜究、必有所解、其他日再來伏受咳唾萬幸（紀年錄）

一山辭して曰く、

一寧因去秋病餘心力疲勞亦不能深教文義、兼眼昏健忘、不得記憶、公宜組攻二公之意、老僧於此事不曾留心、難以憶說、又至於筮策、天地大衍之數、非師授、亦不得而知之、生平未曾學此、所不能知也

虎關更に太玄と周易の撰法を質すに異同ありや否を以てす。一山答へて曰く、此撰著之恐又稍同也と。彼又語を續いで曰く、

子雲草玄、古人咸謂準易而作、觀其所用似亦如是、以陰陽乾坤八卦分大位以定藏否、太玄以五行王相得位不位、以辨吉凶、至於爻辭變動、大槩依倣之、其用心用功非淺々也、但其言詞多艱澁、非精密用功考求、則不易得其旨也、

傳者云ふ、虎關揚子法言に熟通せりと。然れども此時太玄經は未だ本邦に傳はらず、彼は只諸書に散言するものを以て略ぼ之を窺知せしのみならん。於是乎一山に向つて太玄を觀んことを乞ふ。一山

廻ち之を筐底に出して見せしむ。其後虎關常に曰く、太玄は難讀の書也と。五山の徒甚だ揚子を尙ぶに至りしは實に虎關に始まる。然るに其の程朱の學は決して一山によりて初めて傳へられたるものにはあらざる也。又彼の一山に得たる所のみは人の想ふが如く大なるものにあらずし也。但其の一山の彼を鼓舞獎勵せし者は、獨り彼の釋書編集の一事に於けるのみに止まらざりしや知るべきのみ。

宋儒學說の根本既に佛教に依る所ありとすれば、虎關の強いて其の性理論に於て此と相争ふ所なりしも固より其處なるべしと雖も、宋儒の顧みて佛教を排するに至りては、彼默視し難き所ありしなるべし。故に彼は宋儒と常に反目の姿に立ち抗論せしこと少しとせず。蓋し彼は本邦に於て最も早く宋儒を難ぜしもの一人として誤らざるべし。彼朱氏を難じて謂へらく、

我責朱氏之賣儒名而譏吾焉、大惠年譜序云、朱氏赴舉入京、筐中只有大惠語錄一部又無他書、故知朱氏剽竊大惠機辨而助儒之勢勢耳云々、朱氏己宗妙喜、却毀傳燈、非醇儒矣（通衡五）

是れ所謂耳を塞ぎて鈴を盜むものを非れるなり。又曰く、

朱氏語錄中品藻百家、乖理者多矣、釋門尤甚矣

とて晦庵が釋氏只四十二章經、是他古書、其餘皆中國文士潤色成之、維摩經亦南北朝時作とせるに對し、文士潤色者事は而理非也、文士潤色漢文也、非竺理也、譯經者十師成之、十師中有譯語有度語、

漢人之謬妄不可納矣、是朱氏不委佛教、妄加誣毀、不充一笑

となせり。抑も佛典の支那語に翻譯さるゝにあたりて文字の選擇に於て多少意義の變ぜしものなきを得ざりしや疑を容れず。此の點に就いては朱氏虎關共に未だ精論に至らずと云ふべし。

虎關又朱氏が傳燈錄を陋としたるを難じて、其の所謂陋なるは文詞にありて理にあらず、朱氏辨ぜずして漫に品藻を加ふるは百世の笑端乎と云へり。

彼又程明道が佛氏之教、滯固者入於枯槁、䟽通者歸於恣肆と云へるを非して、夫程氏主道學排吾教、其言不足攻矣となし公識にあらずとせり。

又其の司馬溫公の韓秉國に答ふる書中に、如佛老之言則失中而遠道矣可言而不可行、借使有人真能獨居宴坐屏物棄事、以求虛无寂滅、心如死灰、形如槁木、及有物歛然來感之必未免出應之、則其喜怒哀樂、未必皆能中節也とあるを駁して、溫公不學佛、只以凡心議聖境可笑也とし、數種の定心智を擧げて、

今光之謂有宴坐心身云々應之者欲定邊事也、其喜怒哀樂未必中節也者六議心邊事也、其可言而不可行者散智邊事也

と判し、朱氏と共に之を排斥して曰く、

光未知欲定、況色定乎、未知六識況七八乎、未知散智況定智乎、我常惡不學佛法謾爲議、光之朴真猶如此、況餘波浮矯類乎、降至晦庵益張、故我合朱氏而排之云、

虎關が宋儒と反對の側に立ちしこと以上の記する所によりて明か也。然るに是れ只に宋儒と相反對せしのみにて、未だ儒教其のものを斥くるものにあらず。否却つて大に儒教に取る所あり。孔孟の教道をば其の最も推稱する所たりし也。彼曰く、

夫儒之五常與我教之五戒、名異而義齊、不得不合、雖附會何紊儒哉、請先取嵩公輔教編見一遍、

(通衡三)

と。蓋し彼は實に仲靈の風を聞いて立ちしものにして、而して仲靈は三教一貫論の首唱者たり。故に虎關の儒佛の關係を見るや吳越の觀あるものにあらず、亦五常と五戒とを同一視し、倫理的方面に於て相合する所あるを言へる也。然れども彼は遂に兩教を全く混合せんとするものにあらず、劃然として其の區域を明かにせり。曰く、

夫道以理爲主不以迹爲主、以佛教見、儒道者人天乘耳、猶不與二乘競、況佛乘哉、

と。即ち儒教を以て人天乘の教として世間的のものとなしたるなり。其の見仲靈と相異なる所無くして、後年義堂等の主張せし所と相同じ。又曰く、

儒釋同異只是六識之邊際也、至七八識、儒無分焉、何合會之有、故曰儒釋之同異者六識邊也、非七八識矣、

是れ儒教の全く差別觀のものにして、無差別平等觀を有するものにあらずとせるもの也。之を以て仲靈の説に比するに、稍や異なるものなくんばあらず。仲靈は兩教道本の契合を認め、本體的方面に向つて推究を試み亦た相合する所ありと雖も、たゞ其の主とする所一は差別界にあり一は無差別界にあるが爲め、其の形迹行道の相異を來すに過ぎずとなせしもの也。是實に仲靈が宋學の淵源を發せし所以たりとす。虎關の思索惜むらくば未だ茲に至らず。故に兩教を打して一となし根本的原理に遡りて之を推究するに至らず。纔に差別觀を以て了れりき。此點に於ては彼は未だ中岩にだも及ばざる所ありと云ふべし。然れども之れ寧ろ宋學派に對してかゝる傾向を來せしものにして、時勢を代ふれば虎關は亦仲靈たらざりしやを保すべからず。況んや虎關は宋儒を排すと雖も、其の性理の學に於ては敢て深く難ぜしを見ず、唯其の醇然たる鄒魯儒教の系統を引きしものにあらざるを看破せしものたるや疑ふべからざる也。故に彼の儒教を口にするや、常に孔子にあるのみ、亦謬らざる者と謂ふべき也。

虎關の學風既に此の如くなるを以て、儒教としては風儀正大なる荀子を尊べり。荀子の天論に、耳目鼻口形能各有接而不相能也、夫是之謂天官、心居中虛以治五官、夫是之謂天君とあるは偶々佛教六根の

説と符合せるにより、大いに荀子を稱揚し、後世偽學者の匹儔にあらずとせり。

荀子況者戰國之士也、我教不入支那之前三百年矣、然言六根者如是備也、唐宋諸儒剽竊吾教而立言者、皆不及況者遠、

事實は微細の事たりと雖も、是に由りて亦虎關が儒教に就きての見解をも併せ見るを得んか。

第三 道教に對する態度

虎關の道教を觀るや全く佛教と之を區分し、道教は佛に依りて發達せしものに過ぎずとし、道教の原本的なるは、唯老子にあるのみとし、而して老莊の道や寧ろ儒と表裏相成すものとなせり。

宋代に匿名して自から圭堂と稱する者あり。大明錄なるものを著して三教を評論せり。虎關一々其難處を指摘して之を其の通衡の中に置き、又其の數節をば釋書中圓爾の傳後に付せり。今其の特に道教に關する言を檢するに曰へるあり。

堂不究道書與我宗、取相並配、是惑也、予恨道書不來本朝、故不見全藏、若見道藏、一々點竄、以除邪配、然吾門書中、班々或見、故我得之也、古人云依苗辨地、因語知人、予亦言因彼微文知全書者、君子之鑑也、彼所謂玉聖清境在色界、無色界之上者、摸知度論、所謂無色界上、有十住菩薩之居也、堂不辨擬作、謾取爲實、誠可賤矣

即ち道教なるものは、知度論等の佛典によりて摸作せられたるものとなせるなり。而して道教の中取るべきは老子のみとなし、其の他の書契皆偽なりとして曰く、

夫道家書德經外皆僞作也、何者道德經中無佛語、實老子之玄也、

其證として曰へらく、

夫衰周之末言神仙者、莊周列禦寇爲最焉、其書未有佛教語、西漢代劉安好道法、而其鴻烈解猶無佛語、逮後漢末道陵以來始出數經、雜以佛語、因此而言、道士攘佛作者無疑耳、又其化胡經先代己行毀斥、只度人生神章等未滅破者道士中有才能盜佛經僞理寫逃故長存耳

と。是を以て之を觀ば、彼は西漢以後の道書は佛語混入せるを以て佛理を盜取して僞作したるものに過ぎるの證となさんとするもの也。特に知らず彼の曾て朱氏を難するや、佛教漢文によりて譯せらるると雖も語を藉るのみ。理を變ずるにあらざるなりと言へるを、蓋し彼の道書を難する所以のものは、亦朱氏の佛教を難する所以のものと異なるなきなり。然るを彼は既に朱氏の難を非として、却つて自から之を道教の上に加ふ。是れ解すべからざる所也。予を以て之を觀るに如此の議論は互に自家を張らんとする爲めにして黑白固より分ち難し。之を其の事實の上に於て證するの確實なるに如かざる也。今道教なるもの、發達を考ふるに、元來老莊を祖として神仙談を加へ、終に佛教を混じて以て一

種の性格を具ふるに至りしものに外ならず。されば虎關の言も全く取るべき所なきには非ずと雖も、歴史的考證不精密なるは朱氏と同じく惜むべしとなすのみ。然れども彼の老莊を見るや敢て道教を斥するが如きに似ず、謂へらく是れ儒教と甚だ相遠からず。表裏相成し其の形體を異にして實質同じとなせり。仲靈は曾て老子を以て古儒者の一人なりとせり。虎關亦此に見る所あるか其言左の如し。

夫道者理也、述者事也、儒之斥老莊者述也其道不多乖矣、有仲尼之質而言玄虛者老莊也有老莊之質而言名教者仲尼也

老莊の書を議する者、近代に至りては多くは莊子を以て原本となし、老子を以て僞作となし、列子の如きも亦信ずべからざるものとなす。然るに虎關は老子列子を以て原本となし、莊子は只に列子の潤色に過ぎずとなせり。

始予讀莊子愛其玄高奇廣以爲諸子之所不及也、後得列子、向之玄高奇廣皆列子之文也、只周加潤色、故令我愛其文耳矣

蓋し彼は莊子の稱せる列子を以て實在せし人と見做し、率て列子の書を以て其眞作なりとせる也。其の後代の贋作たるやを辨ずるに至らざりしのみ。

莊子己立列禦寇一篇不爲不見、列子多收其事周不廉矣、中世以文章陵遲沿襲剽竊出己者鮮矣、莊子

者中世剽竊之文乎

即ち却つて莊子を以て中古剽竊文の例證となせり。但し其の道老列と相劣るとなすものにはあらず彼曾て莊子の自然説を排して左の言あり。蓋し佛教の因果説に依りて立論せしものたるや明かにして、又以て彼が老莊の道德説に對する立脚地を窺ふべき也。

或曰莊生之道爲自然爾乎、曰不、道非自然、自然德也、莊生不知道、故以德而爲言也、夫物無自然、自然德也、德隨物而有、隨物而有者、豈自然乎、今其金沙合淘、沙在上、金在下者自然也、金重沙輕、金之重金之德也、因此而言、德也非自然也、若言自然者、砂又可在下、實不爾也、蓋沙無重德也、凡物皆有各德、以德故有自然用、非自然之自然也、我教中有言、人中造作天上自然、蓋福業有淺深、故果報有造作自然之異矣、天上之擇、雖自然亦是田業之所作也、以三世而言、非自然也、作業之德也、鷗鷺之羽、荆棘之刺、各德也、非自然也、(通衡五)

第四節 思 辨

虎關の事を辨ずるや、考證學派の如く事實を穿鑿し盡して後に纔に批判を試むるが如きにあらず、靈眼直ちに其の根柢に向ひて截然たり。故に往々にして空疎なるを免れず。然れども必ずや細意慎思苟も口を開かず。故に其の辨議する所として極めて明快ならざるはなく、前人未發之見問々之なしとせ

ず。彼の謂以心質書者是歟亦た以て世の學説を補ふべし。先づ其の論語に就いて辨ずる所を聽かん。彼齊一變至魯々一變至道の語を擧げて孔子の言にあらざと爲し、魯齊の國情より觀察し來り、此の如き至大の言は聖人たるもの、苟も口に發すべきものにあらざとなす。其論に曰く、

我見齊魯之興也且尙之始、聖賢之治、非無降殺矣、而至干春秋之時、未有優劣焉、然齊猶有桓公樹霸業焉、魯未能霸乎、其餘主者、互有得失、魯遂未勝齊矣、只孔子之時三千七十二子之徒、講道藝學禮儀、是魯之勝齊之見者也、其間多是在下者也、上者不然、粗言一二焉、田桓之弑簡公者齊之事也、如意之逐昭公者魯之事也、弑之與逐、雖不易優劣、而昭公之死乾侯也、季氏之畜害深矣、因此而言、齊魯之衰匹也、未有差降矣、唯以孔徒一時道藝之學、有在下之風耳、是齊之一變而所以爲魯乎、下者且隨之、上未焉耳、續以魯變道、而爲言、豈聖人之者、發茲濶大之吻哉、所謂至道者何時乎、三皇乎五帝乎、三王之始乎、我謂孔子柄魯政、或令如伯禽之治可也、伯禽之治者周公之治也、仲尼猶言、甚矣吾衰也久、吾不復夢見周公、云々、假令孔子治魯、而聖如周公、如無周公權何云々

彼は此語を以て弟子の記入若しくは孔子戲言の類とせり。

吾謂論語不經聖刪、諸徒交記、其文大醇而小疵、然則魯人誇國而矯聖言乎、若又孔子一時之戲語而

賈徒闢識布簡牘耶、仲尼猶云前言戲之耳、若魯變之言出聖吻者、前言戲之流乎

是より更に此道なるものを捉へて大小兩面より觀じ共に當らずとなし、且つ時勢の上に鑑みて魯の逐は齊の逆より更に不可なる所以を唱へたり。今後儒の此語を解する者を見るに、蓋し三代の禮樂廢類すと雖も其遺風魯に存する者猶之れ有り。人を得て之を古に復へすを得べきを云ふ也とす。程氏の如きは孔子即ち其人也とせり。虎關の見る所は此の如き處にあらず、全く史實として表はれ來れる事蹟の上より、全く春秋の筆法を以て斷じ去れる者也。予を以て之を見るに、程氏の見は虎關の公なるに如かず。然れども隨つて以て語を孔言にあらざとする如きは理に偏したる者也。語に由りて意を推し、以て古文を見るべければ也。然れども語に就いて見ば語足らず。虎關の議亦一隻眼ありと云ふべき也。次いで彼れ瞽瞍殺人論を作りて孟子を難じたるの言に聽く可し。

桃應問曰、舜爲天子、皋陶爲士、瞽瞍殺人、則如之何、孟子曰、執之而已矣、然則舜不禁與、曰夫舜惡得而禁之、夫有所受也、然則舜如之何、曰舜視棄天下、猶棄敝屣也、竊負而逃、遵海濱而處、終身訢然、樂而忘天下、

是れ孟子の本文なり。彼孟子を以て答を失するものとなし、

曰美哉問乎、惜乎答之不盡乎、請嘗試論之

先づ法と道とを辨じ、皐陶舜の若くんば共に法に泥みて道を忘れたるものとし、特に舜の行の如きは隠者の事に類すとす。

孟子只言法而不言道矣、言介而不言治矣、皐陶之執之與舜之不禁者法也、舜之敵跽天下、窃樂者介也、介之與法者豈聖人之本乎哉、故曰非至道治德也矣、夫道者法之本也、法者道之枝也、世寧有傷本而保枝之理乎哉

即ち舜の若くんば一身を潔ふして天下の爲めを顧みざるものとするなり。

孟子只知舜之棄天下之無欲而不知棄天下之不仁矣、何也、舜之爲君也民被仁焉、舜之外也、民受害焉、無欲者一身之介也、不仁者天下之害也、孟子曷崇巢由之介、而不崇堯舜之治焉、重申商之法而不重唐虞之道焉乎哉

且つ仁なる孝を後にして義なる法を先にしたるは道を誤れりとす。

夫五常之中孝入仁法入義、不得已而錯一、寧缺義而不可失仁矣、輕重之分也、舜之爲君也、有道之世也、有道之世道必正焉道之正也、五常有定焉五常之定也、仁先義後、先孝後法、何悖之有、君子手腕自有智權誠衡義鑑理銖焉度重輕乎

蓋し彼は舜の父を負つて逃るゝを以て不仁となし、孝道を盡さざるものとなせる也。故に、

或曰然則子意如之何、曰舜爲天子皐陶爲士瞽瞍殺人則如之何との問に答へて、

曰執之而矣

となし、此際舜如何にすべきやを示して、

曰舜馳而乞、皐陶敬而授、如茲而已

と爲し、一言降り得て人意を動かす。彼更に説きて、

夫舜雖聖子也、皐陶雖賢臣也、瞽瞍雖頑父也、君臣父子者天下之大常也、皐陶之執之者法也、舜之馳而乞者孝也、敬而授者順也、天下之理常而順者也

と云ひ、普通の倫理爾りとせり。然るに此の如くすれば是れ法を枉げて私人の爲めにするの嫌なきやとの問に對して、

曰爾不免罪焉

となし、固より罪あるを免れずと雖ども、大聖大賢の孝敬の理に於ては、亦た之を贖ふに足るものありとし、

曰舜之乞者孝也、皐陶之授者敬也、孝敬二德善贖枉焉

即ち孝敬は法の本たるを以て、之がために法を枉ぐるも智權に於て妨ぐることもなく、以て之を贖ふを得る者となせるなり。彼又問を發して瞽瞍徳あるかと云ふに曰く有りと言へて説けらく、

曰生舜大徳也、生舜大徳善贖殺焉

即生殺相成して損益相濟するものとなせる也。想ふに虎關の見る所は非常の大事に於てする也。常人の間の事にはあらざる也。然らば亦必ずしも不通の議論とせざるべき歟。彼れ猶ほ終に臨んで附言して云へり。

予反復孟子之言也、七篇之中多言道矣、特此章先法後道者蓋有激乎、

虎關の書を讀む細心ならずとせんや、意を用ゆる深切ならずといはんや。

虎關釋書に於て光明皇后温湯を設けて千人を度し、終に親しく癩者の垢を去り瘡膿を吸ふに至りては過ぎたりとして難じ、設温室者可也、去常者不可也、失常也、其徳可學其迹有不可學焉、柳下惠之流也とせり。亦た本論と相發明する所あるに似たり。然るに本論に對しては當時孟子に精通せる稱ありし夢巖の駁論あり。然るに夢巖の説は稍や理想に馳せたるの傾なきにあらず。且つ別に當時禪徒の規戒の爲めにする所あるに似たり。其の文取りて中巖の傳下に置き參照する所あらしむと云ふ。彼又荀子に於ても指摘する所あり。其の臣道篇に信陵君を通忠之順として直に湯武に比並して稱せ

るは非なりとし、李氏注當辨之而不議、豈公迷者乎と難じ、信陵は亂世の一俠者也耳とせり。

其の莊子に就いて辨せることは前段の如し。彼は更に其の眼を佛典の中に注ぎ大藏を難ぜるの言あり。并せて茲に記す。其他彼の辨議せし所少からずと雖も、一々枚舉するに堪へざる也。

或曰大藏之中諸文皆醇乎、曰不也曰佛說醇也諸師不也、凡列藏者王家之事也、宜哉大藏之諸文不醇乎、又雖佛經不能無疵、蓋依譯者之巧拙矣、夫道之出文字言說者不容盡取也、先醇吾心而擇其文疵耳

第五節 史論

虎關修史の方は前既に記せる所を以て之を知るを得ん。今猶ほ少しく彼の史眼に就いて見、次いで其の史論に入らんと欲す。(參考、碧山日録に曰く、虎關の釋書は、南都の僧巖然の草稿、固山の漢譯を基礎とし、表、志、贊等を加へて成せるものなりと)

左傳史記は實に彼が修史の標本とせるもの也。然れども彼は全然之に服する者にあらず、異見少しとせず。左傳を評しては謂へらく、文辭富贍なるも法律嚴ならず。往々議すべきものありと。乃ち其の晋の事を記するや、春秋本經と合せざるものあるを辯じて餘蘊なく、又史記不精の所少なからずとして李斯贊の若きを挙げ、其の本傳と協はずとし、且つ其の鄒衍の事を記するや、前後矛盾するものなりとし、平原君傳に終に鄒衍過趙言其至道の至の字は以て其の字とすべきなりと迄細論し到り、一字一句の微だも之を苟も等閑視せず。春秋の謹嚴なるを説き、其の臆を書するや石五と云つて五石といは

ず、飛ぶ者を書するや六鶴と曰つて鶴六といはず、蓋し飛んで上より來るものは數先づ目にあり。故に六を上にし、靈の石下にあるものは石先づ見ゆ。故に五を下にするとする如き、如何に其の細に入り微を析するやを知るべき也。故に其の志治表の如きも意を微に用ゐたるの迹歴々認むべきものあり。而して其の大なるに及んでは能く經論に入り、僧を措きて首に聖德太子を取りたる方應篇の如きあり。其の僧史の中に國體論を交へし等に至つては敢て復た再説を要せざるべき也。

虎關が鋭利なる眼光は筋を刺し骨に入らずば止まず、深刻嚴峻少しも假借する所なし。宋代の諸子議論を史傳に付するもの多きも未だ虎關の如きに至らざりし也。

彼の唐虞を論ずるや、其の衰世は啓より始まる者となし、紂政の三族を戮して顧みざるも啓擧戮の一言にありとせり。

甘誓曰弗用命戮于社、我尙耻禹之舞于羽、兩階纘以言而曰予則擧戮汝曷至干茲乎、紂政之三九基干此乎、夫君子慎言者也啓之擧戮者儆戒耳豈有之哉、然後世之酷虐者斯言之弊也、若夫禹謨無疵、曰罰弗及嗣如此己、宜矣啓之擧戮何不思乎

其の陶淵明を評するや一傲史のみとせり。

元亮衰晋之介士也故其詩清淡朴質只爲長一格也不可言全才矣、又元亮行吾猶有議焉、爲彭澤令纔數

十日而去是爲傲史、豈大賢之舉乎、其詩如其人云々

彼の李斯を論ずるや道を知つて行はざるものとして詰斥し、併せて彼が當時の姦を筆誅す。

聞道而不行、與不聞道而不行、二者何惡焉、我惡彼聞而不行者矣、蓋不聞而不行者、愚而已矣、聞而不行者姦也、愚焉可哀、姦也不可恕、況不聞不行、却毀之、是可惡之大者也矣、李斯戰國時事苟卿可謂聞道者矣、逮入秦不行所聞、諭始皇以吞并之術、是可惡云々、今之世如斯之者多矣、欲并斯而誅焉

蕭何を論じて冒頭先づ喝破して曰へり。

人有知人之鑑者鮮矣、有知人之鑑而知道者益鮮矣、漢蕭何有知人鑑而不知道者也

即ち蕭何は人を知るの鑑ありて道を知らざるものとし、之を事實に證し先づ人を知るの鑑あるを擧げて曰く、

劉項入關之時、項強劉弱、未知得鹿者誰乎、何隨高祖入關、諸將咸掠財物、何獨取圖書、是何豫知高祖之主天下也、韓信歸漢之初列卒也、加以誇下之辱、故人未知矣、何先知焉、故自高祖返己亡之踵、是何豫知信之邁諸將也、何有二鑑焉、常人之鮮矣者也、挾二鑑治漢、漢之治者宜矣、

とし、其の道を知らざりしを惜みて曰く、

然我惜何之有常鮮無益鮮焉、漢之初、武臣多文臣寡、亂邦多治邦寡、此時民思治如渴思水、又高祖之委任厚矣、何何不施王化而挾霸乎、是何之不聞道之過也矣、

と斷じ、更に其の仁弱なる惠帝に相として王道を行ふの機會ありしに之を空しくしたるを以て漢の世を短くせし原因とし、罪を何に歸せり。

又何相二帝高祖之傲慢縱艱于敷化也、惠帝之仁弱善于爲治乎、仁故易訓、弱故易順、還時喻以大道、行以至治、商周豈遠哉、然而漢世不踰二百漢德不逮三代者皆何之罪也矣、

着實の論眞然と稱すべし。

又其の文帝を論ずるや、明主なりと雖も刑名の學を好みて儒術に薄く、刻薄にして材を育せず、文材を弃つるは賈誼の若く武材をすつるは李廣の若しとし、李廣の用ゐられざるを論ずるや曰く、

李廣傳云帝曰惜乎不遇時如令子當高帝時萬戶侯豈是道哉烏乎帝之言駟不及舌矣

夫士之遇不遇者主之好之與不好也、文帝柄此權知廣材何不禮其身而其讓父乎、我天下者高帝之天下也、高帝之天下者我天下也、焉有二時乎、帝之言亂理之謂乎、是非有道之言也

とし、賈誼の用ゐられざりしは絳灌の阻によると雖も、畢竟帝の失に歸すとして曰へり。

帝之知誼之才猶知廣焉、誼雖被沮絳灌々々又乘帝之不育材之隙矣

又則天武后を論じて謂へらく、世人皆革命を武后に歸して之を罪すと雖も不可なり。畢竟高宗之が端を啓きしものにして、高宗を太子と擇びし太宗亦其の罪を分たざるを得ずとせり。即ち高宗は全く色に溺れ太子に傳ふるをなさずして、徒らに武后をして其の醜あらしめたりとし、

若高宗鄉無禪讓之議、武氏縱雖恨虐不至革周矣、何也、五帝三代以下無女主、故蓋向無其跡後不可踵矣、彼高宗昇遐之後爲皇太后雖制中宗、若無宗遜位之舉、豈攘神器乎故予謂唐祚中關高宗之罪也其の太宗を罪するや曰く、

十四子之中寧不知高宗之昏弱乎、況漢王泰之好士善文乎、又越王貞紀王慎亦著名於宗室諸子之中、太宗若慎受授、無唐室之厄、不辨不肖、託以大器、以是言之、太宗不能無傳系之議史臣何不覃茲乎又姚崇論に於て、世の唐の姚崇を以て四宰の列に登し房杜姚宋と連呼するの非を唱へ、姚崇が行は一不合仁として大いに之を貶し、其の捕蝗の事に依りて立論し、

史臣不辨造言曰蝗害訖息、寧爲信史乎

として其の事實に遠きを難じ、徒らに民を疲らすを知りて之を救ふことを知らざるを責む。

凡そ是等の諸論筆勢嶄々眼光銳利確かに一史家の素あるを示すものにして、特に其の時勢と切なるの議論多き彼の意の存する所亦知るべし。

第六節 文

虎關、文に於ては最も韓退之を尊び以て泰山北斗とせり。其言に曰く、

始予讀韓文李漢序、至洞見万古愍測當世、以爲斯言不可容易而發矣、漢門人也、豈溺其師邪、漸至進學解、尋墜緒之茫茫、獨旁探而遠紹、障百川而東之、廻狂瀾於既倒、捲卷嘆息、漢之言不浪出、可謂書其師矣、凡唐文人中、豈有此志氣邪、縱有志氣、豈有操行邪、縱有操行、豈有成文之語邪、縱有成文之語、又豈有門人之系其文而不斬言邪、然則新書所謂泰山北斗之句、不爲過耳、或人曰子釋氏也、於韓當有所辨焉、何不顧言乎、予笑而曰子未知韓、焉能知予乎、(通衡五)

是を以て觀れば彼は韓子の氣骨を愛すると共に亦其文に服せしものなり。故に皮日休が韓子を以て文中子室授の者たりとするを難じて言あり。

皮日休請韓文公配饗書曰、文中子之道曠百祀而得室授者、唯昌黎文公也、皮氏以韓子加二十賢之列、而請配饗、其志可貴矣、然爲王氏之徒者非韓子之意矣、韓文中稱古賢者多矣、一詞不及文中子、我疑韓子少文中而不加齒牙乎、若爾室授之句韓子地下之頭韓橫點者乎、況韓子亦言若世无孔子、僕不當在弟子之列、豈衰隋之王氏肯就資伍乎、皮氏書能引此言、蓋熟思乎哉(同右)

抑も韓子が一たびも文中子を口にせざりしは或は別に意あつて然りしに似たるものあり。必ずしも

其の口にせざりしが故に、文中子に負ふ所なしとは云ふべからざる也。而して虎關は是を以て、韓子の蓋し文中子を齒牙にかけざりし者也とするに至つては稍や崇拜に過ぎたるの傾なきあらず。然れども亦以て虎關の韓子に於ける排斥の態度に出でざりしこと、彼の仲靈が非韓の爲めに千言を費やしたると甚だ異なるを見るべき也。想ふに彼は義に於て排し此は文に於て取りしに外ならざる也。

虎關の韓文に推服する既に此の如し。今彼の作物に就いて之を觀るに實によく韓文の眞髓を得たるもの、如し。其結構體裁より造語作句に至るまで先づ退之に由りて經營せし痕を認む。然れども更に深く之を檢すれば、彼は既に韓子よりは全く脱胎したるものにして、能く韓子の格律を出で氣局態勢の更に大なるものあり。步趨を司馬遷に接するが如し。古蒼の趣の韓子に比して更に饒き所あれば也。五山の文體は最も宋文に依る者多し。然れども虎關の如きは全く別調也。汪洋として弘く峻拔にして高し。蓋し日東漢文界の大觀なり。

今虎關の文に就いて細論せんとするに臨み、先づ彼の文話數項を擧げて彼が風尙着眼何如を見んとす。清言篇に曰く、

夫文章妙處、天然渾成、萬成一律耳、人或誠心覃思而自合也、若未至天渾之處、雖工有可改之字、雖奇有可換之言、若已至于天渾自然、文從字順、格調韻雅、權衡齊等、不可移動、所謂醇乎醇者

也、毫髮有移換疑意之處、爲未到耳、

又通衡篇に曰く、

或問陸子衡文賦、課虛無以責有、叩寂寞而求音、是爲文之法乎、答曰非也、文者非造作焉、精思而自合者也、夫至文者无有也、格律關鍵、具於思議之先也、學者醇粹以思、涵養熟練、自合於本文矣、所謂不借繩削而合者是也、若課虛叩寂者、皆影蟲也、非至文矣、魏晉頽風此句爲證也

魏晉の弊虚寂にあるを知る。是れ彼が文の充實潤澤能く力ある所以なり。又清言に説く所之を證す。

經史者詩文鹽醬也、詩文之中、不可少鹽醬矣、夫饌餐之中傷鹽醬者不可食矣、詩文亦然、若人好多用經史語、猶食之傷鹽醬矣、

韓文を評したる者通衡篇に曰へるあり。

韓文南海神廟碑曰、南海神次最貴在北東西三神河伯之上、烏乎韓公爲文用字格體嚴正如此、蓋作文者須知正助、四方之次、東雖在初、今以南爲主、當以北爲配、故以北爲正、置東西上也、旨哉

韓子之言乎、雖一字不苟下、庶或後之君子、辨爲文之正助焉

精密細微蓋し疎心の者の及ぶ所にあらずる也。

釋書の文之を史記に視るに、着語の緩急緊弛未だ相同じからず。思ふに是れ其の文材の異なるが爲

めにして、史記は特に世の豪傑偉人を捉へ不平牢騷の慨を洩らせる故に、文勢跳躍人意を快ならしむと雖も釋書は方外の傳也。悲壯慷慨の氣の求むべきなし。虎關曾て史記漢書文體の差を以て其の取材の差に歸せり。釋書の史記と材を異にするもの漢書の比にあらず。文體の差を以て優劣を判ぜんとするは評者の過なり。釋書を讀むが如き最も此識を要す。然り而して方外者の事蹟たる世俗と超絶して其の異言異行に富む。是れ以て筆を着く可き所たり。而して虎關能く之に當り得たり。後世師曠の高僧傳を修するや既に元祿文運の高潮期にあり。文格彌々精鍊を致したりと雖も、其虎關に得る所多きは具眼者の認容せざるを得ざる所とす。釋書の文雄拔なるあり莊嚴なるあり隱靜なるあり、而して其の叙事の妙に至つては殆ど遺憾あるなし。是れ其の能く大著作ありし所以なるか。今其の叙事の一例として行基傳を引かん。

行 基

釋行基姓高志氏泉州大烏郡人、百濟國王之胤也、天智七年生、及出胎、胞衣裹纏、母忌之、弁懸樹枝、經宿往見、出胞能言、父母大悅、收而鞠育、童稚之時、與兒輩遊、動讚佛乘、村里牧豎之兒、捨牛馬而從者數百人、其主或覓兒童馬牛到基所、聞其讚說、不問兒畜、感泣而忘歸、基之說誨頃、牛馬散諸所、主各以爲已失也、說已基上高處呼牛馬、應聲而來、各主牽去、率以爲常、十五出家、

居藥師寺學瑜伽唯識等論於新羅慧基、又從義淵益智證、二十四受具足戒於德光法師、基事行化、道俗追隨之者、以千百數、所過遇嶮難、架橋修路、指某地之可耕墾、點某水之可灌溉、穿渠池、築堤塘、計畫功蹟、不日而成、州民至今賴之、王畿之內、建精舍四十九所、諸州往々而在焉、基嘗行化返故里、里人捕魚而宴池邊、基過其地、年少戲以膾薦基、基喫之、須臾臨池吐出、皆爲小魚游泳去、見者驚伏、基私度沙彌、敕禁園、身在獄中而出遊里閭、獄吏以聞、詔赦之、聖武帝甚敬重之、天平十七年爲大僧正、此任始于基、時智光法師者有辯慧、嘗疏孟蘭盆般若心等經、聞基榮授曰、我才智宏潤、行基只營小行耳、朝廷弁我取彼何乎、抱嫉恨隱山谷、光一夕俄死、其徒以忽殞未葬、十日而蘇、語諸弟子曰、冥使驅我而行、路有金殿、高廣光輝、我問使者、此所何、冥使曰汝稱智人、何不知之、行基僧正受生之處也、又進行望見煙焰滿空、問之、答曰、汝當墮之地獄也、既而到閻王所、王呵曰、汝於閻浮提日本國、有謗嫉行基僧正之心、今所以召汝者、治其罪也、非命終也、即令抱火銅柱、我肉鎔骨融、而後放還、言已馳謝基、々時在攝州、造難波橋、遙見光來而微笑、光伏地作禮悔謝、說夢事、二十一年正月、皇帝受菩薩戒、及皇太后乃賜號大菩薩、二月二日於菅原寺東南院、右脇而寂、年八十二、基之所過、耕夫捨耒耜、織婦投機杼、奔波禮謁、村閭闐咽、而不容易往來云

筆々細透物々活動亦た能く無中有を生ぜしめて現虚離映せず。靈妙の技なくして焉んぞよく斯の如きを得ん。

上一山和尚書

六月五日某惶恐頓首、獻書于常樂堂頭和尚大禪師座下、季夏極熱、不審法體何如、不爲煇燠之所惱、龍天保護起居康寧、伏念堂上和尙往已亥歲自大元國來我和域、象駕僑寓于京師、京之士庶、奔波瞻禮、騰沓係途、惟恐其後、公卿大臣、未必皆悉傾于禪學、逮聞師之西來、皆曰大元名衲過于都下、我輩蓋一偷眼其德貌乎、花軒玉聰嘶驚輜輶盡出于城之郊見者如堵京洛一時之壯觀也、某時懷一香隨衆伍而展拜、當時人甚多矣、如今事已久矣、料想師之不必記焉也已、而師發于京、某乃欲趁追高躅跨越關山、某生素多病、一歲之中、其所疾之居諸過半矣、雖其不疾之時、喘々焉羸々焉、不似常人之強健耳、以故未敢果然滿足、又不敢缺然忘懷、爾後聞于東來之客曰、師董巨福、某踴奮欲策錫而東焉不能也、又聞于東來之客曰、師移瑞鹿、某又欲踴奮而東焉不能也、蓋所以其不能者、喘羸之使之也、因循而至今幾十稔矣、今茲之春、喘羸之者少覺輕損、決起而來寓于恩比、以爲夙志其必遂也、便欲詣籌室而擊宿蒙、反思我甚不知井竈之者敢輕犯嚴尊乎、況有言語不通之處邪、交淺而言深者、先哲之誡也、且待經著隣涼日熱月釀而后以降皆五請益之秋也、何戚々乎、驟

新哉默々只隨衆而已、結夏僅十數日、師俄解印去、始某撫然而自失、如絲之其亂矣、依依之不辭矣、悶々之中忽翻然而曰、吾昔在京也、心已許在師之席下、矧已值于上堂、已遇于入室、其又足矣、又預于結制也、夫囊括於四來者師之結也、穎脫而一出者學者之解也、如是則結者在於師、解者在於人、古聖有縮一劫而爲七日者、又經日五十小劫、謂如半日、吾師之制豈必九十日而止乎、既非九十之數、則雖十數之日未爲破也、昔者吾竺乾老人安居於須彌山頂、在紺琉璃石上、爲其母氏說法、于時目速忽然起念、世尊已在于此闍浮其空虛乎、便以所謂天眼者、下視佛右瓶沙王之宮、受其供、又視祇桓竹林等諸所、各在其處、而說法、乃至遊化於瞿耶尼、行乞於鬱檀越、然則昨未曾離建長、今未必居常樂、十世古今師之期限也、三千刹海師之法場也、彼此兩山、豈爲阻乎、我有脚焉、唯消乎運奔耳、奚爲悶々乎哉、而其亂者不辭者、灑然而脫去矣、未幾圓覺革其主府命使某量移其侍司、某不憚告辭于再于三、然指揮甚嚴、且私思忖、鹿阜其於常樂、視於福山爲密邇、是又一幸也、吾脚其減趺乎、終便就職、禮事未乾尋逢府營莊薦其先忌、其警飾之繁也、師之所備嘗試也、薦事既息則端午也、茲日某舊病亦作、如在京之所患纒資醫藥、動則二旬有餘、頃者所畜之思未遑摛、故於疾時較于所患、其相倍也矣、而今雖未全愈、先裁此書、今昔之懷區々之意、不覺累幅悉勞尊眸已矣、某比來吟藁亡慮數百篇、今探破囊采其爲頌之者爲詩之者各十首、以當題

蓋之贊、雖無受斤之資、只抱就斲之情耳、某恐懼百拜

筆力矯々、司馬遷の壘を摩するを覺ゆ。後世守格泥法者流と比して遙に其の外に立つ。

原 噴

夫噴者何、與生俱生、而有觸而生者也、與生俱生、故不可辭矣、有觸而生、故不期而出矣、然則君子不可得而辭矣乎、夫人明於理、則無噴焉、昏於理民發噴焉、君子之精於理也、何噴之有、不須辟而自息耳矣、夫怒者生於違息於順、天下皆然、未有換之矣、人之違我者皆我不德也、我已有不德、曷弗自惡而悲伊哉、若悲伊者重我不德也、又伊之逆我者皆吾之宿憾也、若怒之者自噴者也、伊豈干哉、若悲伊者重我宿憾矣、夫噴之爲物也甚矣、疾雷盲風不足比其急矣、烈火瀑瀉、不足比其酷矣、是以聖人辟之矣、夫心者靜者也、觸物而動、動則惡矣、噴之動心也惡之惡者也、當其靜也明珠鍊金不足比焉、纒動也孔之醜、一有怒則劔戟吾心、虎狼吾心、故君子耻于噴焉、人之所以噴人者發於齊輩矣、若夫相違者則廢矣、小兒之狂驕不度也、其罪擢其髮而弗足數焉、然至愚者皆不怒也何也、與我相違也、成人之微愆也、人皆責其悖謾矣何也、其分齊也、是以凌我之我見之猶我於兒之違者、雖箠罵之甚、豈違噴乎、唯我未能違其分、所以是怒彼也、彼之用箠罵之逆德也、與小兒之狂驕均矣、我若悲小兒者我未成人矣、古之聖人見天下、莫然違也、不啻我於兒之違也、故

遭罵管斥排而未嘗介於懷也、若人遭罵管須見彼如小兒、若有嗔之情、應知與渠齊、我今齊惡人、豈不自耻乎、是以君子遭違而不起悲矣、夫人之出塗也、不虞而交臂癩跛癩之群者、顧之而不急抽身而出者鮮矣、彼嗔罵者咸瞽跛耳、我豈與之相並而彼事乎、只恐弗早出此隊、若與之相爭已陷其隊也、以德見嗔罵者、弗當如跛盲之醜也、渠不幸而支離焉、我體之全、豈忍爲之哉、人之嗔也其面必惡焉、夫面者承於心者也、猶醜之若此、矧心之醜、豈可耐哉、所幸心在內而不見矣、若其可見者當其怒時雖親戚誰寓一目乎、況他人乎、然心之不可見者吾人之事也、彼聖人者皆能見其心、猶掌果焉、今其人之有爲也、不耻凡庸、耻於豪貴、是以言之、心者凡庸之不見、而聖人之能見者也、豪貴尙或耻焉、矧聖人乎、嗔心之醜聖人咸見、寧可弗耻乎、又怨者嗔之變也、害我者過於嗔矣何也、嗔者起吾勢之所及、怨者生吾勢之所不及、勢之及也、呵罵暴至而我心息矣、勢之不及也、停畜毒酷、經時積歲、其心滋益、以故恨之害深于嗔矣、又君子常欲人之違我、不欲人之順我何也、人之順我也、我慢我德、人之逆我也、我堅我德、我又不自我焉、庶哉、逢違我人、以質我心之堅慢也、故遭違而不怒者、君子自試之準也

原曠の外猶ほ原寛、原慢の二篇あり。共に同種の者に屬す。元と韓子によりて命題立意せしや明なと雖も、筆勢奇峭、韓非の風ありて更に別に地步を占む。

無價軒記

壬申秋季、予移慧嶠、寺罹己未火、大殿未闕、矧諸堂乎、又況函丈乎、寢陋之室、矮狹之牀、容身而已、向之主者闕北窓、予居卽冬、重糊而不遑啓矣、明年夏、暑孔熾、暑之爲威也、酷于隘屋矣、老之爲患也、困于暑毒矣、乃和蛛網而剝糊紙、拂蚊鬪而却戶輪、扉半開廳先至、拭鬱溼滌煩熱、蓋室之背、大林亘澗、所謂千松洗玉者也、硯生篠簞、斯風也稟林壑之陰、鍾松竹之清、故能醒我困羸、暢我性情、偶哦古詩、六月賣松風、人間恐無價、卽扁軒曰無價、高枕而臥、因思時干戈、歲歎儉宇多役、厨寡產、予之窮厄至于此矣、嗚呼多時閉藏之處、一旦得無價之物焉、何知茲約窮寧無變通邪、凡物咸無價而繫于時矣、瓢者至賤者也、溺者中流逢之、其直千金、故物之崇卑、豈有定乎、又繫于時而已矣、不特風焉、水亦爾也、往冬此硯焉、雪埋水封、流水溢滯、送目眸先涼誰敢進一步乎、比來來往憧々絡繹、或疏決而見勢之奔放、或壅遏而聆音之嗚咽、或足濯而浪蕩、或手掬而波躍、飲者足喝者醒、困者健浴者潔、其跡此者無不悅懌、若有粥者、寧有價乎、不啻風水焉、人之心亦爾也、貪慾塞之、愛惡鬪之、憤悻梗之、狂暴踏之、觸塗留滯、猶賈不售、其靜也圓如澄如、無垢潔如、無不照焉、至明也無不通焉、至虛也所謂無價寶珠也、因茲見之、風水憑寒煖也、心性依動靜也、雖所緣異、皆時也矣、自今學者庶幾於物々上善時々養、着々無非無價之用

也、故吾作記以貽同志者云

語句詰屈脉洛支離すと雖も、古色蒼々固より後世の文體を以て見るべからず。

後無價軒記

癸酉之夏作無價軒記、明年正月癸巳寺爲祝融所奪焉、予拾瓦礫、掃灰塵、構小寢而居、關東軒爲燕坐之室、殿宇雖燼、松竹無恙、入夏以來、鄉之無價之物、颯然入坐、予揭舊扁於軒、或曰昔之北軒便于松風也、今之東軒恐不同矣、予曰昔者一無價也今者二無價也、何扁之左乎哉、請問曰、凡風之涼於人也、萬籟皆同、特欲松風者、異衆風也矣、夫風之度大虛也、逢物爲聲、愛惡不侔、其入松也、音韻尤休、我居不水、乾陸狹隘、伴吾者只諸大夫而已、有時風來、忽轉吾廬、或置洞庭瀟湘、或渤澤洋澗、或萬丈潭七里灘、或三峽五湖、七澤九江之間、因風勢之巨細、爲波浪之洪纖、江湖海灘之轉徙者、波浪之洪纖也、又吾廬卑陋、無音器焉、有時風來、令我登楚臺入臨邛、過伯牙子期之席、入虞舜羲農之宮、躋乎移風易俗之道、不惜繭絲椅桐、是古人之所以無價而我昔之扁者也一焉而已、昔者取諸耳也、今者並諸目也、蓋松風者、不擇東西焉、擇耳目焉、月光者、分東西焉、辨耳目焉、是今之所以二焉也、夫夕照西春、乾坤杳冥長庚先驅早見熒々、東嶂不高、天宇澄清、規鑑濯々、漸出綏昇、光射吾軒、燭我桁棚、于時乎我乃陟武昌之庾樓、坐牛渚之袁舫、歷蘭路

桂苑、而徘徊影蟻池之傍、二更已半、膚體通涼、夜蒸全退、天地朗光、不覺到一處、而不知何許、唯聞西邊流水之衰々而已矣、見群彥翫月、一曰供養、一曰修行、一人抽身而歸衆、其似長者品評向三、其語若有褒後一、群皆以爲然焉、予在側視之、長者之言、似有差、其心如不然、忽見我室、凜亙清靜、無前晃曜、庭影已傾西矣、予思忖不離坐、而游千萬里之勝地、廁數百歲前之名宿、皆北軒之所無、而此軒之有也、又豈鏘縉之及者乎、抑我到彼地耶、吾廬變爲彼地耶、末後江西者、我室光明之時耶、杳冥之時耶、涉筆而記之、建武元年五月十六日、
意餘ありて辭足らずと雖も、文氣自から空を排するを見る。就いて一々疵瑕を指摘するが如きは陋也。

盆石賦

惟少年之玩好、畜數盆之蒲石、布漫窓間之几上、磊砢而澄徹、中歲之願省也、悔愆而改轍、任衆人之分携、遲忘如瓦礫、羞遲暮之羸衰也、尤怕夏暑之劇、課童子之使令、收舉石於牆角、拂盆埃而注清冷、外瓷青而底沙白、博南薰而解愠、取涼氣而滌熱、客見笑而言、清則清矣、爭奈其髡何、應之曰、子視培塿、而不知巨嶽焉、夫盆石之玩也、假于山水矣、水其根坻者狀于波流也、蒲其岩隈者、肖于草木也、或瘤松與瘦梅、或奇葩之怪楮、寅刷昏澀之苟遲時也、枯瘁萎病之煩看鏡

矣、廢功毀業之不遑擲寸陰於尺璧、然失佳致之大山、取小境於阜垤、昔予之登富峰也、躋攀者凡三日、二日出入大林巨樹之間、三朝絕無寸草綠矣、唯岩石之皜嶠紫紅之砂礫而已、如此者數十里、遂至絕頂之岑嶸、不特富峰也、喬岳皆不有植物矣、登臨之者不嫌髡、只愛其峻拔矣、今此石之高數寸、盆之廣盈尺、海嶠之形狀不乏、碧峯入雲而鬢束者有之、青屏涵水、而壁立者有之、岩洞若剗而可隱神仙者有之、磯崎平延而可釣魚鼈者有之、徑路狹窄、而纒樵蘇之可通者有之、湫池互陰而似龍蛇之可螫者有之、我避培塿之雜穢、省看養之苦役、玩此具體之微、又不宜乎、子之嫌髡者其阜垤乎、予之不嫌者其絕岳乎、我又隨時拈一枝花、或植峯者或插壑者、卉木之更繼、朝開暮落四序之艷景、千變而万易、因此而言、不必髡、又非不髡矣、又此盆石、子爲大乎、爲小乎、我吹水而鼓起四海之洪濤、瀉峯而垂下九天之飛瀑、洗石者整頓乾坤、換水者掀翻溟渤、是物之變而我之常也、夫物之小大未定矣、蚊睫者雖螟之野也、蝸角者蠻觸之國也、赤縣者輕于許由之瓢也、蓬壺者殆于龍伯之竹也、子以爲如何也、客避席而拱言、視茲石清我目、入茲室清我識、乃知事非事而弘我之多、物非物而益我之博也、予曰子只知清子之目識、未知予之清目識、子還坐少善學乎、客如言然、而盆不浪石不動、客無言、予亦默、頃刻而客不辭而出、

雄健挺拔、移山翻海の大手腕にして、後無價軒記と格度を同じうして更に高逸せる者なり。

說 老 聯

故舊之一叟、通謁而來前、眉縞皚、不界髮、頭髻低於肩、下榻而相揖、薦坐而指筵、跌宕之未定、吐氣而敷言、離索之不必逃、風馬牛可及焉、惟老羸之衰困、隔歲月之周旋耳、籟鳴弗切聽、目昏眇弗明視、鼻齶窒臭不辨、舌乾梗味不旨、腰背偃偻荒行、膚體冷沍癢寢、悲哉老境之過患不啻儂盡手指、何不早陷溝壑、乃格桑榆年齒、村生平出處、師復有之否、鍊子笑曰、已子之有者咸我之有也、然子之憂者咸我之喜也、憶昔耽色老我恤味是所以釋、粉黛也、憶昔耽音、老我苦贖、是所以忘鄭衛也、憶昔耽香、老我覺塞、是所以薄馨馥也、憶昔耽味、老我慵舖、是所以疎膏腴也、憶昔耽游、老我多懶、是所以遠朋伴也、憶昔耽眠、老我不寢、是所以去惜思也、茲六者、取諸益、不亦說乎、況不在冲孺而在耆叢乎、又始四者益我者薄矣、終二者厚矣、其所謂厚者不寢故剩夜、遠朋故騰晝、々夜之多暇也、閑思自與道邁、往彥擲壁、競陰是少壯之趨走、今我多益饒逸、幸道德之邂逅又夫厖眉皓髮、值會稽之榮安車之駟馬受京師之迎、四五溫洛之坊、建會爲尙齒、六七資聖之寺扁堂曰耆英、狄盧之不及列、司馬之辭班者、以年之未盈也、嗚呼顏氏德行百世之師、不幸之短命纔稱于庶幾、若五福効壽累歲、應二聖出魯、同時姜望、神武万古範模、含兩箇之牙齒、得七十之城都、若不躋台背渭之一釣徒、繇斯而言、稚考之夏絕、雲漢之泥塗、子嫌之何乎、叟辟席而作

曰、牽世俗之貫習、乖容哲之典謨、惟翻憂而好喜、卽至道之要樞、適因款晤餘論、掇得咳唾寶珠、乞貽天下之耄艾、不敢獨秘畜于吾、

縱橫奇恣を寫すは韓子の送窮文を扮本とせるか、易々辨じ去るは其の進學解に似たり。巧妙の作と云ふべし。

以上抄出せる外、賦の見るべきもの少なからず。其の百藥菊賦の如きは清秀古雅にて誦すべし。文竹管賦の如きは構想精醇愛すべし。唯牽強理に入らしめんとするは禪徒の弊也。且つ虎關の四六體は清機は乏しくして力量は餘ありと云ふべし。

第七節 詩

虎關に於て最も見るべきは其の學問及文章也。詩は甚だ稱するに足らず。然れども是れ寧ろ五山文運の初頭に立ちて風氣未開の際自然の數とすべきのみ。且つ詩作に達せる者は多くは一度支那に渡りたる者也。雪村中岩以下皆然らざるはなし。虎關身海外に出でず。時に來朝の者に遇ひ又聚文酌略の如き著ありと雖も、聲律のことは讀書獨學を以て達し難きものあり。故に其の詩や學力を以て排纂するものにして、或は特に意を技に用ゐるものは纖巧に失し眞に詩句運用の妙に到らず。然れども之を以て學者の作として觀ば、後代の惺窩羅山の輩の比肩し得べき所にあらず。體格未だ齊整せず。句硬に

語妥ならず。精熟の境に遠し。但間々奇警清健の者なしとせざる也。

先づ五古にては夏日偶作の如き筆力興趣共に見るべし。他の議論理窟に入れるものは取り難し。

夏日偶作

叢木列門闕、葉繁夏蔭榮、碧雲垂有地、翠浪起於庭、中有一株梨、綠葉衆樹并、惟梨爲植物、中夏病葉生、葉々就樹乾、復無舊時青、一陣風入林、枝搖碧葉明、只有病梨樹、葉間械々鳴、初我看病葉、心裏抱愁驚、夏葉早凋悴、秋實恐不成、今聞鳴械々、忽爾棄愁情、衆樹受風時、葉柔而無聲、雖看蒼翠動、纔應悅目晴、差此突蒸中、俄然起商聽、身心共淒涼、盛夏結秋盟、秋實待甚久、待得功還輕、屢歷盡風露、不過一口盈、爭如乾病葉、衰質猶懷貞、商聲入双耳、蕭々一身清、因思塞上翁、禍福無定程、我於庭樹間、感歌付童嬰、

音節の奇古韻脚の自由なる、亦以て一斑を窺ふべし。
七古律中にては、

和源黃門拜龜山廟之韻

先帝兎裘高敞地、神持鬼護一龍龕、陸臣帝憶無爲化、梁蒸時宣實相談、聖德旁流民被澤、淳風永扇世損貪、西郊新廟莊廚塔、東嶺故宮成貴藍、苔暈上籬懸落日、松濤頽壑度旋風、皇基鞏固不

應拔、香火万年除僮男、

七律にては、

和風暖日滿山隈、庭宇蕭條鎖綠苔、花每相看含笑向、鶯雖不問寄聲來、春愁薄處吹芦管、午夢殘時啜茗盃、燕子如無韶景困、銜泥幾度去還廻、

(春)

此等は先づ合作とすべし。

薄暮天邊雲翳收、乾坤瀟氣滿空浮、明雖似盡清於晝、爽爲宜秋約此秋、池淨或疑有行地、々寛何必用登樓、通宵利聽叢蟲響、胡蝶遂無入寸眸、

(中秋月)

是等は巧を弄せし者なり。

勝境元依辟世氣、惟花又出紫紅群、千尋湧池枝生浪、一簇擁簷葉插雲、眩目眩心開細々、半憂半喜落紛々、瑛盤他日遇同色、願預頻婆甘露分、

(賦万壽寺櫻花呈主者)

是等は巧より織に入れるものなり。

門外紅塵内碧漣、居雖城市趣林泉、庭前嶠沼蒙山水、水底乾坤泰地天、狂客把沙拋浪上、游魚誤餌聚欄邊、料知恩信及鱗介、養護有時曾不愆、

(藤公池亭)

前聯の如き刻意深しと雖も詩句を成さず。七律數十首此の類甚だ多し。若し佳句を求むれば登富士

山の前聯に、

帶雲衆嶺同滄海、步月吾人上碧天、

(登富士山)

山岸漸崩新有路、溪松自倒便爲橋、

(行旅所見)

五律にては古調あるを以て却て佳なるものあり。

牛宿主昏時、乾坤瀟氣滋、月隨潮退上、舟比岸奔遲、波展無文練、星餘似局棊、松洲遊步地、數葉各嗟咨、

(中秋泛勢海、二首)

人屋枕潮頭、海村魚蟹陬、榜船過葦渚、著岸步松洲、黃麥藏黃犢、白波雜白鷗、昔年乘夜月、今日夕陽幽、

虎關の絶句は其の律詩よりも強健雄拔なり。されど佳句として見るべきもの少し。唯其力を見るべきのみ。是れ寧ろ虎關たる所以か。其の強ひて巧を用ゐんとせるものは全く纖細となりて、大人の兒女の態をまねるに似たり。

虎豹九關難寓眸、仰望不及思悠々、玄之玄是元無象、万物從他推上頭、

(天)

一機迅疾更無過、斗轉星移事已睽、聚雨破山怒雷折、長空馳逐紫金蛇、

(電)

禪偈の嫌あるも虎關の特長茲にあり。其の語に迫促の憂あるも亦雄健にして佳なる處なしとせず。

乘月泛舟六首の中、

如畫月光穩泛船、魚龍可廢此宵眠、微瀾不起涵群象、抹過星辰向上天、
扁舟泛月繞松洲、松際月光時暫幽、柔櫓一聲波萬頃、胸中爽氣闊吞秋、
宋人の佳境なり。又同題中、

泛月僧船遠葦芦、僕呼潮退促歸盧、村民誤認扁舟至、爭龍沙頭索買魚、
の如き境佳にして語不足。又、

淺水桑沙一逕斜、機鳴林響有人家、黃雲堆裏白波起、香稻熟邊蕎麥花、
の如きも南宋人の集中に編すべし。其の他に、

春色此年嗟早哉、桃花落盡令辰催、葉間有實小於豆、帶得三千風露來、
(上巳)

靜者動兮堅者柔、地如波浪屋如舟、此時應畏又應愛、風鐸不風鳴不休、
(地震)

蕭々院宇長莓苔、春事已過夏日催、蛺蝶翻々憩庭樹、落花枝上一花開、
(漫興)

室苦蒸蚊坐不成、等閑背手踏沙行、中庭無物忽拘我、細見蛛絲一線橫、
(夏庭晚步)

霏微知是來何處、散入西風拂沈寥、將此定中不眠耳、就窓著得過連宵、

(次一山和尚秋庭聽雨見寄之韵)

棚々雖抱薄命歎、生涯花木又還安、來翻梨下訝難辨、飛入菜畦總不看、
是等は清警なるものなり。(蝶)

南北東西不定窠、一孟三事是生涯、近來自笑如蛛子、到晚區々解造家、
(海藏院偶作)

東嚮戶扉夜不扃、夢寒明月入簾新、多時弊垢床頭席、忽作水紋好繡茵、
(漫興)

病臥矮窓憑曲床、還思宇宙不洪荒、偶看白鳥飛青漢、展我寸心万丈長、
(同)

是等は能く虎關の人に副ふもの。

絶句三百餘首にして大凡取るべきもの此の如し。其他諧謔滑稽に亘り、又議論に入るもの、今皆取らずと云ふ。

第八節 四六法

天隱四六圖の書中に虎關和尚四六法を載す。參照天隱傳是れ實に後世仲芳太白惟肖江西天隱月舟等の奉じて圭臬と爲せる者たり。故に茲に之を採録す。但其例語稍從刪節

虎關四六法

第一發句 施頭一二三四字。不用對也。

夫以、愿夫、於是、方今、竊以、伏目、蓋聞、伏惟、觀夫、于時、汝當知。是等也。

第二傍句 句中用之。不用對并韻聲也。

斯迺、抑、然而、是猶、且、于焉、將以、誠是、何必、可謂、就中、於越、於茲乎、于奧。是等也。

第三狀句 三字對。可調平仄。發句之次用之。

微霰零。平。密雪下。仄。有畛畦。平。無涯涘。仄。是等也。

第四緊句 四字用對。可調平仄也。

三陽交泰。仄。万彙敷榮。平。進寸退尺。仄。跋後躡前。平。是等也。

第五長句 自五字至九字或十餘字。用對。可調平仄。

五字 上方之三應。仄。東序之兩雄。平。

六字 逢法步之新時。平。修山門之舊例。仄。

八字 携牌於千磨之己息。仄。乘拂於昏鐘之存鳴。平。

十字 赴之者超八之醍醐為糧。平。尋之者唯一之寶庫為乘。仄。

十三字 論其寶材平則東覺範參寥而為一。仄。謂其道價仄則并德嶠濟北而為三。平。

十五字

傳命之甚嚴平也令辰逢三大士之觀誘。仄。伸辭之不遂仄也今夜斬一都會之舉揚。平。

十七字

結袋者法社之令辰平也高德勤修禁護之制。仄。秉佛者祖庭之佳會仄也庫品何耐拈豎之機。平。

右句有之也字。故為十七言之長句。若無之也字。則雜句也。

第六隔句 有六體。輕、重、疎、密、平、雜。是也。輕重為最。疎密為次之。平雜次之。用對。可調平仄也。

輕隔句 上四字、下六字

惠日之光。平。至七葉而增輝。仄。

法燈之照。仄。騰万代而彌明。平。

春來雪消。平。山々增青々色。仄。

夜靜月白。仄。處々添依々光。平。

重隔句 上六字、下四字

積夢窓三餘暇。仄。猶語漢篇。平。

欠葱嶺万里遊。平。還執梵筴。仄。

疎隔句 上三字、下七字。但下句五七八九十亦不妨。或不限多少。可依時也。但可問達識者也。

秋月明。平。南樓雲晴之曉。仄。

春花綻。仄。上林風扇之時。平。

山復山。平。何工削成青岩之石。仄。

水復水。仄。誰家染出碧潭之波。平。

密隔句 上五六七八九字、下三字

菓則上林苑之所獻。仄。倉自消。平。

酒則下若村之所傳。平。傾甚美。仄。

平隔句 上下字數齊等也。上下共四字、或五六七八九字亦不妨。

北山桂樹。仄。權奇已同。平。

上林桃花。平。顏色相似。仄。

進寸而退尺。仄。常一以貫之。平。

日往而月來。平。則就中甚矣。仄。

雜隔句 上四字、下五·七·八字。或下四字、上五·七·八字。或上五字、下四·六·七。

八·九·十二字。或上六字、下五·七·八·九·十字。或上五·七字、下四·五·

六·七·八·九·十一字。或上八字、下四·五·六·七·八·九·十一·十二字。

或上九字、下四·五·六·七·八·九·十·十三字。或上十字、下四·五·六·七·

八·九·十一字。或上十三字、下七字也。

悔不可追。平。寧勞於駟馬。仄。

行而無迹。仄。豈繫於少衢。平。

青苔鋪設。仄。自展七淨瑠璃之茵。平。

紅葉亂飛。平。暗成千花錦繡之帳。仄。

花下之春遊。平。揮神筆以手書御製。仄。

月前之秋宴。仄。吹玉笛以自操雅音。平。

四海皆悉仁思。平。最深者渭陽鳴咽之曉浪。仄。

双林忽唱滅度。仄。至悲者椒庭琴君之秋風。平。

念極樂之間一夜。仄。山月正圓。平。

先勾曲之會三朝。平。洞花欲落。仄。

南望則有關路之長。平。行人征馬駉驛於翠簾之下。仄。

東顧亦有林塘之妙。仄。紫鴛白鷺逍遙於禾檻之前。平。

隔句者已上其體多。然而世之所用。大略不過之。但以前句中上四下六、并上六下四之句、可爲最平。

第七漫句 四五六七八九十餘字也。或施頭。或施尾。或送句。不用對。不用平仄也。

無端二千年前竺乾有大願預。老々大々至死無知其界畔。各爲圓覺伽藍以四聖六凡一齊繫絆。三是

句共漫句也。乘拂提綱中之語也。

第八送句 一二三字無對。或有對。施尾者也。而已、者賦、哉、也、耳。是等也。

第二章 雪村

第一節 傳記

雪村は南北朝時代に於ける佛教詩人なり。其生涯半は禪的にして半は詩的なり。其出世間的たるに於ては一也。而して特に崎嶇の經歷に富む。

雪村名は有梅、雪村は字にして自から幻空と號す。越後白鳥の人、姓は源氏、母は須田氏、夢に南都東大寺の大鐘を呑み覺めて身むと云ふ。正應三年を以て誕る。生るゝに逮んで丰姿秀挺、蚤く寧一山に禮し、左右に服勤し、苦勞倫に絶す。稍長して登壇受戒錫を建仁に掛け、參禪の餘暇、指を儒書に染め、莊子に通ぜり。十八歳にして渡海す。京國に觀光すること二年にして山水を探り叢林を討す。其の所謂杖頭興發の松山顛路借溥陽歷叢社とせるものは是也。其の元叟虚谷東嶼晦機等の諸衲を訪ふや、機峰敢て譲らず、雄心落々たり。曾て一日時の書道の巨擘趙子昂を翰苑に訪ふや、彼李北海の筆勢を揮ひて之を驚かす。子昂貽るに一大磨煤を以てし、八法を得たりと稱す。爾來交信あり。後湖の道場に登り、叔平和尙に依る。元の仁宗、日本人に對する舊怨を以て彼を捕へて湖州曹川の獄に投じ、鞠勘萬端刑吏白刃を彼に加ふ。彼恬然として懼れず、佛光遺兵の一偈、乾坤無地立孤筇の四句を朗誦